
幼馴染みは勇者と魔王の娘。

DIOrennji

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染みは勇者と魔王の娘。

【Zコード】

Z6903X

【作者名】

DIOrenn.君

【あらすじ】

従来の日本を含め、世界は各地で紛争を起こしつつもどこか安定していた。だが、とある事情を筆頭に第三次世界大戦は勃発しかけてしまう。そんな世界滅亡を賭けた戦いを止めた

のは、日本でもアメリカでも中国でもロシアでもなく『魔王』と『勇者』だった。未然に防がれた大戦から数年後に、魔王と勇者によって建てられた世界唯一の『魔法学校』。

主人公こと新崎真人は魔法学校に在校する高等部一年。眼が凄まじく良い以外は至って普通なのだが、彼の幼馴染みである少女は勇者

と魔王の一人娘という、全くもつて普通ではない『幼馴染み』だつた！

作者が自由に書いているので若干カオス要素と微弱のグロを含みます。日曜を目処に更新していくますが、別の日に投稿した上で日曜でも更新するかもしれません。

「魔王」

それはどの世界や話題や論理から倫理まで。…最後の一一つはよく分からぬが。そんなじつでもいい話は置いておいて、まあ。あれだ。大体悪い奴だつたりする。

子供の頃の俺は『魔王を倒すんだ！』と夢を見ていた節もあるし、大方の人達だつて子供の頃は形は違えど、『悪い敵を倒そう！』という夢を持つていただろ。

その夢が現実にありえない。という事は大きくなるにつれ少しづつ分かっていく。それは大人になれるのか純粋な心が消えていくるのか。なんて難しい話でもない。

ただ、俺は…。特殊な、というか。異例すぎる夢の壊れ方をした。…。ああ、ショックだつたね。まさか壊れるまでの期間が。

『三秒』

そう、「三秒」だつたとは思いもしなかつた。といづか早すぎないか？今思い返しても早すぎる。

カッ普ラーメンが出来るのですら「三分」かかるといつて、俺の夢が壊れる速度なんて「三秒」だつた。カッ普ラーメンよりも早いのか。

まばたき数回程度で夢を破壊されたのかと思つと、溜息が今でも出そつになるな。

そんな折。

パチパチバチンパチバチンパチ！！

絶対誰かがわざと強く叩いている。という拍手音が俺の意識を現実へと引き戻した。

一瞬だけ不快な気持ちになりかけたが、直ぐに俺はどじどじうこう状況にいるのかを思い出す。

そうだった。今日は『入学式』だつたな。

この学校に新しく入学してくる『新入生』を迎える大切な式。長い教頭の話を半ば意識をどこかに飛ばしながら、聞いていたので忘れていた。

辺りを見渡してみれば、周りには俺と同じ制服姿の同級生が列を成らして立っている。そして皆一様に拍手を成らしている中、とある人物が壇上へと上がつていった。

…とある人とは、先程の俺の最短夢破壊記録保持者だ。

短い黒髪に整つた顔立ちだが、顎あごから少しだけ生えているヒゲが何ともオヤジらしさを引き立てており。

イケメンというよりは、ダンディといつ言葉が似合う such a good-looking そうな印象を受ける。

すとん。すとん。とやけに歩くたびに音が鳴るその人の足取りが止まるとき同時に、顎にちょこちょこと生えているヒゲが似合う相応の雰囲気を出しながら。

専用の机に置かれたマイクを何故かわざわざ手に取り、その人は喋り始めた。

「まず最初に」

「ほん。と咳払いをした後に。

「本校に入学した新入生、おめでとう」

成人男性の特徴ある太く低い音。毅然とした態度からは、規律正しく礼儀の良さが伺えるように見えなくも無い。

「俺がここの中の校長をやつて『魔王だ！』

せうじと当然のことく。

隠し事なんてありませんよ。と堂々としながら印象第一位になる言葉を言ったと同時に、先程まで俺の後ろから聞こえていた新入生達の雑音が消える。

まあ…当然だろつ。

うろたえる新入生達を見て、突如『魔王』はニヤリと下品な笑みを浮かべ鼻の下を伸ばした。

そろそろだな。

俺は咄嗟に左右の耳穴を、両手の人差し指で捻じ込むように塞ぐ。同時に、校長である『魔王』は続きの言葉を言った。

「そして、俺と寝たい奴はいつでも受け付け　」

だが、最後まで続かなかった。

魔王が立っている壇上の端にある垂れ幕から、突如として小規模の雷のような電撃が魔王に炸裂したからだ。

かなりの広さを誇っているはずの体育館に、ドジャボオギヤアーンンンンン。という空気さえ裂いているかのような轟音（ひびきおと）が響く。

そして、一呼吸置いて俺の後ろから様々な感情が入り混じった悲鳴

が上がった。

対して俺を含め周りにいる人達は轟音に身を竦ませはしたもの、直ぐに元の状態へと戻る。

正直な所、皆が皆この出来事に慣れていた。まるで恒例行事のように入学式に限らず学期ごとに起つていたらそりや そりなるだろ。

「ジヨークだジヨーク、そう怒るな。真面目にやるから」

あれだけの電撃らしき攻撃を喰らつておきながら、モクモクと立ち上る煙から平気な顔をして姿を現す魔王。

絶対に心の底から言つていたな、せっかの。俺を含め心中では皆同じ事を思つただろ。

そんな生徒達の心に田を向けず、魔王は続けていった。

「ここからは現高等部生徒会長に代わりたいと想つ」

鼻の下を伸ばしていた『スケベオヤジ』状態と打つて変わって、魔王は急に真面目になる。

魔王がマイクの置いてある台から一礼して離れる。すれ違つように、黒と黄が混ざつた長髪の少女が垂れ幕から出て來た。

少女はこの学校専用の青と黄色の制服を、皺^{しわ}や染み一つなく着こなしている。

あいつの性格を考えると当たり前だな……。

俺は欠伸をしながら、生まれた時からの付き合いである少女を見つめた。丁度マイクに口を近づけている最中だったらしく、すぐに声が聞こえてきた。

「初めましての方は初めまして」

清く透き通った声。いつ聞いても心地が良くなるそんな声。小さく頃からよく聞いていた。

「現高等部生徒会長を務めさせている、朝倉勇魔あさくらゆうまです」

勇魔と名乗った少女は喋つてこる途中で、黄と黒の髪を左へ晒しながら垂れ幕の方へと顔を向ける。
ぼそぼそ、と少しばかり口を動かすと。再び俺達のいる正面へと顔を向けて、凶切っていた言葉を紡ぎだした。

「先程喋っていた『魔王』の娘です」

後方が、ざわつき始める。が。

勇魔は一息付きながら、片方が黒でもう片方が黄の瞳を少しばかり閉じたら。

自然と。ざわめきは黙つた。

沈黙を打ち破るかのように、勇魔は目を見開く。

そして、締めくくりであり最終的であり始まりの言葉を。呟いた。

「新入生の皆さん。よつこそ。魔法学校へ」

新たな学生を迎えた入学式を終え、俺はゆっくりとした足取りで教室に向かっていたのだが。

「新崎ー！ ちょっと待っててくれーー！」

俺の名前と共に、聞き覚えのある声と駆けるような足音が聞こえてくる。後ろを振り向いてみれば、一いち方に右手を振りながら走つてくる青年が一人いた。

特に今現在用事はなく、かといって急ぐような時間でもないので俺はその場で立ち止まる。

「ぜえ、はあ。ぜえ……はああ。と息を荒げ、よつやく数秒経つて追いついた青年。

青年は学校指定の制服を着崩しており、中からは違[反色]である赤色のシャツが一切隠すことなく見えている。

髪はライオンの鬚たてがみのような茶色に染めて、綺麗に固めていた。これらの青年の容姿からは少しばかりヤンチャをしているのだろうという印象を受けるだろう。

実際そなうなのだから困る。ヤンキーが実は優しかったという伏線といふかギャップという物を期待したいが、そんな事は断じてない。

「…それで、気丈。ビーッした？」

俺の目の前に見える青年こと、氣丈徹あじじょうとおりは昔からの付き合なまこであり親友だ。

ここでは良く漫画やアニメやゲームなどといった、娯楽に関する物に出でくる『エロキャラ』を模範にしたような奴で。

女であれば手をなりふりかけずかけるという、ある種では最低な部類に入る性格をしている。

けれど、それ以上に良い所はあったり……。しないな。利点はあるが良い所はないな。

利点というのは、やたらとイケメンだったりする所ぐらいだらう。キャラで損してそうだ。

「……何かすっげえ失礼な事を考えてないか？」新崎

先程まで前かがみで息切れを起こしていたはずの氣丈は、いつの間にかこちらを見ながら顔を少し顰しかめていた。

「いや、特に」

「ならいいけどよ。ところで、俺は一組だけど新崎って何組だっけ？」

「一組です！」

俺が答えるよりも先に、ちらりと聞き覚えのある可愛らじこ声が割り込む。

ちらりと、声の聞こえた方へと顔を向けてみれば、こここの女子生徒の制服を着た少女が一人の中間に立っていた。

黄色の髪を束ねたツインテール。そして真っ赤なリボンが髪の出所を結んでいる。顔はどこかまだ幼さが残つており、少女と女性の中間辺りを見ているかのようだ。

少女は、にこりと周りを明るくするような笑顔を零ほした後に呟く。

「……お久しぶりですね、気丈さん！」

少女に話しかけられた途端。女の子との接し方は慣れているはずの氣丈は硬直して。

「ちよつと俺用事思い出したから帰」

少女は「」の場から立ち去り、とした氣丈の腕を、すぐそのまま片手で掴み取り。

「駄目ですよー。話はまだ終わってないですから。ね……？」

最後の部分をやたらと強調しながら、びくびくと怯える氣丈を逃げられないようになした。

氣丈…。千載一遇のタイミングを…。

「兄さん達もこれから教室でホームルーム？」

少女は無垢な瞳をこちらに向けるながら、俺の事を『兄さん』と呼ぶ。よく似てないなどと言われるが、実はこの少女は俺の妹だ。名前は新崎桜。

礼儀正しく、性格も良く、頭も良く、運動も出来、まるで俺が駄目な所を全て持っているかのようなハイスペックすぎる妹。独特な黄色のツインテールと、体から顔つきまで美少女すぎる性能も極まってかとにかくモテまくる。

そして唯一俺の知っている中では常識人だったりもする。

「多分な、実際に教室に行つてみないと分からぬ」

俺が適当に答えると桜は「なんだ」とだけ呟いて、今度は氣丈の方へと顔を向けた。

「そりいえば、気丈さん」

「な、何?」

「さつき話してた下級生の子、可愛らしかったですね」

桜の満面の笑みを受けている気丈は、だらだらだらだらだらだら。と効果音が聞こえそうな程に大量の冷や汗を流す。

だが気丈は何か内から出る恐怖を抑えつつ、「あはは…」と無理に引きついた笑いをしながら返答した。

伊達にほぼ全ての女性を愛している宣言をしただけあるな…。お陰で首を絞めてるが…。

「ふふふ。気丈さん。あまりヤン」

妹が喋っている最中。ガシャガシャンンンンッ。と大量な何かが床に落ちた音が響く。

俺と気丈は音に驚いて床を見れば、カバーがかかっている包丁が大量に落ちていた。

ざつと十一本ほど。

「あ、家庭科用に持ってきた万能包丁が落ちちゃった」

拾い上げる我が妹。ただ兄である俺から言わせて貰うと。その落とした量と所持している理由は、…無理があると思つぞ。

気丈を見れば、小刻みに体を震わせながら恐怖に打ちひしがれていった。

俺は気丈の隣へと行き、肩に手を置きながら耳元で囁く。ささやく

「…逃げるなら今のうちしかないぞ」

言葉が脳に直結したのか、氣丈は震える体を抑えながら立ち戻り。

「す、すまん桜ちゃん。急用を思い出したからでちょっと行って来る…！」

人間が出せるのかと思えるほどダッシュで廊下を駆け逃げる。その後姿を見ながら俺は呟いた。

「…生きて会えるなら会おうな、氣丈。」

対して桜はガチャガチャ。と独特の金属音を鳴らし服に包丁をしまいながら喋る。

「兄さん

「ん？」

「これ

桜が右手で差し出してきたのは、丁度携帯機に付ける小型のイヤホンの片方。…付けろって事か。

右耳に刺し込んで最初に聞こえてきたのは、軽いノイズと聞き覚えのある声。

『はあ…はあ…。』ここまで来ればさすがの桜ちゃんでも撒けただろう

…』

氣丈…。

クラスが新しくなろうが、十年近くこの学校にいれば知り合いがないという事はあまりない。

そんな訳で、新しいクラスメイトは殆ど変わりが無かつたが。変わつたクラスメイトはいた。

『途上藍』
とじょあいあい

名前から既に珍しかつた途上藍といふ名の少女は、最初から田立つていたのを覚えている。

「発展途上の『途上』に藍色の『藍』で…、途上藍つて言います…」

少しでもクラスがざわつけば聞き取れないほどの小さな声。あまり外に出ていないのか、一般的な小麦色よりも薄い肌色。

「蓝ちゃん…、よろしくお願ひします…」

水色の風に流されているかのよつた髪。小柄な体からは触れれば折れそうな印象さえ受けた。

ホームルームが終われば、担任からは「はははは！ 無理なら無理だとはつきり言えばいい！」と無神経なのが優しいのか分からぬい言葉を投げかけられ。

クラスメイトからはただでさえ新しい面子といふ事もある上に、美少女だったという事もあって大人數に質問攻めにされ、完全に萎縮していたな、あの娘。クラスメイトの奴らもほどほどにすればいいのだが…。それはさておいてだな。

その絶賛有名人状態の途上藍が、学校を出て三十分ほどかかつて到着する寮入り口前にて右往左往している。

「……やから、……もしかしたら……」

何か呟いてるのは聞こえるが、彼女との距離があるせいか内容が全部聞き取れない。

しかし、何もなくあんな所で右往左往する必要はないだろうし。とりあえず話だけでも掛けてみるか。

「何か困った事でもあつたのか？」

「えひうつー？」

俺に話しかれると、途上藍は体を大きく跳ね上げ変な声を出した。

「すまん、そこまで驚くとは思つていなかつた」

余程驚いたのか、少しだけ震えている途上藍へと近づいて謝る俺。うーむ。これじゃ俺もクラスメイトとあまり変わりが無い。

「い、いえ。こちらこそすいません」

ウェーブのかかった青色の髪を、大きく上↑に揺らしながら謝る途上藍。お陰で女の子特有の臭いが香つて来る。何でだろうな。男の臭いなんて死ぬほど嫌だが、女の子の臭いとなると一転して良い臭いになる。

女性フェロモンとかが関係してるだとかという話も聞いた事があるが…よく覚えていない。まあいいや、考えてもどうせ分からんに決まっている。

「…とにかく、何で寮の前なんかで立ち往生してるんだ？」

俺が質問すると聞いた事が悪かったのか、途上藍は顔を暗くしながら田線を下へと落とした。…何か言えなによつた理由があるのか。質問するべきじゃなかつたな。

あー。と言いながら何か共通の話題を考えるが、初対面なのに相手の趣味とかが分かるわけがない。やばいなこれ、余計に詰み始めてきてないか？

「…すいません。理由も言えないなんて」

「いや、謝るのは俺の方だ。途上さんが謝る」とじじゃない

「…ほんまにすいません。何か心配を掛けちゃって」

「……え？」

氣のせいか俺には、途上藍が今関西弁を使つてゐるよつて聞こえたんだが…。

俺の^{あせん}唚然とした声と態度を田の間たりにした途上藍は、首を軽く傾げた後。数秒経つて。

「ま、またウチ関西弁なんて使つてしまああああああああああああ！」

「

大きく瞳と口を開けて叫びながら、両手で頭を抱え込んだ。

今度は聞き間違いじゃないな…。俺の田の前にいるこの娘は、関西弁をバリバリ喋つている。

「隠すのは下手やけど、いろんな早くバレるなんて。ウチ、ほんまに駄目や…」

いつまでも続く奈落の海のように、深い青色の瞳をつむませながら
呟く途上藍。見ていると可愛い。

「せ、せやー　いい案があるやん！！」

突然嬉しそうな顔をして、涙を空へと払ったと思えば、食い入るよう^よに俺を見る。喜怒哀楽が激しいな。

「お願いや、ウチが関西弁喋るつて事をクラスの人々に黙つておいて
くれへん!?」

俺の両腕を掴みながら、下から伺うように顔を覗きこんでくる。や
ばい、かなり顔が近い。非常に顔の向け所に困る。

「別にいいが。せめて理由ぐらには言つてくれないか？」

「り、ゆづ？」

俺の言葉に、酷く顔を歪ませ露骨に反応を見せる。……これ以上は
地雷の臭いしかしない。戦略的撤退を取る事にするか。

「いや、いい。聞かなかつた事にしてくれ。悪い」

この場は立ち去つた方がいいだろう。俺は彼女に軽く謝りながら、
寮に入る事にした。

「……あ」

後ろから声がしたが、俺は振り向かずに寮の中へと入つていく。少し経つた後よくよく考えたら、結局彼女の手助け出来てないな…。

「あらあら。お帰りなさい新崎さん」

いつまでも行き止まりが見えない廊下歩いている時、ふと右のほうから柔らかい声がした。この癒し効果のある声を持っているって事は、あの人か。

「瀬名さんですか？」

右へ顔を向けて見ると、扉の向こうで割烹着姿に長く淡いレモン色のような髪を曝け出して。柔らかい笑みをこちらに向けている女性がいる。

扉の上には「104」と書かれたナンバープレートが貼り付けられており、扉には「空室」と達筆に書かれた紙が貼り付けていた。空室なら入るか。もしこれが女子の部屋とかだったら笑えない事になるから入らないが…。

「はいー。一度部屋のお手入れの最中です」

待つてくれたのか、単純に反応が遅いのか分からぬ返事が来る。

このなんともおうとりした喋りをしている女性は『瀬名』さんだ。彼女は、近くに花でも咲いているのかと思えるくらいにほのぼのしている。更にはのんびりとした性格と合わせてか、非常に魔法学校の生徒からは親しまれている。

寮の管理人でよく料理を作つては一緒に夕食を食べさせてくれるからというのも、生徒の信頼をいつのまにか手に入れていた理由の一つかもしれない。

だが、彼女はただの『人』じゃない。美人で料理をよく作ってくれて親身になつてくれてスタイルが良くて素晴らしい聖人君子のような人でもだ。

『勇者』

彼女の『じちり』の俗称であり、敬称であり偶像であり滅多に言われない名前で職業もある。同時に校長をやつてる『魔王』の嫁さんだ。セクハラしまくる田那さんは、魔王と勇者という関係も含めて対極のような存在。

そんな世界の手綱を握っていたはずの瀬名さんは、あらあらー？と左手の人差し指を頬に当てながら呟き。

「そういえば、ゆーまちやんが新崎さんを呼んでいましたよー」

ゆーまちは朝倉勇魔のあだ名だ。そしてあいつに呼ばれるという事は非常に厄介な事に巻き込まれるのだろうな…。うん、逃げたい。しかし殺人的に綺麗な瀬名さんの頼みを無下にするのも気が引けたので、俺は快く居場所を聞くことにした。

「今どこにいると思います？」

「あの娘は…。たぶん、自室にいるはずですよー」

てことは、あいつの部屋にわざわざ自室訪問しにいかないといけないのか。わーお。

俺は溜息を吐きながら瀬名さんとの別れを惜しみつつ、その場を後に廊下を再び歩き始める。

…。それでも、絶対ここは寮ではないな。毎回思うが。

普通の寮ならば部屋は小さく、他の寮生との共有使用が当たり前なのだが。ここは一切として『寮の常識』というのを考えていません。一人一部屋は当たり前として大きな広間一つ、ダイニングキッチン、更には寝室、個室の風呂場までつけておりそれも大きい。

どういう事だ…、寮よりも超高級ホテルといったほうがいいんじゃないのか？ とさえ思えるほどに常識に懸け離れている。

一軒家の一階部分が一部屋として機能している。単位とスケールがおかしい。

そんな事を考えていると、「124」ナンバーである勇魔の部屋扉前へと辿り着いた。とりあえずノックぐらいはしておくか。

「どなたですかー？」

「真人まことだ」

真人というのは俺の下の名前だから、これを言えばすぐ開けてくれると思ったのだが。

「……まつ、真人つつ！？ ちょ、ちょっと部屋片付けるからまつ」

きやあああああああああああつつ…！…ドタドタドンドンガーン…！…物凄い悲鳴と騒音が、部屋の中から木靈こだまして廊下まで響いてきた。まさか、何かあつたのか！？

「勇魔、大丈夫か！？」

俺は思い切りドアノブを回し、急いで部屋の状況を確認しようとした。が、それが悪かった。

「あ

一声。

視界に映っているのは、リビングのような広い部屋。その床に大量の洗濯物らしき物を、撒き散らしながら倒れている下着姿の少女。少女が身に着けているのは可愛らしい黒と白のコントラストが成されているパンツとブラ。しかも豊満な体付きだからか微妙にキツそくにも見えた。

洗濯物が撒き散らされてる所から予想すると、風呂から上がったついでに洗濯物を片付けようとしていたんだろうな。

さて、こんな絶妙なタイミングだが。一つ言おう。

俺は常人を遥かに超越する眼を持つている。具体的に説明するなら、視界に入るものが全てが『スローモーション』に見える程の。凝視すれば、スローモーションよりも上のストップモーションともいいくべきか。それが出来るのだが……。

つまりは、あれだ。

この少女の下着姿が、仕方が無く。そうだ、不可抗力でも。あれだ。うん。

逃げよう。

急いで廊下までダッシュしようとした直後、誰かが俺の腕を掴んで束縛して逃げられない。

冷や汗を搔きながら後ろを振り返つてみれば、殺意を込めた眼を、ギラつかせている少女が俺の腕を掴んでいた。

「待ちなさいよ……」

ああ、こういう気分なのか。気丈は。

俺は未だに痛む頬を、効果がないと知りつつも撫でながら歩く。

「ありえない、本当にありえない。女の子の部屋に入る時ぐらいノックぐらいしなさいよ！！」

その隣では両腕を組み仁王像の如き怒りをこちらに向けている少女が一人。黄色と黒の入り混じった髪と瞳を携え、髪は学校指定の制服のスカートまで届いており、すらりとした肢体は指定の制服に包まれている。

俗に『美少女』というカテゴリーに入るこの少女は、俺の『幼馴染』であり勇者と魔王の一人娘である、『朝倉勇魔』だ。

こいつとは幼少の頃から行動を共にし、時には喧嘩を交え、そしてどこともなくどちらかが謝つて仲直りをしたりと、様々な経験を交えていた。

しかし、俺の知っている幼馴染とは懸け離れていた。普通はもうちょっと優しかったりもするんだが、こいつの場合は真反対すぎる。男勝りな上に毒舌で、自分に例え非があつたとしても逆切れを起こそ、そのくせ大抵の事を面倒くさがるという傍若無人っぷりを遺憾なく發揮しているのだ。

「ほんつつと最低、しかもあんなタイミングで入つて来るなんて
！」

そんな勇魔の台詞を聞くと、さつき見た映像が蘇つて来る。あられもなく白日の下に晒された触ると柔らかそうな素肌、恥ずかしうぎて真つ赤に熟れさせた顔。

…うーむ、いかん。俺は脳裏に焼きつきそのままになつた煩惱を払いいつ、反論した。

「あのな勇魔、一つ言つていいか」

「何よ」

「俺はお前が誰かに襲われているのかと思つて入つただけだ。悪くないはずだ」

「例えそうだとしても、見た時点で前科付きよ

「……」

あの後結局俺は勇魔から頬に思い切り右ストレートを喰らひ、のた打ち回つている所に罵詈雑言を浴びせられた。

悪魔か。お前は。

「悪魔ねえ…、殺されたいの？」

「…また『魔法』で心を読んだのか」

俺は勇魔のたっぷり込められた殺意の言葉を無視しつつ、冷静に答える。因みに『魔法』で心を読んだというのはそのままの意味だ。この世界にある『魔法』というは何でも出来る。本当にありとあらゆる事であるつとも、だ。

例えば手からレーザーを放とうと思えば『魔法』を使えば出来るし、テレポートしたければ同様に出来る。それでも、色々と制約が付くが。

「何ナレーター風になつてんのよ」

「あのは、心を読むのやめてくれ。落ち着いてられん」

「べ、別にあんたの事なんて気にならないわよー。」

俺は何も言つてないが…。

「もーつー！ そんな事はどうでもいいのよー。早く準備室行くわよー！」

勇魔は右手で俺の左腕を掴み、足を早めながら前を向いてしまった。
…？ 何をそんなに焦つてるんだ。

「焦つてないわよ！」

「分かつた、分かつたから『魔法』を使わないでくれ。思つている
事を読まるのは本当に落ち着かん」

「あーもつ。ほらー！ これでいいでしょ。早く行くわよー！」

これでいいでしょ。つて言つたとしても、実際にやめたかどうかは
本人以外判別出来ないんだがな。やれやれ。

勇魔は未だ新しい廊下をぐいぐいと俺を引っ張りながら進んでいく。
今現在俺達は寮を出て行き、『魔法学校』へ戻った後『高等部一階
廊下』を歩いている訳だが。

俺は先程の勇魔との出来事を思い出す。煩悩の方じやなくてな。

『そつよ。魔法学校といつても最初に入つたのが私達なんだから、
高等部はまったくと言つていい程使つてないの。だから教師さん達

の資料とか道具とかを予め軽く整理しないと、いざといふ時困るのよ』

朝倉勇魔は『現高等部生徒会長』だ。実質的には一番権限を持つているのだが。

『私達がや、る、の、よ。人望つてのはそいやつて初めて着いてくる物なんだから』

やれやれ。耳を傾けやしない。

厄介事というか雑用みたいな仕事を手伝わされる事となつた俺としては、面倒極まりない。

「着いた」

勇魔は『準備室』と書かれた場所で足取りを止めると、スカートのポケット部分から鍵を取り出し扉の鍵を開ける。ドアノブが回転しながら、部屋の中が見えていった。

「…埃が酷いな」

俺の第一声がこれだ。

扉を開いてみる図書館の本棚のような物が立てられており、埃がその上に雪のように積もつている。部屋の小窓から刺し込んだ光によつて、普段見えない空気中の埃も反射していた。

さすがは、俺達と同世代に出来た高校。高等部に入つてくるまで誰一人として使つて貰えなかつたんだな。

「は、入るわよ」

若干現場の悲惨さを見て怖気づいたのか、いつもの勢いがないまま勇魔が資料室へ入つていく。続いて俺。中は予想していたよりも広かつた。

まず入る時に見えた本棚みたいな奴が横一列に並んでおり、途切れかと思えば小さな正方形の机と椅子が置かれている。本棚らしき物には資料や道具が詰められたダンボールが置いてあり、殆ど触つた形跡がないので本当に置きっぱなしのようだつた。

「とりあえずは窓を開けて」

勇魔が部屋の隅にあるロッカーを発見したらしく、中から簞を取り出す。俺は勇魔の指示通りに小窓を開けた。

ガシャン。と内鍵が解ける音と共に、意外に軽かつた小窓を全快にしてやる。…、風通しが良くなつたせいで少し肌寒い。

そこから先は勇魔と共に部屋の中を簞で掃いたり、雑巾を使って小窓や床や棚なんかを拭いたりした。

汚れが。というより埃が取れる取れる。別に大量に取れたつて意味はないが。鍊金術が使えるわけでもないからな。

ある程度部屋全体を綺麗にし終えた頃、勇魔が「届かないわね…」なんて言いながら棚の一一番上を見上げていた。

「ほら」

俺は部屋を掃除していた時に見付けた三段型の脚立を、勇魔の目の前に差し出す。

「あ、ありがとう」

若干戸惑いながらも脚立を受け取り、その場で開いて上つていった。

そんなに俺が人の手助けをするのが珍しいのか…。

暫くの間勇魔は「ふんふふーん」とか鼻笛を吹くぐらい余裕を持ちながら、ダンボールを退かしつつ棚を拭いていたのだが。何かの弾みで、足を踏み外したのかもしれないし降りようとしたのかは分からないが。崩した。

『バランスを』

「あ。」

がらつ。 が が ど ゆっくりと両手を前に突き出し後ろ向きに落ちていく勇魔。

だが、俺は生憎にも必然的にも偶然にも『全てがスローモーションに見える眼』を持つていたので。

反射的に反応出来、落ちてくる勇魔を抱きかかる事に成功はしたのは良かった。そこまでは。

そこからが問題なのだ。

俺は『普通』の男子高校生だ。スポーツをしてる訳ではなく勉強をしている訳でもない。

咄嗟に落ちてくる女の子を受け止められる程の筋肉があつた訳でもなかつた。あるいは勇魔が他とは違ひ重…。いや何でもない。

だから、俺は受け止められたはいいが。一緒にその場でバランスを崩し倒れこんでしまう。

幸いにも埃は掃除したばかりなので立たなかつたのだが、一つ問題が発生した。

衝撃に備え眼を閉じていたので、落ち着いた頃に開いたのだが…。いや、眼を疑つたね。

俺が勇魔に『キス』してしまった。それも勇魔の体に四つん這いで乗りながらだ。

ここに他の誰かが見れば、強盗か何かが偶然犯行を見てしまった少女の口を押さえ付けている所と勘違いされるだろう。押さえ込んでいるのは手ではなく『口』だが。

「！」

正に眼前で見える勇魔は、眼を大きく見開いていた。今起こつてゐる事実を理解出来ない、といふか衝撃すぎて…か？

「ツツ！－！ 真人の馬鹿ああああああああああああああああああああああ
ああつつつ－！－！」

数秒経つてようやく何をされたか理解出来た勇魔に、俺は大きく後ろに突き飛ばされ床に尻餅を着いた。意外と痛い。

柔らかかった。との一言に限る感想。しかし、男の俺はいいとしても女の子の『ファーストキス』は大切だろう。少なくともこんな場面で失くす物ではなかつたはずだ。

俺はまず土下座で謝ろうと思いつ、勇魔の方へと顔を見上げてみると。

مکاری

少女が『二人』いた。

あの出来事から数時間が経つた今、俺は勇魔の両親が住んでいる家に来ていた。といつても寮の部屋の一間に当たるのだが。

「よう。込み入った話つて何だ？」

勇魔の父親でもあると同時に『魔王』でもある『朝倉淳』は、部屋の中央にある円卓を俺との間に挟みあぐらで座り込む。

「新崎クンがここで真面目な顔をするなんてなあ……？」

「せいや。ヒロと眼をいやらしく歪ませながらこちらを見る魔王。……また、これじゃ俺がまるで女子関係で悩んでいて相談しに来たみたいじやないか。

笑えない事に、実際その通りなのだが。

「まあまあ、新崎さんも春な年頃なんですねえ」

オレンジジュースの入ったコップを茶色のトレイで持ってきているのは、勇魔の母親でもあると同時に『勇者』でもある『朝倉瀬名』さんだ。

どちらかといづれ、「春な年頃」ではなく「春が訪れた」という表現の方が正しいですが。しかし瀬名さんが「春」と考えるのなら「春な年頃」が正しいです。はい。

「やうだな、俺もそり思つぞ」

「せりと勇魔と同じよつに心を読まないで下わー」

そこで瀬名さんは「あれれえ？」と人差し指を頬に当て首を傾げた。正直言つてその動作は反則的に可愛すぎる。何故カメラを持つていなかつたんだ俺は。

「新崎さんの話を聞いていたら思い出しましたけど、ゆーまちやん遅いですねー」

彼女が時計を見ながら、娘を心配する複雑な表情をした直後。

「母さん」
「お母さん」

『一いつ』の声がした。同じ音程の、同じ声色の、同じタイミングの。ただ、声に込められた精神だけが違う。俺達が声のした方へ振り返つてみると、立っていた人物は。左右に立ち並ぶ『二人』の少女。

少女達は姿こそ瀬名さんとまるで瓜二つのだが、目付きから雰囲気まで随所に瀬名さんとは違う箇所がある。

「適切な処置を求めます」

右の少女は瀬名さんと同じ黄色を水に溶かしたような淡い色の髪をさらさらと空で晒しながら、瀬名さんを見つめ続けた。

背筋をピンと伸ばし、一切の感情の変化を覗かせない瞳。整然とした態度からは、厳格なイメージしか受け取れない。一番苦手なタイプかもしけん。

「そーよ。そー。母さん達。新崎を処刑する権限を貰つてもいいかしら?」

左の少女は魔王と同じ漆黒に満ちた。というか全部の色を『こぢゃ』混ぜにしたような黒色の髪を棚引たなびかせ、黒く苛立ちを見せる。

背筋を緩め、常に苛立つているかのようなキツい瞳。近づきたくない霧囲氣からは、人付き合いが大変そうなイメージしか浮かばないな。

そんな彼女達を一瞥いちべつした後に、俺は軽く再び頭を下げながら。

「すいません。『彼女』がああなつてしまつたのも俺のせいなんです」

「『彼女』？ 達じやなくてか？」

「はい。まずはそれも兼ねて説明します」

1

俺の説明がある程度が終わると、滅多に見ない真面目な顔を魔王がしながら。

「で。勇魔にキスした時には既に裸の状態でこの『一人』に分かれていたと」

「冗談と信じたいのだが、事実は魔王が言つた通りなのだ。あの時キスの件で謝ろうとしたら、既に『一人』ではなく『一人』になつていた。

以前は黄と黒を織り交ぜた髪だった物が、今では見事にそれぞれの色として分かれている。

「キスに裸を見るか…」

「ぶつぶつと魔王は呟いた後に、突然カツ！ と眼を思い切り見開いた後に。

「おいお前。それラツキースケベだろ？が！ 何で頂かな
「父さんは天の頂いだきにでも行つてればいいのよーー！」

横からライダー キックもどきの飛び蹴りを勇魔（黒）から喰らつて
いた。部屋の隅の壁まで突き飛ばされたが、あの人なら大丈夫だろ
う。… それにしても黒の方はやたらと氣性が激しいな、まるで近く
に俺がいる時の勇魔みたいだ。勇魔の分かれだから当たり前といえ
ば当たり前なんだが。

「あらあらー。丁度娘がもう一人欲しかつたのよねえ」

瀬名さんは「…」と、天使のように微笑みながら勇魔（黄）の方の
頭をやたらと撫でていた。撫でられている方は「あ、その…。そこ
まで撫でられるのも」と先程までの無表情ぶりから一転して、頬を
朱に染め上げながら氣休め程度に抵抗を試みていた。素晴らしい眼
の保養になる。これさえあればさつきの二人組も苦じやないね。
俺までほのぼのしながら眺めていると、いきなり横から勇魔（黒）
から脇腹に蹴りを喰らつた。何しやがる。

「何ニヤついてんのよ。私ばっかり見て」

「お前は見てない。俺はあの温かい空間を遠くから見つめて、干涉
を受けてるんだよ」

「ストーカー。変態。スケベ」

「どうしてそうなる」

「ふん。と鼻を鳴らし再び両腕を組みながら、そっぽを向いた。…気のせいか、さつきより機嫌が悪くなつてないか？」

「はつはー。そのまま既成事実を作れば良かつ」

「その言葉の前に殺人を付けて父さんに送つて上げる！！！」

満面の笑顔を見せながら立ち上がりうとするスケベ魔王に、回し蹴りをしながらマジギレする娘（黒）。娘の方が少しばかり顔を赤くさせているのは、さつきから乱闘をしているからなのか。はたまた恋愛に鋭いが故に恥ずかしがっているのか。あいつの場合だと前者だな。多分。

部屋が静かになつたのは、絶え間なく続ける魔王に勇魔（黒）が息を切らしてからだつた。およそ一時間程度か、そのスタミナがあれば格闘家になれるかもな。

「そうだそうだ。この娘達の名前決めないとなー」

豪快に笑い続ける魔王に對して、「変な事を言つたら承知しないわよ…」といわんばかりの表情をしながら睨む勇魔（黒）。

「うーむ。何か良い案あるか？」

そういうながら、魔王は俺の方を見つめる。言い出した張本人が考えてないか、まあこの人だから当たり前といえば当たり前だが。

「俺に振るんですか」

「なら俺が考えてもいいぞ。そうだな、苗字はどうせ変わるから…」

「ちょっと待つて。今何気に私の苗字変わるって言ったわよね！？」

元のせーざ

「新奇あらうとも何うてゐる!!?

「黒ねづの。黒ねづの！」

「私だけ妙にストレートじゃない！？」

「私だけ妙にストレートじゃなし!? 却下よ却下あ!!!」

勇魔(黒)が断固として拒否した為、**どうか**と思ったので特に何も言わなかつた。

うとするほど時間はかかるだろしだ。以上の理由によつてこれ以後手詰まりになりそうな雰囲気がしたのだが。

「勇氣。 魔氣」

俺がぼーっとしながら、何となく思いついた言葉を叶いた直後。

「あ、それいいわね」

勇魔（黒）が賛成してきた。おいおい、たかだか元の名前にそれぞれ『氣』を付けただけだぞ。眞面目そうなもう片方が却下するに決まっている。

「同じく」

何でだよ。

翌日の学校はちょっととした騒ぎになってしまった。そりや「私達二人合わせて『勇魔』です」何て誰も信じられないに決まっている。ユーニットなら信じられただろうがな。それが本當だと分かってしまうばそうなるだろう。当然俺は主に『あいつ』もとい『あいつら』の関係者と、『ぐく少數に俺の妹から伝ってきたのか下級生の子ら』に質問攻めに遭つた。多すぎる。

「おいおい、モテモテじやねえか」と休憩時間に話しかけてくる気丈を、完璧に無視しながらやるもんじやないと確信出来たね。それでなくとも無視すればするほど調子に乗つて氣丈は話しかけて来るしな。

しかしそれでも当の本人である勇氣と魔氣達に比べれば大分マシな方だろう。あいつらの席の周りにはさつきから引っ切り無しに人が群がつている。俺の数倍くらいか？

さすがにそんな面倒な事は昼食の時まで続けたくなかったので、俺は勇氣と魔氣を半ば引っ張るように連れ出し屋上で昼飯を食つてい るわけだが。

「ん？ あの子モゴ『途上藍』じゃねえか？ モゴモゴ！」

いつの間にか付いてきていた気丈が、エビの天ぷらを頬張りながら未だ白米が数粒付いた割り箸で指し示す。お前な。人を指すな。それと口に食い物入れながら喋るな。

確かに言われてみると、指し示した方には独特の跳ねている髪を兼

ね備えた少女が端の方で一人昼飯を食べていた。表情はビニカ浮かなく視線は弁当にばかり向いている。

「ぱつち飯か、可愛そ
「はーいあなたは黙つててねー」

胸元に拳を捻りながら打ち出すコードクスクリュー・ブローを魔氣から喰らった氣丈は、「ぐぎゅう」と最後の言葉を吐き出しながら田へ田へ燃え尽き機能停止。リアルハートブレイク・ショット状態か。

「ちよつと行つて来る」

その場から立ち上がり途上の所へ歩き出さうとする俺に、魔氣の方が溜息をぬきながら「本当おせつかいね」とだけ呟いていた。その声色は、どことなく嬉しそうに聞こえる。

「また今度はどんな悩みなんだ?」

「ひや、ひやうつー?」

俺が隅に座り込んでいる途上に話しかけると、途上はまたしても体を大きく揺らした後に妙な声を出しながら驚く。この光景昨日も見たな。驚きやすい性格なのかもしれん。

「あ、昨日の人…」

眼を丸めながら、青く透き通った瞳で俺を上田遣いで見つめる途上。ただでさえ可愛らしさが溢れ出ているのに、やつ見られると余計に可愛らしく見える。

「おー、昨日は悪かった

「い、いえ…」

終始おどおどしながら、眼を逸らしては合図を送る。知り合いで
も友人でもないから当たり前か。

「くつへー、ナンパしてやんの」

いやいやと気持ち悪い笑みを浮かべながらこちらの方へ近づいてき
た氣丈。くつちくんな。

「おー、やっぱ可愛いな。どうだい、俺と付き合いならぬ突き
あんたには桜ちゃんがいるでしょ。暴走しないの」

セクハラをしようとする氣丈に、軽く頭にチョップをして釘を刺す
魔氣。さすがに途上がいる前では暴力を振つたりはしない辺りが元
の勇魔らしい。

「それより、途上さんだよね？」

「は、はい」

「もし良かつたらでいいんだけど、私達と一緒に昼食を食べない？

」

「え…、え」

「あ、嫌ならしいのよ。ただね、一人で食べるより皆で食べた方が
美味しいかなと思つただけだから」

「あ…、いえ！ 嫌じないです！」

「なら決まりね」

こいつと柔らかく母親譲りの笑みを見せる魔氣。それにしても前か
ら思つが、『嫌ならしいのよ』って絶対断れない雰囲気になるよな。

「いやつはー！ 美少女ゲットオー！」

途上と一緒に昼食を食べると知るや否や、両手にガツツポーズをしながら歓喜に震える氣丈。いや、別にお前の物じゃないからな。あとそのテンションビートにかしさ。

結局、途上留めて五人で屋上を陣取る事になった。元々こんな所で昼食にする奴らなんていないからな、未だ春といつても肌寒いからだらう。

「新崎じー… てめよくもたこさんワインナーを取りやがったな！ ウインナーは自分のだ ぶげらー！？」

「氣丈…魔氣…お前ら…」

「よし、成敗。それにしても途上さんとの髪つてクセ毛なの？」

「そや」

「そや？」

「ああああああ、そうです。はー、そりなんですー！」

「貴方達は静肅に出来ないのですか…」

「ふはははははー！ 僕はその程度では倒れねえ！ 男のロマンがあるか さうひ」

「男のロマンは認めるが、周囲を女子に囲まれた状態で言つ事じやないだる…」

騒ぎながら食べる昼食とれいりつと奪ったワインナーはやけに美味かつた。たまにはこいつ口も悪くはないかもしれない。

そうだな、ただ一つだけ文句を言えば… 寒すぎや。

「断る」

突然だが、俺は少女三人に向かつて断固とした意思を見せていた。

「何が不満なのよ」

一番右にいる少女こと魔気は両腕を組み、こちらを睨みつける。よく見れば黒色一色である長髪の両側には、赤いリボンが蝶結びで結ばれていた。意外に似合つてゐるな。

「純真無垢な少女の願いを無為にするのは頂けないかと思いますが」

魔気の隣にいる勇氣は凛とした態度で同じく睨みつける。勇気が動くと、ポニー・テールが一緒になつてゆらゆらと揺れた。お前はポーテか、嫌いじやないが。

「いや、そういう事は悪くはない」

「下心丸出しね」

「多少なりと ぐうつ。それは……置いておいて……。途上さん、本当にあの人の所に行くのか？」

俺は唐突に殴られた腹部を押さえ付けながら、発端となつた途上の顔を伺つ。途上は浅瀬の如く綺麗な水色の髪を揺らし……待て、顔を背けてどうする。

「何怖がらせてるのよ……」

「殴るのはやめ ぐつ」

どうしてこうなってるかって？ 数分前まで、俺はただ午後の授業を終えて自室でゆっくりしていた。するとだ、この三人がいきなり部屋へ入ってきて脅迫して来た。『あの人』の所へ行くぞ、とな。やめてくれ、俺は平穏な毎日を教授したい。

「それはともかく、確かに『あの人』の所へ行くのも私もあまり贊成は出来ないです。『あの人』以外でもいいと思つのですが…」

俺と同じ意見を出す勇気に対し、魔気が少しばかり唇を尖らせながら俺を睨む。だから何故俺だ。

「『』の変態」

「おかしいだる…」

「知らないわよ。それに『あの人』なら教える事に関しては妥当なはずよ」

「性格が問題なんだが」

「し、ら、な、い、わ、よ。行くつたら行くの！」

またこいつ機嫌悪くなつてないか？ 機嫌が悪くなるような事はやつた覚えがないんだがな…。やれやれ、女子つて奴は良く分からん。俺と同じ心情だったのか、勇氣も小さな溜息を呑いて諦めたような表情をした。お前の分身だろ、何とかしてくれ。

昨日と同じように強制的に連行され、学校へ行く道から少し外れた場所へと向かう。この方向は『あの人』の家だな。

ピンポーンと魔気が先頭になり一度玄関の前でインター ホンを押した。学校の近くに屋敷を建てるなんてアホな事を考えるのは『あの人』と魔王だけだ、確信してもいいね。

それにしても大きすぎるだらうこの屋敷、いくらお金を掛けてるんだ『あの人』。出所は想像が尽くから聞く。聞く必要がない。

玄関以外は外堀が囲んでおり、よほど変人でない限りは瓦の積み重なった外堀の上から入ろうとすら思わないだらうな。例え登る変人がいたとしても小さい頃に登つて瓦で滑つた俺が保障する、あそこは危険だ。

「んーああ？ 誰だ。私の楽しみを邪魔する奴は」

玄関の扉をパタン！ と大雑把に開けて顔を見せたのは『あの人』だ。もうちょい丁寧に扱わないとかね。

「方恋先生。私達です」

そう。さんざん引っ張りに引っ張つた『あの人』とは、この目の前にいる女性『方恋一余』を指示示す。

ぼさぼさとした手入れがてきと一すぎる黒髪。背筋は伸ばしきて逆に踏ん反り返つてる様に見えさえする。

赤と白が丁寧に分けられた上下セットのジャージを見事に着こなしながら、勝ち誇ったような表情でこちらを見据えた。

「何だ貴様らか。私と一緒に酒を飲みに来たのか？」

喋れば喋るほどに口から物凄い刺激臭がした。平日の、それも仕事をするかもしない時に酒を飲まないでくれ。

「絶対に来る訳がない」

「師匠を前に照れ隠しなど必要ないぞ真人。ほら、今も私の胸元に顔を埋めてなくて仕方がないのだろう？」

「……」

師匠。方恋一余をそう呼ぶよくなつたのは色々な事情があつてな
のだが、回想したくもなければ思い出したくもなかつたので考えな
い。

師匠は無駄に豊満な胸を前に突き出しながら、魔王と同じような下
卑た笑みを浮かべている。…興味がないかと聞かれれば興味はある
が。

「もうじゃなくて、ちよつと先生に『魔法』の授業を受けに来たん
です」

わざわざ腕を先導に、体全体を使って俺と師匠との間に割り込んだ
魔氣。お陰で話が中断して助かつた、何と答えればいいのか困つて
いたしな。

「ん、とにかくそこにはいる途上も関係する事なのか？」

唐突に睨むように見られた途上は、びくつ。と体を揺らし急いで眼
を逸らした。何だこの構図。蛇と鼠ねずみか。

「まあいい。担任の私に頼つてくれるとは貴様らもよく分かつてゐるじ
やないか」

師匠が言つ通り、実は俺達の『担任』であり体育系で酒癖の悪い先
生だ。

開会式当日、豪快に途上を「ははははー、無理なら無理だとはつき
り言えばいい！」と笑っていたのはどこの誰でもなくこの人だ。

「ついてこい」

一言だけ呟き、師匠は扉を開けたまま中庭へと入つていった。俺達も一緒になつて付いて行く。

「ひ、広…！」

久しぶりに途上が喋つた内容は、確かに初めてここに入つた人なら当然の感想だつた。俺も同じ事言つてた気がするしな。
玄関を正面から入つた場所は大きな中庭が広がつており、堂々とでかいの表現しかいえないほどの和風の巨大な屋敷^{そび}が聳えていた。
中庭には大小異なつた石に囲まれた少し濁つた程度の綺麗な池がぽつりと存在していて、色の整つた錦鯉がゆらりくらりと泳いでいる。周りにはちょこちょこつと盆栽や木が生えていたりしているせいもあつて、どこか平安時代にでも迷い込んだ気分にさえ陥るね。ただし実際に迷走してるのは師匠の思考だがな。

「いじつだ」

師匠が屋敷に向かつて歩き出すと、かん、かん。という音が響く。
良く見たら下駄を履いてるのか…。

「げ、下駄…」

後ろにいる途上から、引きつたような声が聞こえて来る。確かに、下駄はさすがに引く 逆に眼を輝かせてるだと…？
そんな衝撃的な出来事を俺は受けつつ、見慣れた風景を突き進んでいた頃。ふと師匠が扉の前で立ち止まる。

「締めろ」

締める。たったその一言だけで朗らかな雰囲気も浮いた気分も酒の臭いも。

『締ました』

…ようにも思えるだけで最後のだけは無理だがね、まだ臭うしな。

1

俺達が入った部屋は何畳かの畳が敷かれており、奥の壁には『やれる時にやれ』と書かれた掛け軸が掛けられているだけの殺風景な場所だった。掛け軸おかしいだろ。

「自由にぐつろごでいいぞ。ただしイチャつるのは許さん

ククク。とこちらをにやつきながら見つつ正面に座り込む師匠。それに続いて俺達も各自に座る。この人のボケは出来る限りスルーしておいた方が楽そうだな。

「さて途上。貴様に聞くが、『魔法』とは何だと思つ?」

「想像でいいがな」と付け足し、懐から一升瓶を取り出し口飲みする師匠。までまで、そもそも前のように取り出しているがその大き

さの酒をどうやって隠していた。それと仕事中に酒を飲むな。
暫く良い臭いのする青の髪を揺らしあおろしていった途上だったが、
決心するかのように息を飲み込んで答えた。

「ほ、炎の塊を投げたり。回復魔法を唱えたりですか…？」

「質問を質問で返すみたいになつてるじゃないか。まあいい、大体
あつてるが『違つ』」

師匠は話しの合間に飲んでいた酒をその場に置き、何か決意をした
ような表情をして。

「『いつの事』だ」

前から聞こえていたはずの声が、急激に横から入り込んで来た。つい
いでに、無駄に『誰か』が俺に体を密着させてやがる。

「えー？」

声を出していた本人が唐突に消え、驚いた途上は辺りを見渡し氣づ
いた事実によつて更に驚く。

「ははは、久しぶりだな」

師匠が俺の隣に座り込んでいる、それも一瞬にしてだ。確かにこれ
も『魔法』だが…、分かりづらいだつ。

「戻るぞ」

次の瞬間。音も立たず、元の位置に座り込んでいた師匠。やめてく
れ、本当に不気味だから。

瞬間移動するにしても音が何か立て欲しい。いきなりまるで最初から『そこにいた』かのように座られるのは恐怖だ。

「他にもいつこう事だつて出来る

師匠が手を開きながら前へ差し出すと、隙間なく埋まるかのよにジジギジジギジイジジジーと火花が散る音と共に雷の剣が出てきた。

「す、凄い…」

驚嘆のあまりか賞賛としてなのかは分からぬが、青の瞳を輝かせながら魅入る途上。可愛いな。

「こんな所か」

師匠は半開きにしていた手の平を、拳骨の形にして閉じると同時に雷の剣も消え去る。そこで再び置いてあつた酒瓶に口を付けた、だから飲むなよ。

「よく聞け途上、『魔法』っていうのは基本的には『何でも出来る』。多少は制約があったとしてもだ」

「な、何でも…？」

「そうだ、故に『魔法』は想像力に直結する。発想も出来ない奴ほど『魔法』は使えこなせない」

「本当は想像力だけじゃ駄目なんだけどね…。でも確かに前提としては必須よ」

溜息を尽きながら、師匠の説明に補助を加える魔気。割り込まれた師匠は「おら、バトンタッチ」とでもいったげな顔をしながら、本

格的に酒を飲み始めた。仕事しろよ。

「大規模な『魔法』を使つたり高度な『魔法』を使うにしても、その代償に見合つた『魔力』を消費しなきやいけないの」

「『魔力』？」

「魔法を使うのに必要な力よ。但しゲームや漫画なんかと違つて人や動物だけじゃなくて、万物に存在するんだけれど」

「人だけじゃない…？」

「そうよ。木だって石だって水だって何かにしろ、力を持つてる。ただ私達動物だけが『考える』って事が出来るから具現化出来るだけ」

「古来の日本なんかは万物に神が宿るとして崇めていた節もあるだろつ、『魔力』の概念はそれに当てはまるわけだ。最近の奴は忘れてたりするがな」

「酒を片手に、右手で口元を擦りながら話に割り込んだ師匠。うおっ、さつきよりも臭いが！？」

「あと自然なんかは自身で勝手に空氣中に発散したりしちゃうから、『魔力』は殆ど所持していないんだけどね」

「そなんだ…」

「それによると、自身の体内で作る魔力なんかも個人差があるのよ、才能と同じように。固定じゃなくて肉体の成長によって変動するんだけど」

「才能…」

「つまり私のような天才は魔力が滝のように溢れ出てるが、私の弟子新崎を含めた一般ピーポー共は平均的な魔力しか精製出来ないという訳だ」

「さつ氣なく混ざりつつ、自分を誇示するのはやめてくれ」

「さくさくに紛れていった師匠を止めつつ、俺は右手で頭を抱えた。やれやれ、どうしてこの人はいつもこうなんだ。

「これくらいならいいだろう。それともどうした？ もしかして私に嫉妬を妬いてくれているのか？」

「ないな」

「照れ屋なんですからー」

「いきなり瀬名さんの真似をしないで下さい」

「ちつ、冷たい弟子め」

「はいはいはいはい！ 今日は授業を受けに来たのですから、方恋先生もほどほどにして下さい」

魔気が慄然とした態度で、師匠の一方的な俺への弄りを中断させる。

「… やれやれ、私の周りには冷たい奴しかいないのか」

ぶつぶつ言いながらもしつかりと口を塞ぎ、その代わりか酒瓶を逆さにし一気飲みする師匠。一気飲みは死亡確率が高いから本当にやめてくれ。

「さてと、魔力については軽く説明し終えたけど。実は魔力の精製つていつも限度があるの」

「限度？」

「いくら少量しか精製できなくても小さな頃から作れたら、いつかは巨大になるでしょ？ それを妨げるかのように足枷というか器がある。私達はその事を『許容値』って言つてるけどね」

「『許容値』…」

「ようは『魔力』が水で、『許容値』がその人の限度を示すグラスなのよ。水はグラスを満杯にはするけれど、そこから溢れさせることは出来ない」

「… それも、大小が異なるん？」

「え？ え、うん。魔力と同じで『許容値』も人によつて異なるわね。ただこっちの場合は魔力と違つて生まれた時から固定されてるけど」

「…」の子…、一瞬関西弁喋らなかつた？ と首を傾げながら、魔氣は考へていたようだ。『氣のせいよね』と呟き考へるのをやめたようだ。残念ながら氣のせいじゃないんだがな。

「魔氣。休憩しましょ！」

ここに来てから一回じつて喋つていなかつた勇気が、和の雰囲気に合わせるかのように短く。簡単に呟いた。

「そうね。一回じゃ全部覚えるのは無理だと思つし、また途上さん の予定に合わせて授業を受けよつか」

「了解」

「は、はい。分かりました」

「別に構わないが、俺が来る意味ないよな

「つむさい、あんたも来るのよ」

やれやれ、今日だけで何回「やれやれ」と言つたんだか。溜息しか出ねえ。

「私の授業を楽しみに待つがいい」

にやにやしながら俺の肩を叩く師匠。殆ど貴方から授業なんて受けない氣がするが、この人の授業なんてまともじやないからまいいか。

「以上。解散！」

魔氣のその一言によつて、俺達の高等部に進級して初めての『魔法授業』は終了した。

2

月光が刺し込み風につられて揺れる桜を見ながら、私は一人で外にそのまま繋がつていて廊下で酒を飲み続ける。

「まつたく、子供つていうのはあつという間に育つしていく…」

皮肉を呴き、大きな酒の入った杯を片手に飲む夜空は綺麗だった。一つ一つの星が輝きを持ち、自分を象徴している。

庭に咲いている桜の花びらが池に落ち、波紋がそこから一斉に広がつていった。

「貴方も…こういう気分だつたんでしょうね」

それは現在の新崎に『師匠』と呼ばれている人物の性格とは、まるで懸け離れた声色。私であり、私でないもの。ふつ。とまた今の私らしい皮肉めいた笑いが零れ、自虐するよつて呴く。

「お陰で、私の隣は未だ空いたままだよ」

「残念だつたな、俺がいる」

すつ。と小さな音と共に私の隣に座り込んでいる奴がいた。所々が
破れた黒装束、そこから覗かせる漆黒の髪と端正な顔立ち。

「『魔王』か。丁度いい、付き合え」

「おー、いいぜ」と言いながら私が差し出した徳利を受け取り、熱^{あつ}い燐^{かん}を杯に注いで一気に飲んだ。相変わらず良い飲みっぷりしやがる、このクソ野郎。

「綺麗だな……」

二杯目に突入した魔王が、舞い散る桜を見て感慨深く言つ。

「といつても、桜が咲く季節も早まつていろいろしいからすぐ枯れるとは思うが」

「再確認できた。貴様は雰囲気を壊すのが得意だな」

くつくつくつ。とお互いに下品な笑いを漏らしながら、酒を飲み続ける。

少しの間は静寂に身を任せ、流れ続ける風景を眺めていたのだが。私が面倒になつたので切り出す。

「さてと、貴様がここに来たのも理由があるのだろう? ただで嫌つてゐるクソみたいな親友の所に来るとは思えん」

「……」

「転人生の事と貴様の娘達の事なら心配するな。転人生の子は何ら

問題はなかつたし、娘達も異常なんて物は見ている限りではなかつた」

私は止まっていた手を動かし、杯に酒を注いで一気飲みする。すると、魔王は少しだけ寂しそうな顔をして。

「助かつた」

それだけ呟いた後に、来た時と同じように静かにここを立ち去つた。酒に付き合えと最初に言つたはずなんだがな、あのクソ野郎。

「やはり一人で飲む事になつたじやないか」

廊下にぽつんと置かれた徳利を一警した後に、また一人月光に塗れたこの世界を見て囁く。ねささやく良くも悪くも、過ぎ去つていく現実に向けて。

- Episode ·5 「昔」 -

俺が師匠の『魔法授業』を終えたその夜、夢を見た。内容はだいたい一年前になる頃に起こった『あの出来事』だ。『あの出来事』が起きた日はまだ中等部一年の冬休みを終え、明けて少し学校に慣れ始めた時。

その頃俺はまだ方恋一途を「師匠」と呼ぶ前で、妹である「新崎桜」は恋を知らず、昔からの親友である「氣丈徹」が優等生を維持し、「朝倉勇魔」もまだ分裂していない。

冬の寒さが残る中、「バレンタインデー」を迎える為に準備するには早すぎる時期に『あの出来事』が起こった。

都内に買い物に出かけた「氣丈徹」と「新崎桜」が、海外のログループに『誘拐』されたのだ。

その日俺は朝に寮の管理人である瀬名さんから一人が出掛けたという話を聞いた以外に、特に目立った出来事もなかつた。
眠気に襲われていた授業を気力で乗り切り、眼を覚ます為にトイレへ向かっていた最中に、それは聞かされた。

「桜と氣丈が反魔法テログループに『誘拐』された…！？」

「…静かにしろ。他の生徒に知られると厄介だからな」

俺が思わず周囲に漏らしそうになつた声を、方恋先生が押さえ付け喋らないように口止めする。

「廊下で話すのもまずい、二つちへ來い」

半回転した後スタッフと走り歩きのよつた速さで歩いていく方恋先生に、俺は困惑しながら付いて行く。まさか、あの一人に限つて…。歩いていく度にもしも一人が酷い目に会つていたらという血の気の引くような考え方と、冗談好きな方恋先生が嘘を付いているんじやないかという猜疑な考えが浮かぶ。

故に人気の少ない場所に辿り着き立ち止まつた方恋先生に、俺は眩いてしまつっていた。

「嘘だろ…？」

「ならそう信じればいい、貴様の妹と親友がどうなるかは知らないが」

「…すいません」

つまらない物を見るかのような瞳をした方恋先生に、俺はすぐさま謝罪をした。信じたくないが、確かに桜と氣丈の姿を朝から見ない事から本当なのだろう…。

「都内に買い物に行つた所を狙われたみたいだな」
「待つて下さい、そういうケースなら今までだつてあつたはずです。
何で今更…」

妹の桜と友達の気丈が。と喉元まで出掛けた言葉を飲み込む。一瞬だけ人の命に優劣をつけてしまった。

「校長である魔王が昨日から不在だ。テログループとしても絶好のチャンスだつたんだろう」「偶然…、タイミングが良かつたから狙われた」

「そういう事になるな」

「くそッ！…！」

思わず壁に向かって拳を突き出し殴る。筋力も無ければ格闘技をしている訳でもないので、自分の拳が痛くなるだけだった。ただどうしようもない気分になる。けれど、何かやらなければ仕方が無いような気がして、小さく尋ねる。

「…誘拐って事は、手紙か何か来ていたんですか？」

「ああ、電話だ電話。やつら電話を使って伝えてきたよ。なーにが『人質』と『魔法技術の提示』との交換だ、腹が立つたから電話にでんわ！ って言つてやつた」

「交換場所の指定は」

「ない、当日指定場所を伝えるつて言つていたからな。喋つてる間逆探知やらやるつと思つたが、用意周到に対策されてやがった」

「前々から狙つていたみたいだな」と呟く方恋先生を他所に、俺は密かに打ちひしがれていた。だってそうだらづ、まさか自分の身の回りでこんな事が起こるなんて考えない。

「…すいません、外の空気吸つてきます」

「おう。ただしあんまり風に当たり過ぎるな、風邪を引くからな」

俺はその場を後にし、学校の外へと歩く。途中で授業の開始を告げるチャイムが鳴つても、俺は構わず外へ出て行く。風にとりあえず当たりたかった。

2

「今から一時間後の、ここだ」

きゅつ。きゅつ。と長い机の上に置かれたこの辺りの地図に、赤い油性ペンでマークが書かれた。

方恋先生が俺に喋つて半日が経過した今、深夜となる時間帯なのが。三十秒ほど前に犯人グループから電話で場所の指定を受けた。指定された場所は近くにある町から外れた所にある、元はホテルだった廃墟。

マークを書き終えた方恋先生は、机を囲むようにして椅子に座つている俺と勇魔を含めた生徒会と、魔法で関係のある学校関係者を一いつべつした後に。

「とりあえずは私一人で行こう。他の奴らはそれぞれの役割があるだろうし、人が減つて生徒達に気づかれたくないしな」

そう宣言すると端にいる朝倉瀬名さんはあまりして欲しくはない、

心配そうな表情をして呟く。

「方恋さんがそう言つのな?...」

間髪入れずに瀬名さんの隣に立つ、学校の『警備員管理長』といふ役職に付いている魔王軍幹部の一人が答えた。

「同意。我々『警備隊』も最も影響が少なく実力があるといつ点では貴方を評価している」

この人は昔から魔王以外に対しては冷たくあしらうタイプだが、今も尚それを発揮するとはなし。そんな警備員とは机を挟んで反対側に座っている複数人の内、代表格らしき女性は小動物のようにふるふると震わしながら右手をゆっくりと上げる。

「は、はひい。私達『使用人一派』も異論なしですう」

喋り方が相変わらずおかしかつたが、俺は特に気にしない。そして最後に、待ちかねたように俺達を含めた生徒会をまとめる代表格の人物が賛成を示す。はずだつた。が。

「私も現地に行く」

生徒会長である勇魔の発言によつて、空気が一瞬にして反転した。もちろん、悪い方向で。

「勇魔…、お前。小規模だと大規模だと関係なしに、テログループなんだぞ？」

俺は思わず立ち上がりながら、勇魔の考えを止めようとした。けれ

ど、勇魔は首を振る。こいつ、何を考えているんだ？

「私は私の名前の通り、この世で最強の魔王と勇者の娘。私はそれを誇っているし、たかが人間に負ける程落ちぶれていないつもりよ。それに方恋先生一人だけじゃ危険だと思つの」

「ついでに、私は生徒だから影響も少ないと思つしね」と苦笑いしながら勇魔は方恋先生の方へと顔を向ける。

対して俺達が話している間に、支度を終えたらしい方恋先生がこの人にしては珍しく、冷めた顔付きをしながら。

「貴様は来なくていい、『足手まとい』だ
「ツ！？」

勇魔を突き放した。

「わ、私は自分の身ぐらい守れます！」

「そうじやないさ、まあ聞くが。貴様、人を殺せるか？」

「え…？」

「確かに貴様は『絶対結界』という無敵防御魔法があるが、それは自分だけであつて他人までは守れないんだろう？ もしも守りぎれなくて、テロリスト共を『殺さない』といけない場面になつた時、貴様は殺せるのか？」

「……」

もしも勇魔と方恋先生が手を組めば万が一がない限り、絶対に死者を出さずに全てを終えられるだろう。だが、勇魔は万が一が起こった時。俺の親友と妹と、テロの命を天秤てんびんに掛けることになつてしまつたら、仕方がなく『殺す』しかなくなるだろう。覚悟も決意もなしに、その場の感情だけで決める事になつてしまつ。

そしてそれは同時に、優しき勇魔の最低でも永久の罪悪感、最悪の場合永久のトラウマとなる。

「だから『足手まとい』だ

「ま、待つて下さい！ 私は…」

「後は頼んだぞ、貴様ら」

数回の瞬きの間で部屋の窓から体を乗り出していた方志先生は、すつ。と映画に出てくる忍者がその場から立ち去る際に出す音すり、一切と出でず無音で消えた。

「私は…」

感情を出し切る前に断ち切られた勇魔は、一言呟きながら表情を落とす。あいつの周りにいる見知りの生徒会役員共が多少のざわつきの後、一人、また一人と、申し訳なさそうな顔をしながら出入り口から出て行き、『警備隊』達は無言で部屋を立ち去り、『使用者』達は代表格らしき女性に「へ、空気を読みましょうー」と命令されその場を後にした。

残ったのは勇魔と俺と勇魔の母親である瀬名さんだけだ。長方形に伸びる机に対し、暫く三人だけが座り込んでいたが、瀬名さんが立ち上がりつて。

「ゆ一まちやん、今日も冷えると思いますから、しつかりとお布団被つて寝て下さいね…」

慰めでもなく同情でもない、母としての娘への優しさが込められた言葉を勇魔に掛けて、寮へと戻つていった。

「勇魔。戻るぞ」

物凄く声を掛けづらじ空氣の中、俺は何とも言ひがたい圧力に耐えながら勇魔に声を掛けた。重すぎる、重すぎるだ。

「やうね…」

いつもの勇魔らしくない、霸気がなく精氣の感じられない声。やれやれ、落ち込みすぎだ。

月明かりが窓越しに差し込む学校の暗い廊下を、俺達は互いに喋ることもなく距離を取りながら歩いていた。なんというか、自然とうなる。

「俺は、お前が行かなくて良かつたがな

「ツ！…」

俺が苦し紛れの話題作りをしたとした途端、勇魔が移動するのをやめてその場で立ち止まる。肩は小刻みに揺れ、視線は下になつていたので表情は見えなかつたが、分かつた。

「助けたく…ないの？ あんたは…、桜ちゃんと氣丈の奴を助けたくないの…？」

勇魔は両手に拳を握りながら肩を強張らせ、瞳に涙を溜め悔しそうな表情をしていた。そして、内に溜まっていた物を吐き出すかのように、叫ぶ。

「方恋先生から誘拐の話を聞いた時、あんたは驚かなかつた！？怖い事考えなかつた！？ 私は気が気じやなかつたわよ！」

触れてしまえば折れるような、そんな様子を見ながら、俺はなんか無性に冷めていた。いや、冷えさせてもらつた、か。

「そうだな。俺も思つた」

「だつたら何でそんな平氣そうなのよー」

「怒る前に、お前が怒つたしな」

「え？」

俺の答えた言葉に、一瞬にして怒り顔から啞然^{あぜん}とした表情をする勇魔。

「俺だつて妹を誘拐した奴をぶん殴りに行きたくて仕方がないが、實際お前みたいに実力や才能がある訳じやないしな。口出しできず内心腸煮^{はらわ}え返つていたんだぜ。どうしたもんかと考へてたところを、先にキレられた訳だ」

「そう、なの？」

「俺は別に、聖徳太子でも孔子でも聖人君子でもない」

「…前の二つは例えになつてないし、よくよく考えたらさつき喋つてた事も気丈が誘拐された事は別にいいのね」

「さてと、あの人を信頼して家でどんと座つて待つておく事にするか」

「あの人は信用ならないわよ、それとそれはただゆつくりするつて言つてるわよね」

「そうだな」

くす。と怒った顔から笑顔が零^{こぼ}れ出す。いつものがさつで男勝りな勇魔からは考えられない仕草だったので、可愛らしさすら覚えた。まあ、怒った顔よりは笑った方がいいに決まっている。いつも笑ってくれればもうちょい男も言い寄つてくれるだろう。に。

そして微妙に軽くなつたのか分かりづらい足取りで、寮で吉報を待つことにした俺達は帰つて行く。

3

翌日、豪快に笑いながら殴りあう魔王と方恋先生の姿が学校に入つてすぐに見えた。なんでも聞いた話、方恋先生が「貴様がさぼつたせい」で面倒な事になつたじやねえかコラア」とイチャもんつけてから始まつたらしい。物凄く理由と動機がガキっぽいな…。というのはどうでもいい。そんな事よりだ。

「きーじょう先輩っ！」

「あ、あのさ。桜ちゃん何で昨日からそんなくつこいてくるの？」

隣では無事生還してきた氣丈と、朝からポニー・テールを派手に揺らす俺の妹が、何故かだ。何故か、イチャついてやがった。

「……」

一体何があつたんだお前ら。氣丈が惚れるなら分かるが、逆パターンで來るとはな。まあ桜が惚れるなんて、あいつなりに何か頑張つ

たんだわい。聞かないでやるぜ。

「何が合つたのよ……」

代わりに俺の心を読み取るかのよつ、うつとうじこ物でも見るかのよつな視線を気丈達に向けながら呟く勇魔。その気持ち分からなくもない。

「でも、日常が帰ってきたわね」

たつた一日にも満たない半日、世間では他愛のない時間で俺達は劇的に変わった。眞面目な好青年だった気丈はスケベキヤラへと変身し、まるで恋愛の気がなかつた妹は恋を満喫し始め、勇魔は精神的に何かが変わって、因みに俺はこうと……。

「俺を鍛えてください」

方恋一途先生に土下座をしていた。

「へへへ、貴様がか、いいぞ。ただし私の修行は決して安くはないがな」

「樂じやないじやなくて値段なんですね……」

「うわわわ、酒代が足りんのだ」

少しばかりふざけた行為が続いた後、俺は正式に方恋一途の弟子となり鍛錬を受け始めた。柔道や空手やテコンドーを含む格闘技や柔術や射撃技術などレパートリー様々。これが役に立つ場面がない事に気づいたのはおよそ一週間が経つてだ。

そして短くとも長い思い出の最後と共に、俺の夜は明けていく。

ジリリリリリリリリリリリリリリリリリリ！ 金切り声のような耳を塞ぎたくなる音が耳元に入つた途端。俺は夢から現実に戻つていた。

耳元で鳴り続ける道具もとい田覚まし時計を手探りで探し当て、叩く音に止める。

ふわあ。と大きく欠伸をしながら両手と背筋を伸ばし、未だ半分しか開かれていない瞼を擦つた。

「…また懐かしいのを見たな」

そうして、俺はまた魔気達と最近知り合つた途上藍のいる『今』の日常へ戻る。

・ E . i s o d e . 6 「 テ ッ ド オ ア ラ イ 」 - (前 曲)

閑話休題。

懐かしい夢を見てから一週間が経過した頃。

「何で私が夜間の校内見回りなんてやらないといけないの…」

時計の短針が午前零時を越え、密かにちくたくと音を鳴らしながら時を刻んでいる中、俺の隣で魔気が大声で叫ぶ。

「俺だつてやりたくない…」

溜息を尽きながら懷中電灯を片手に歩く俺。正直言つてかなり寒いし暗いし眠い、そして俺は隣に居るこいつを恨むね。何故ならこいつなった発端はこいつのせいでもあるからな。

『勇気と魔気が生徒会の仕事をしつかりとこなしてくれない』

顔見知りの生徒会役員の一人から、授業との合間である休み時間に伝えられた。俺は生徒会には入っていないので詳しくは知らないが、なんでも魔気は単純に仕事をせず、勇気は一切の休憩を入れない為付き合う役員がいないという。その為にわざわざ勇魔を分裂させる原因を作った俺が、こいつらの手伝いをした。といつりじく、現在進行形でこなす事となってしまった。

普段着と違ぬ制服を身に纏い、夜の闇に溶け込む髪をさらさらと揺らしつまらなくなそうな顔をする魔気。付き合わされる身にもなってくれ。

「大体、『警備隊』はどうしたのよ

「あの人達にも都合があるんだろ」

「どうだか」

「お前な…」

勇魔が言つ『警備隊』とは、学校周辺を守る「対危険及び災害」組織を指している。元は魔王直属の部下の一人が設立したらしく、魔王一族に対する忠誠が凄すぎて見ていてる側が引きそうになる程の連中だ。こういう自警なども本来は警備隊がやるべき事なのだが、今回は高等部の生徒会にその役割の一時的な代理が頼まれただとさ。

「面倒よ…面倒面倒…」と愚痴つて両手を前に差し出し、ゾンビのように死んだ目でだらけながら歩き出す魔氣。お前、仮にでも男子の前だから体裁ていさいぐらいは保てよ。

「それでも、一昨年の『事件』が起こるよりはマシだな」

ぴぐ。と魔氣の歩みが止まる。あの事件はつい最近夢でも見たが、氣丈と桜が誘拐されるなんて一度とごめんだ。

気づけば魔氣はこちらに顔を向けながら、「当たり前でしょ」と言いたげにしてくる。喋つて意思表示してくれ。

そつこつしている内に、俺達が担当するべき場所の見回りが終わつたので集合場所へと戻る。集合場所は学校に入つて直ぐの場所で一般の学校なら下駄箱にあたる場所なのだが、どこか金持ちの貴族の家かのように馬鹿広い大広間となつていて中央には丁字型の階段が二階へと繋がつていた。待つっていたのは相変わらずおじおどといふ途上藍と、凜と咲く花のよつに慄然じつぜんと立つ勇氣との珍しいペア。

「「」からは完了しました」

「お、同じく…」

実は関係ないのに強引に魔氣によつて連れて来られた途上。深夜といつ眠い時間に叩き起されたる気持ち、分かるぜ。

「次は一階部分ね……はあ。勇氣行くわよ」

溜息を尽きながら合流した勇氣の手を取り、ずかずかと丁字型の階段を上つていく。もしここで帰ろうとしても、もう一人の自分である勇氣に止められると分かつたんだろうな。

しかし、それはさて置いて。……一人きりになつたという事は、『あれ』が始まるのか。

「うちらは二階部分やね！」

「……」

突然途上は不安そうな顔から嬉しそうな笑顔に切り替え、あまり進んで動かさなかつた口で関西弁を意氣揚々と喋つた。
いつもの途上を知る者なら絶対に「ありえない」と豪語出来るはずの光景が、今俺の目の前で繰り広げられる。

「どないしたん？」

「……いや、慣れないな。匠の力でもそこまで劇的に変わらんぞ」

「うちらは家扱い！？」

勇氣と魔氣がいた時の消極的な態度から打つて変わり、激しくオーバーリアクションをする途上。

きっかけは新入式だつたかもう忘れたが、あれから数日経つた放課後の事だ。俺はあまり喋つたり積極的に行動しない途上の数少ない接点だつたらしく、まだ学校に慣れていない途上の為の案内人とし

て担任の師匠に頼まれた。その為俺と途上は必然的に行動を共にするようになり、少しずつ途上が本性というか個性を出すようになつたのだ。

最初は時折関西弁を交える程度だつたのだが、今となつては完全に喋つてる。どないことやねん。

未だに信じられないぞ。まさかあの恥ずかしがり屋な所がちょっとりそれが可愛らしくて、小動物のようにおどおどしていた途上がなんてな。

「で、俺らは二階か？」
「それさつきもいつたやん」
「あー、そうだな。よし行こ」
「適当！？ しかもうちを置いてこいつとしてる！？」

口と瞳を大きく開きながら、すたすたと先に歩く俺に対して的確に突っ込みを入れ。「ま、待つてーな！」と子供が駆けっこするかのように両腕をぶんぶんと振り子のように振らしながら走ってきた。若干子供っぽくて可愛らしく思わず微笑みそうになつた、危ない危ない…。

暗く照明とやや不気味に光る火災ランプに照らされ、先が見えずらい廊下を懐中電灯を使って突き進んでいく。

「いつもいつも思つんやけど、この学校つてほんまに変。くねくねしてるつていうか、構造がおかしいやん」「確かに。あとだ、あまり知らない道に行かない方がいいぞ。下手したら一度と戻つてこれない」
「へ？」

「十数年この学校にいるが、未だにどこがどうなつてるかが分から

ない所もある

「そ、そこまで広いん！？」

「迷路のような場所もあるぐら」だしな、氣をつけとおけよ

「うん…分かった」

暗い所なので少し気を張っていたのか、魔氣や勇氣達が居た時のように急に辺りを気にし始める途上。少し驚かしそぎたか？

「「う…、ほんまに大丈夫なんやろうか…」

先程と打って変わつての弱氣の発言。それは分からぬでもないが、あのな一つだけ言つていいか途上。

右腕にしがみ付いて来るな。

途上が俺の右腕をガツチリとホールドしているので、柔らかな髪が俺の首辺りにささぐらうと撫でるように当たたり、心地の良い香りが入ってくる。

無意識なのか怖がつて俺に引っ付いているのか分からんが、とりあえず俺も健全な男子高校生なんだ。やめてくれ、冗談抜きに。

ひた。ひた。といつまにか歩調すら一緒になりながら俺と途上は歩き続ける。もちろん俺の右腕は固定された状態でな。すると突然ゆっくりながら動いていた途上の足の動きが止まった。振り返りながら俺は尋ねる。

「どうした？」

「あ、あれ…！」

思い切り体を震えさせながら前方を指差す途上。その表情はまるみる内に髪のよつて青くなつていき、不安そうに田を見開く。

「……？」

もう一度正面へと戻つて見ると、俺は即座に理解出来た。

廊下の奥の方から黒い影で人の形をした何かが、こちらに向かって近づいて来ているのだ。

「…隠れろ」

すぐさま途上を右手で遮るようになり、丁度物陰になる場所があつたのでそこへ隠す。そして俺は壁に張り付きながら少しだけ顔を覗かせた。

高さは大人とも言い難いし子供とも判別し辛い微妙な所だ。体つきが細い所からも考えて、どちらかというと中等部辺りの子供に近いかも知れないな。

この学校は仮にでも魔王が統治している。常に魔王の所有するここを含めた土地全てにはあの人魔力探知結界が張られているので、侵入者という考え方も少ないだろう。

やはり、この学校の生徒というのが妥当だらうが…。もしもの時を考えると確証を持てない。

しかし誰かという事も含めて姿を見るにはこの廊下は暗すぎる。こういう時に妹の桜を含めた優秀組なら魔法を使って、即席の暗視スコープを作るなり変化させるなり出来るんだがな…。

「だ、大丈夫？」

後ろで小さく俺の裾を引っ張りながら小声で尋ねて来る途上。大丈夫かどうかは知らんが。

しかし、その声がいけなかつた。

廊下で同じように小さく小さく響いていた、足音が途上の囁きと共に

に止まる。そして止めた本人は真つ直ぐこちらを見つめていた。

「
……
」

向こうは相変わらず声は出さず動きこそ変化はない。しかしどう考
えてもこれ絶対向こうはこっちに気づいているだろ。
すると、先に黒く塗りつぶされたような人型の影がぬらりと動き、
影が取る次の動作に備えて俺は身構えた。のだったが、影が取った
行動は意外だった。

「兄さん、何やつてるの？」
「は？」

思わず反射的に返事をしてしまったが、影が発してきた声と単語に
も聞き覚えがある。それに俺の事を「兄さん」と呼ぶ人物は…。

「貴方が途上先輩ですか。気丈先輩の会話からもお伺いしています。
私はそこにいる真人兄さんの妹の新崎桜と申します！」

他ならぬ。ポニテを大きく上下に揺らしお辞儀をしながら、さらつ
とストーカー発言をしてる新崎桜だった。

廊下のど真ん中で立つところの不自然だったのと、桜をメンバーに加えつつ再び見回りを開始した。

「す、凄い丁寧に手入れしていますね…」

俺の隣では興味津々に途上の水色に近い淡白な青色をした髪を見ながら、桜が感嘆の声を洩らしている。

「それほどでも…」

まんざらでもない気分なのが分かるぐらいに、嬉しそうに照れている途上。桜がいるので絶賛性格封印中に淑^{じと}やかさが付いて来るぞ。

「いや、手入れがされているのは分かるが。そこまでなのかな？」
「男の兄さんには分からない事なんですね」

きつぱりと切り捨てる桜。俺には「綺麗だな」ぐらいしか判別出来ないんだが、こらへんが桜の言うように男女の違いなんだろう。なんともなしに話題が切れてしまつたので、先程疑問に思っていた事を聞くことにするか。

「桜。何でお前こんな時間に学校にいるんだ？」

俺の質問を聞いた桜は、「あはは…」といいながら眼を逸らしやがった。

「待て待て待て、百歩譲ったとして本当の事を言え

「ワタシ一ホン『カラナイアル』」

「いやいや、もうさつきまで喋つてたる。しかもそれ日本語だからな」

「…日本語でおく」

一瞬途上が何かを呟いていた気がしたが氣のせいだな。対して桜は暫く目を泳がせていたが、諦めが着いたのかこちらを見据えて答える。

「んー。生徒会の仕事だよ」

「生徒会？ 魔気達の手伝いか？」

「…そんな所かな」

渋りながら答える桜。魔気達から何も聞いていないが、単に俺達に伝えていないだけだろうか。毎回思うがこういう行き違いが面倒だな。

桜が所属して会長を務める生徒会と、勇氣魔氣コンビが会長を務める生徒会とは実は組織的に別だ。桜は中等部なので『中等部生徒会長』。勇氣魔氣コンビは俺達と同じ高等部なので『高等部生徒会長』となっている。

それぞれが生徒会長や学年毎の風紀。現時状況などの様々な要因が合わざり混ざるので、同じ生徒会についても行動や方針などは殆ど別物といつてもいいだろう。

共通の物といえば、位が高等部の方が高く。それぞれの生徒会役員達が『現地魔法行使権限』と『現地魔法行使同伴権』を所持している事ぐらいだ。

だからこういつ「伝えられてない」「伝えてない」などの行き違いは良くある。まあそれは分からぬ訳がないが、これはそういう事じゃねえなど今確信出来た。

「桜、嘘なのは分かる。もし本当に生徒会の仕事なら腕章を付けているはずだしな」

ギクッ。とシリアルスマンドミステリアス霧囲気を出してましたよ。という表情をしていた顔が、一気に硬直した。

それもそのはずだ。中等部生徒会長である桜が本来『仕事』をする時に腕にくくりつけるはずの腕章を着けていないからな。いきなり数秒にして見破られた桜は、直ぐに涙を出すほど笑いながら咳く。

「兄さんは相変わらず『田』の付け所がおかしいよね
「まあ、田だけはいいからな」

俺が答えると、桜はわずかに零れた温かい涙を擦つて。

「うん。そうだ」

「ぼ」おー、と聞きなれない変な音をしながら姿を消した。

「桜ー？」
「桜ちゃんー？」

唐突に襲われた消失に、俺は途上が言ったちゃんと付けに驚く暇もなく辺りを見回すと。丁度俺達が立っている廊下の先。

空中に床でもあるかのように言葉通りに「静止」しながら倒れる桜の姿があった。そしてそれが意味するのは『魔法』が使用されているという事だ。

同時に、辺りを見渡した直後まで感じていなかつた気配を後ろの方から感じる。

卷之二

とりあえず後ろの気配が誰なのか、それとも物なのかという事はどうでも良く、俺は勢い良く後ろへ回し蹴りをした。

一 痛いつ！？

声が聞こえたのでどうやら人だつたらしく、確信の感触を得ると共に、廊下の地面へと叩きつける。

「途上！ 桜を連れて逃げろ！」

「いい！ 早く行つてくれ！」

困惑しながら立ち尽くす途上を強引に、桜の元へと走らせた。大体生徒会長である桜に不意打ちで魔法に掛ける理由は何にせよ。またもな思考から考えられる行為じやないからな。

「い、痛いです…」

足元でもぞもぞする影は、至近距離にいるはずなのに姿が確認できない。魔法を使っているのか。

「侵入者か？」

一応確認するよつて言ひへど、影は嬉しそうに「えへへ」と言こなが
ら立ち上がる。

「私は今から名誉あるお仕事をやるんです！」
侵入は

なんか悠長に喋ってたので、侵入といつワードが聞こえた辺りからお腹を思い切り蹴り飛ばす。

「ふ、ふふふ…。私はやれば出来る子なので、この程度では…」

右足を大きく踏み込みながら、今度は相手の見えない胸元を思いつきり掴みながらその場で背負い投げをかます。バターン！と受身が取れなかつたらしく影が物凄く痛そうな仕草をして倒れた。ちょっと加減してやればよかつたか？

「喋ってる最中なのに…。ふ、不意打ちばっかり…。もう嫌あ！うわああああああああああん…！」

俺に胸倉を掴まれたまま影は俺に必死に抗議していたのだが、途中で泣いてしまった。

…なんか、こっちが悪い事しているみたいでやうづらにな。

「うわああああああああん…。えぐつ。えぐつ。ビツカ、ビツ
セ駄目な子ですもん…！」

目の前で胸倉を掴んでいる俺を放つて置いて、両手で顔を隠し愚痴りながら泣き止まない影。

「…なあ。お前、本当に侵入者なのか？」

一方的に攻撃しているみたいで気が引けてきたので、俺はやや疲れ気味に尋ねてみる。

「…頼まれてつ。貴方なら出来るつて。いつもは残念な貴方でも出来るはずよつて」

頼んだ奴もお前の事をアホの子と思つていたのか。

「……」

もはや同情の域に達した俺が掴んだ手を離すと、鼻水交じりの涙を堪え必死にこっちを睨みながら立ち上がつて来た。

こいつ相手なら、俺の無駄だと思っていたテコンドーとか試せるかもしけんかと思つたが。非常に攻撃し辛い。

「悪いことは言わんが、引き返した方がいいと思つぞ

「わたし。私…帰る…」

「ああ。帰つた方がいい」

「…嫌。です」

「ん？」

「私は変わるんです。だから、帰らない。そして、『貴方を倒すつて任務も達成します！！』

まるで負っている主人公が吐く勝利の台詞だなと思つた時には、視

界が劇的に変わっていた。

先程までしつかりと肺に入っていた空気が吐き出され、同時に自分の腹部に何かが突き刺さっているような感触。

「が。あつ！？」

痛い。という痛覚を感じてようやく初めて、理解出来了。

敵が俺の脇に向かって思ひにきり困っている事を。そして、それは

くそ。しまつた余所見して

喋る間も何かをする暇もなく、振り落とされながら俺は雑巾のように廊下の奥へと投げ捨てられた。

「はつが。はあつ。はああつ。」

唐突に襲われた吐き気と、どうしようもないくらいに酸素を吸いたいという本能が互いにせめぎ合ひ混ざり脳を搔き混ぜる。痛みは、一の次だつた。

「魔法をつ。使うしか……」

まさか本当にあの影が言うように、不意打ちだからこそ今まで弱く感じていた。だが、影が本気で攻めてくればこうだ。
眼がいい事と、多少はもどき格闘技なんかが出来る俺とでは、あま
りにも大きすぎる実力の差がある。

「くそ。頭が良かつたりしたら使える魔法のレパートリーも多いん

だが……

魔法は想像で一見誰もが出来そうに感じるが、やはり単純な魔法にも位置づけがあった。

例えば同じ、相手を回復させる魔法なんかでも、単体なのか複数なのかでも難易度も魔力の消費量も違う。比較的一般人な俺は、簡易的な回復や自身の能力強化。最弱レベルの攻撃魔法しか使えない。

「……？」

俺が使う魔法を想像していた時、気づいた。

「ま、りょくが削られている……？」

「貰いましたああああああああーー！」

右手を突き出し飛び込んでくる影の姿が、俺のちょっと他人とは違う視界内に入った。そう、スローモーションに見える眼の。ゆっくりと空中を泳いでいるようにすら見える影。俺はそれ以上に遅い足を前に突き出し。

「うおおおおおおおおおおおおーー！」

そのまま影の体が俺を越えて行くよう、少しだけ腰を浮かしながら更に廊下の奥へと蹴り飛ばした。

「さやあああああーー！」と驚くような声が響いてきたが、そんな事よりもだ。

「はあ……、はあ。なんで、魔力が……」

ふらふらと志の力がない体で廊下の壁に手を置きながら立ち上がり。再び手のひらを見つめながら魔法を想像してみるも。

「効果が、ない…か」

魔力が無くなつた原因に、十中八九影の攻撃が関与している。もしもそう仮定するならば、影の攻撃を喰らつたらアウトだ。

「魔力が、殆どないお陰で。意識がしつかりしない…」

よく魔力と命は一緒だとか言われるが、実際には少し違う。確かに魔力の底が尽きてしまつたら命に関わりがあるだけで直結はしない。だがそれでも、やはり魔力の損失は命に関係する。特にこう弱っている状態では。

とりあえず俺の手には負えない敵だった、逃げた方が得策だろう。俺は階段がすぐ近くにあったのでそちらから降りようとした。

「！？ しま」

足を滑らせる。

意識の混濁。魔力の低下。敵との交戦による負傷。様々な要因が重なつて。俺は。

階段の中央部分に頭から突っ込み、強打して何度も転がりながら倒された。

「ゴリュ。と朦朧な意識でも分かる。頭蓋が割れた嫌な音が響く。

それでも、首を痛めて即死に至らなかつただけ運は良かつたと考えよづ。

恐らく割れた場所から、赤色の絵の具に見える血が零れていく感じ

がした。

聞こ覚えのある。といつかせつを聞いたばかりの影の声が後ろから聞こえた。

「た、倒せとは言いましたけど、人、死ぬのはだだだだだ駄目です！」

タンタンタン。と勢いの良い音が階段に響き、地面が少し揺れる感じがする。

「わ、わ。私も魔力が殆どない。ジ、ジジジジジ！」
「よーー？」

とつあえず落ち着け。と顔に出しているはずなのに、声として外に出せない。

「そつだ、そつすれば……！」

影の温かみのある手が背中に当たつたと思えば、頭部辺りに血が集まつて再構成される気持ち悪さを感じた。それと同時に、魔力が減少していくのが分かる。

「おつぎ今まで貢つて……、よし、——」まで回復せねば……」

「……。」えは、なんとかか

立ち上がりつたり動いたりする事は出来ないが、先程まで出せなかつた声も出せるようになつてきてゐる。

頭のてっぺんにあつたどろりとした液体が零れる嫌な感触も、少なくなっていた。

それでも血が未だ出てきているのは分かるので、恐らく応急処置手当でぐらいしかなつていらないだろう。

「だれか…来るのを、待つしかないな…」

今更にして床がかなりひんやりとしている気もつかつて、独り言を呟く。

そして安堵からなのが失血からなのが性からなのが 意識が徐々に遠くなつていくのが分かつた。視界は伴つてぼんやりとしていく。
眠るようすに瞳は落ちていく。

「ま、真人！？」

半ば飛びかけていた意識の片隅、誰かの声が響く。聞き覚えのある声だが、もはや考へるとは出来ない。

「三」

急いで近寄ってきたらしい声の人物は、途中で口を塞ぎ「んだらしない。代わりに息を呑む音だけが聞こえた。

朦朧とした意識でも分かる程、耳を塞ぎたくなるぐらいの階段に響いた絶叫。

小刻みに階段を走り下りてくる足音と、泣きじゃくるような叫び声。

「真人、この怪我。どうして、誰が！？ 誰が！？」

影とは違つた温かみのある感触が、またしても背中越しに感じる。

「治つて。お願ひよ！！」
嫌あ！ 嫌よ、また一人ぼっち！－ 真
人だけなのに！！！」

言葉を途切れ途切れにさせ、ぽたぽたと背中に涙を落としながら。俺の怪我を治していくらしい。

「ま、こと…？」
真人。真人。ねえ、起きてよ。起きてよお！！

怪我をしている事を気にしてか、大きく揺らすのではなく小さく抓る様に服を掴みながら揺らしてきた。

きて、意識が切れ始める。

完全に意識が途絶える寸前に、それは聞こえた。

「寂しいよ…。寂しい」

切
れ
た。

Episode・7 「寂しがりな魔王」

「…ん」

心地良い風と肌触りのよい洗い立てのような毛布の感触とともに目が覚めた。目だけを動かしながら辺りを見渡してみると簡易型のベッドがいくつか並んでおり、どれも俺が被っている物と同じシーツや毛布なのだが、これ以上にふわふわしているように見える。それにしてもおかしい、確か俺は侵入者と戦っていたはずなんだが…。

「侵入者…？」

改めてふと浮かび上がった単語を呴き、激流のように映像が脳味噌から溢れ出て来て全てを思い出してしまった。妹の桜が襲われた事、侵入者が妙な力を持つていてる上に強く太刀打ちが出来なかつた事、そして、恥ずかしい事に魔力を失つた俺は朦朧とした意識で階段を踏み外し、大怪我をした事を。ゆっくりと上半身だけを起こしながら、どくんどくんと青緑の血管が浮かぶ手のひらを見つめる。そこにはいたつて健康の証拠があつた。

「そういえば、桜は…」

侵入者に魔法によつて攻撃され、意識を失つていたのかまでは確認できなかつたのだが。桜は大丈夫なのだろうか。

「おう、桜ちゃんなら大丈夫だぞ」

独り言のつもりで呟いたのだが、辺りを見渡したときにはいなかつた知り合いの人物に反応された。声のした方向へ振り向いてみれば、ツンツンとした若干ワックスで固めてある茶髪の青年」と氣丈がいつの間にか立っている。

「どうか、良かった。気丈がそういうなら大丈夫だろうな」

「さっきまでお前の看護が出来るぐらにはな」

人差し指で指し示して來たので、そちらの方向を見てみれば白いプラスチック製の桶おけと縁に掛けられた白いタオル。

「ま、たつた半日程度だから気にする事はねえぞ」

両腕を組みながら、優しく微笑む氣丈。悪いが女の子なら嬉しいんだが、例え親友といえども男は嫌だ。

「それにしても、俺は階段を転んで少なくとも頭蓋骨にひびが入るほどの傷を負つたはずなんだが。誰が治したんだ？　学校の保険医か？」

「あー、それはだな……」

何故か。どんな場面においてもストレートな物言いをする氣丈が言葉を濁らせた。らしくない。

「まあいいか、お前にも関係のある話だしな」

隣のベッドに向かい合つように座り込み、「つおつ、柔らかー」と良く分からぬ感嘆の声を洩もらした後に、続きを喋り始める。

「お前の怪我を治したのは魔氣だ」

やはりそうか。あの時薄れていた意識では判断が付かなかつたが、ハツキリとした判別の出来る今なら分かる。あの声は魔氣の声だつた。

「当時生徒会の仕事で勇気と魔氣。途上ちやんとお前とでお互いにグループを作つて学校内を警備していた」

「ああ」

「で、偶然居合わせた桜ちゃんと合流した直後。侵入者に襲われた」「そうだな、侵入者は魔法か何かを使つていたのかは知らないが。終始姿は確認出来なかつた」

「途上に氣絶した桜ちゃんを任せ、一人でお前は戦つたんだろ?」

「負けたけどな」

「という事はあれか、敵の攻撃で階段に落とされたりしたのか?」

「いや違う。俺が転んだ」

「は?」

「転んだんだよ。情けない事に」

「どうか、そりや運がなかつたな」

少しばかりの沈黙。「ここからで深追いしてこない辺りが、気丈の良い所であり悪いところだつた。

「それと敵は変な攻撃をしていたな。侵入者に攻撃された後に魔法を使おうとしたんだが、魔力を削られていた」

「魔力を削る。なんだそりや」

「知らん。お陰で限界まで魔力を失つた」

「ああ、それでか。まあこの話は置いておいて。お前が階段の中央部分で頭頂部から大量の血を撒き散らしていたらしくてな、偶然魔気がそこに居合わせたらしい」

「魔気が…」

途上から連絡を受けたのか、単純に見回り場所が被つて偶然見つけてしまったのか。それとも他の経緯か。

「怪我をしているお前を治そうと魔法を使って治したらしいんだが。問題なのはここからだ」

「問題？」

「お前が気絶して意識を失ったのを、死んでしまったと魔気が勘違いしたんだよ」

「待て、仮にでもあの魔気が間違える訳がないだろ。あいつは天才だぞ？」

「冷静な判断が出来るほど、魔気は感情を抑えられなかつたんだろ。なにしろさつきまで元気に話していた奴が血まみれで倒れているのを見ちまつたらな」

「…！」

「俺が説明できるのはここまでだな。後は寮にいる瀬名さんにでも聞いてくれ、俺はこれから一仕事やる必要がある」

最初に座つた時や動いた時には鳴らなかつたはずの、ベッドの軋みきしみ音をたてながら立ち上がる氣丈。

「…魔氣は、お前次第だからな」

後姿を見せながら、普段出さないやけに威圧感の籠つた声を俺に残して立ち去つた。

魔氣。お前に何があつたんだ？

氣丈に言われるがままに、俺はいつも制服姿のまま学校を出て寮へと足早に向かつた。いつも通りの道のり、変化のない日常。だが、胸騒ぎのような物が収まらない。

全自动のドアを入つて行くとすぐさまカウンターらしき場所に辿り着く、そこでは椅子に座つた普段着となつていてる白い割烹着を着ながら瀬名さんがお茶を啜^{すす}つっていた。ずっと見ていたいほど素晴らしい光景なのだが、俺は迷わず一直線に瀬名さんの方へ歩いていく。

「あ、ひー？ 新崎さんどうなさいましたー？」

こちらに気づいた途端、持つていた湯飲みを手前のカウンターへと置き笑顔を向けてくれる。

「魔気に何かあつたんですか？」

逸る気持ちを抑え、ゆっくりと一言一言を述べると、瀬名さんはすぐさま理解してくれた。

「待つてて下さいねえ。よいしょっと」

何やらカウンターのこちらからは見えない内側部分を漁つていたかと思つと、銀色に光る鍵を取り出して来る。何に使つかと思ったら、出てきた時にカウンターに鍵を閉めていた。

「それでは行きましょうかー」

「え？ は、話…」

「レツツゴー！」

意気揚々とはぐらかされ、強制的に腕を掴まれて辿り着いたのは、数分前に出たばかりの学校内部。といつても生徒達がいる階層よりも更に深い場所だ。

そして俺はというと、着くまでのゆつたりとした時間と合間での瀬名さんとの会話によつて俺は大分皮肉を言えるくらいには冷静になつていた。

「……こんなとこ、初めて入りましたよ

「はい。なんといってもつい最近出来ましたからー」

また最近増設したのか、どこからそんな資金が出てくるのや。ひ。

「大分広いですね、地下全部でも使つてるんですか？」
「確か敷地内全部だつたと思ひますよー」

あの馬鹿でかい学校と広場とエクストラを足した広さを使つているのか。半端ではない広さだ。例えるなら東京ドーム三個分ぐらいだろうか？ 実際の規模も数も知らんが。

そこは学校の体育館をさらにそのまま拡大したかのような半端でない大きさで、高すぎる天井のライトだけでは補えない事が分かつているからか、壁の側面など暗くならないようにライトが取り付けられ創意工夫されているのが素人の俺でも分かった。床は木の板が隙間なく張られており、ワックスでもかけたのかライトによつて反射して眩しい。

「淳さん、ご飯持つて来ましたよーー！」

両手を口の周りに囲こまるでそこにメガホンがあるかのよつた構えをしながら、中央でぽつんと立つて見るように見える何かに向かつて叫んだ。瀬名さんが「あなた」と言つ事はあそこに見えるのは魔王か。そしてさすがにこの距離で声は届かないんじゃないでしょうか、瀬名さん。

「おーー！ ありがとなー！ ついでにお前も食べたいぞーー！」

届くのか。そしてさりげなくトネタを返してきやがった。

「淳さんっただ…」

横を見れば、わきほどまで口元にあつた手を頬に置き、顔を桜色に染めながら瀬名さんは照れ始めた。……。あー、なんともいえん。帰りたくなつて来た。

「おー、新崎クン久しづりだな！」

未だ照れている瀬名さんと共になんと五分もかかつて魔王がいる所に迷つ着くと、まるで友達に話しかけているかのように話しかけられる。

服は何やら所どこが破れている黒装束で、例えが悪いが黒いゴミ袋をカッターか何かで切り裂けばこうなりそうだ。

「魔氣の件で来ました」

とつあえず関係のない話に持ち込まれるのが目に見えていたので、

素早く答えると、魔王は依然笑い顔のまま。

「魔氣なら」こじだ

皿うの背に向かつて親指で指す。

そこには先程までといふか今この瞬間指し示されるまで見えてなかつたはずの。涙を流しながらズ黒い羽のような物を伸ばし空に浮いている魔氣がいた。

「……？」

「時を止める魔法を使つてゐから動けないけどな」

思わず、息を呑む。確かに空中に固定された魔氣は微動だにしないのだが、今この瞬間にでも動きそうにすら思えた。

同時に魔氣のはずなのに、魔氣じやないとも思える。

無愛想にしてはいるものの感情豊かだった表情は消し殺され、此の世の終わりを見ているかのような悲しみに満ち涙を流すらしくない顔。

確かに初めて会う人物からは不気味に思えるであつ黒き髪。俺からすれば色とりどりの心を混ぜた綺麗な色をした髪は、狂氣と混ざり黒く黒くただ黒く、今見ている俺の心すら掴み取り逃がさないような妖艶よじやんさを見せていた。

「あまり魔氣を見すぎるな。お前程度だと直ぐに『魅せられて』戻つて来れなくなるぞ」

いつの間にか地面にあぐらを組みながら座り、煙草を吸つてゐる魔王に止められたが、俺はすぐには目を背けられずにいた。拳をひたすら無駄だと知りつつ強く握る。

「魔氣…お前、どうしたんだ？」

呟いてみるが、当の話しかけられた本人はピクリともしない。この
どうしようもない感じ。あの事件と同じだ、一昨年に起きた誘拐事
件。あの時も俺は近くにいながら無力だった。

すると感傷に浸っていた俺に、魔王が話しかけて来る。

「ど」まで話は聞いているんだ」

「…、魔気が俺を助けに来て勘違いをした所までは」

「そうか。なら続きを話すぞ」

俺がその場に座り込むと、魔王は持っていた煙草を後ろの方へと投
げる。投げられた煙草は空気中で激しく燃え、少しの灰すら残さず
消えた。そして魔王はこちらを見据えて続ける。

「魔気はお前が助かつてないと勘違いして、心を暴走させてしまつ
た。結果、魔気は『魔王の血』に屈服し乗っ取られた」

「魔王の血…？」

「そのまんまだ、俺達魔王一族に代々引き継がれている呪われてい
る血の事を指す。自身の心をコントロール出来ず、更に憎悪や殺意
なんかの負の感情が高ぶっている時に、血自らが精神」と乗っ取り
に来る。正確に言つと血に込められた初代の精神なんだが、乗っ取
られた奴は世界を壊そつと暴走する。一般的に知られている魔王の
ようにな。」

「という事は魔氣も…」

「魔気だけじゃない。過去の魔王も何人かは血に乗っ取られて暴走
している。俺の祖父なんかも乗っ取られているぞ」

「それを討伐するのが私達勇者の役割なんですけどねー」

瀬名さんが話に割り込みながら、俺と魔王にそれぞれ中央部分から湯気が立っている湯飲みを渡してくれた。熱い熱い熱い、下の部分を持っているんだが熱い。

ズズズ。と熱いのに飲んでしまいたくなり飲んで口の中を火傷した後、俺は魔王に質問をした。

「元に戻らないんですか？」

「無理だ。色々と手段を試したらしいがどれも駄目だつたらしい。そして、暴走を止められる手段は今も昔も一つだけだ」

まで、やつすると。やつも瀬名さんが言っていた…。

「勇者が魔王を殺すしかない」

ある所に神様がいました。神様は全知全能だったのでなんでも作れました。ある時神様はなんとなく世界をつくりてみました。川や、海や、空や、雲や、木や、土やいろいろなものをつかって世界を作つてみました。けれど世界だけだったので、神様はふたり一ヶ所を作りました。

くろいがみの子と、きいろいかみの子を生み出しました。ふたりともあたまが良かつたので神様のしゃべることばも理解してすぐにはかよくなりました。

きいろいかみの子はあたかく太陽のひやしがあるところが好きで、そとであそぶのがだいすきでした。

くろいかみの子はひえていてまつらなところが好きで、どちらかといふとなかであそぶのがだいすきでした。

次に神様は、まずきいろいかみの子のいるあかるいところばかり動物をたくさんつくりあげました。

きいろいかみのこはおおよそじびして、こつまでもこつまでもそとで遊び続けました。

けれどくろいかみの子には、こつまでたつても動物をつくってもらえないませんでした。それでもうひとりの友達はあかるいところばかりにいてあそんでくれません。

くろいかみの子は、ずっとずっとひとりぼっちで遊び続けました。何千年何万年と一人ぼっちで遊び続けました。神様はいつまで経つても黒い髪の子には動物を作ってくれません。黄色の髪の子はたまに遊びに来てくれますが、いつも一緒にいてくれません。やがて、黒い髪の子は寂しさのあまり自分を恨み始めました。ああ、なんで私は暗いところが大好きなんだろう。と。

外で遊べばいい話だったのですが、なんとも言い難い気持ちが溢れ出て邪魔して来ます。ですから一度として外に出ていません。

それから何年と経った日、明るいところが好きだったはずの動物達の一部が、暗いところにもやつてくるようになりました。

黒い髪の子は、それはもう喜んでもぐりに友達になつたのですが、芽生えてしまつた自分への憎悪が消える事はありませんでした。

血を、呪い続けました。

ああ自分は何て勇気がないんだろう。と。

やがて黒い髪の子と動物達の間には子供が生まれました。子供が成長して大人になった後、外へ出て行き国を作っていました。丁度その頃同じように黄色の髪の子とその子供も成長し国を作り始めていました。

ただ、黒い髪の子はいつまでたってもそこを出る事はなかつたそうです。

いつまでも。

3

「魔気を…、殺すって言つのか。娘だろ！？」

思わず地面から立ち上がり、気楽に話す魔王が着ている黒装束の襟元らしき所を掴み上げよつとしたのだが。

「必要ならな」

軽くトン。と叩かれた程度だつたはずなのに、殴られたかのように腕が思い切り後ろに吹き飛んだ。あやうく変な方向へ曲がつてしま

いわうになる。

「話を聞け、殺すと言つてもあくまで最終手段であつて今すぐ実行するわけじゃない。本当に魔氣を助けたいなら、一呼吸しろ」

魔王に示唆しゆそされ俺は軽く未だ残る手首の痛みを堪えながら、一旦は考えるのをやめた。落ち着いて状況が変わるかどうかは分からぬが。

「よし、いいな。まず魔氣を含めた魔王の家系は絶対に普通の方法では殺すことは出来ない。それはなんとなく昔からの馴染みだから知つてているだらう?」

「『絶対結界』…」

「そうだ。俺達魔王は魔力があまりにも多すぎるが故に、あまた魔力を使つて無意識の内に他の魔法を持続的に使つてはいる。それが絶対結界だ。

あれは如何なる攻撃も魔力も干渉を受けず、更に本人の意思によつて自在に触れられる許容レベルも変えられる。欠点といえば自身の周りに張る事ぐらいしか出来ない事なんだが。もう一つ、欠点がある

「それがさつきの殺す方法ですか」

「厳密に答えるなら、勇者が伝説の剣を仲介して殺す事だ。それ以外には欠点という欠点はない」

「非道の限りを尽くす魔王を伝説の剣を使って殺す勇者。まるでどこの御伽噺おとぎばなしかゲームを聞いてるかのようなありがちな方法だ。」

「あの剣なら今、精靈さん達に預けてますがー」

思い出したように呟く瀬名さん、そして出てきた『精靈』という聞

きなれない単語。忘れていたが、というかこっちにこの人達が住み慣れすぎて今更思い出した。

魔王や瀬名さんを含めた魔法学校設立者は、こちらの世界の住人ではない。

俗に日本政府が名づけた、『異界』と呼ばれる次元の違う世界からやってきた住人達なのだ。魔法や魔王や勇者は子供でも知っているくらいに当たり前らしい。

らしい』という曖昧な言い方なのも、実はそちらの話を聞く機会はあるにはあったものの、実際に行く必要がなかつたので聞かなかつたからなのだが。

「そこでだ新崎。お前に頼みたいことがある」

そしてここで『異界』の話が出るという事は。

「勇気と一緒にしてくれ」

「すいませんが、私は今から一人で行きます」

俺が贅否を決めるはずだったのだが、綺麗で透き通つた声が一つ、後ろから話に割り込んで来た。

「新崎。貴方はこちらの世界で待つていて下さい。これは魔氣の問題なのでですから、私が片付けなければならない事です」

魔王の後ろ側から歩いてくる人影が一つ。そいつは、凛とした態度。誰とも馴れ合つよりも正義を理解してもらう必要すらないかのように思える黄色の瞳。自身の正義だけを信じ続けるような真っ直ぐ伸びた髪を、ポニーテとして一つの束にまとめている奴。

「勇気…！」

元は勇魔という一つの人物で、魔氣ともう一人の片割れである人物。真面目極まりなく勇魔の世間体を引き継いだような奴だ。俺が立ち上がりつつ睨みつけるかのように勇氣を見つめる。しかしボーネが揺れただけで表情に変化はなかつた。

「血を求める破壊と殺戮^{さつりく}に走る前に、私が魔氣を片付けます」「だからって今行く必要はないだろ…」

すると勇氣は俺を非難するかのような、厳しい目付きを僅かに見せながら答えた。

「そうですか。なら魔王を見てください。あれを見た後でも貴方は同じ台詞が言えますか？」

「あの人は今関係

」

ばたつ。と鈍い音が広すぎる室内のせいでの響かず一瞬しか聞こえないがつたが。確かに俺の近くからした。

反射的に音のしたほうへ顔を向けてみると、体中に汗を搔きながら地面に倒れている魔王の姿が見える。

「！？」

「忘れたのですか。魔法は魔力を消費して発現する事が出来、難易が高いほど大量の魔力が必要となります。つまり『时空魔法』なんて高位すぎる魔法を使って魔力が尽きないはずがないのです。今まで無理をしているんですよ、魔王は」

「魔王…」

倒れた魔王を見ていると、急いで瀬名さんがそこに走ってきて手を背中に置いた。

「淳さんっ、魔力ですよ！」

「あのようにしてお母さんが魔力供給を定期的に行い、なんとか元に戻つてはを繰り返していますが、半年持てばいい方でしょう」

俺には何も見えないが、勇気が言つように瀬名さんは手を背中に置き魔王に魔力を供給しているのだろう。

「こまでは一人が倒れてしまつのは目に見えています。そしてこれは元はといえば私が原因なのですから、貴方は関わらなくていいです、私一人が片付けます」

言いたい事を全て俺に伝え、覚悟が出来たのかそこで勇氣はぐるりと半回転して、この室内を出て行こうとした。

「待て」

それを、勇氣の右手首を掴み引き止める。

「それなら俺も原因の一つだ。付いていく」

「断ります」

「これは俺の意思だ、断られても俺は絶対に付いていくぞ」

「…ですか、なら交渉の余地はない。私が武力を使つてもいいのだと判断していいのですね」

「変わらん」

直後。俺の脇腹に向かつて勇気がどこで手に入れたのかは知らないが、左手を使い刀の鞘の部分だけで殴ろうとしていた。

だがそれすらも俺の眼では『見える』。普通の人なら見えないような超高速の攻撃も一瞬にしてスローモーションへと早変わりする。捻るようにして避けると、今度は勇気が掴んでいる手を強引に払い、距離を取つた。

「そうでした。貴方には厄介な『眼』がありましたね」

「最低限でも無差別にスローモーションにするから、小さい頃は慣れなかつた上に恨みさえしたぜ。今初めてこれがあつて良かつたと思えたな」

「最低スペックでスローモーションですか、昔から思つていましたがおかしなスペック具合ですね」

「本気を出せば『止まる』けどな」

勇氣は「そうですか」と端的に答へ。

「なら本氣を出せめる前に片を付ける必要がありますね」

『魔法』を使った。

戦いの幕は数分どころか、瞬きを数回する程度で終わった。本気となつた勇気の全身全力の攻撃と『魔法』の両方をいつぺんに受けたから当然なのが。

「……」

口の中は血がじゅじゅと溢れ、皮でも剥けたのか剥きだしにされた神経が嫌に痛い。床にへばり付いてる体はとてもなくずたぼろになつていて、凍らされたかのように指一本として動かなかつた。

「……^{じょせい}で暫く寝ていてください」

首を上げる事も出来ないので、足ぐらいしか見えない。まさしく秒殺を行つた勇気は俺に告げると、再び出口の方へと足を動かした。

「待て。よ」

だが、俺は立ち上がる。筋肉なんて格闘やスポーツを軽くやる程度にしか付いていない足を使い、今にも折れてしまいそうな両手をもつて。意識を朦朧とさせながらだ。

俺の様子と異変に気づいた勇気が一瞬だけ素で驚き、そしてどうして立ち上がらない体で立ち上がれるのか。といつありえない事実のカラクリをすぐさま理解し顔を顰める。

「新崎……、貴方は、何という事をしているのですか……！」

「悪いな……、今からやるのは戦いじゃないぞ……」

「『魔法』を使って無理矢理怪我を治して、補強した上で立ち上がるなんて、正気じゃないですよ……！　ただでさえ弱っている状態で魔力を削つたら……！」

暗示的に、魔法を酷使し続ければいざれ魔力も底を付いて『死ぬ』と伝えてくれているが。俺には確証が合った。

「さつあ言つたら…、これは…、戦いじゃないつて、な。卑怯で姑息な手を使って、俺は俺の命を賭けて挑む…。だがお前は、優しいから、殺せない…」

優しい。という言葉に勇気は明らかに嫌悪を見せて、それを否定する言葉で吼える。

「ツー！ つまり、私が貴方を殺せないと鷹を括っているのですか…。勘違いしないで下さい、私は貴方をいつだって殺せます。そこに世界の命運とお父さんとお母さんの命が懸かっているのなら…！」

「

吐き出した言葉が嘘じやないことを示すかのように、止めていた鞘での攻撃を開始し、俺は抵抗する事すら出来ず痛めつけられた。衝撃や斬つたりする一撃必殺でなく、あくまで体を使い物にならなくなる為の攻撃。

「が…、あ…つ！」

ボキ。という不快な音と共に右足の太ももの骨が鞘によつて折れ、青紫に腫れあがつた。電撃が走るような痛みが背筋を駆け上がり、遅れるよつとして鈍い痛みが広がっていく。

「へへへ、おおおおおおおお…！」

俺は氣合だけで飛びそつになる意識を引き留め、今度は回復魔法を使い強引に骨と骨を繋ぎ合わせた。すると今度は別の問題が浮かび

上がる。

先程はただ立つだけなら辛うじて出来ていたのだが、魔力が更に消費されて血が足りず体が痛めつけられている所に、意識の刈り取りとこう最悪な症状が相乗。それによりまるで動きに動くボールの上に乗っているかのような感覚に襲われたのだ。

「……やめてください、本当に死にますよー。」

勇気の一切変わらず不動だった表情は水面のように今や揺らぎ、虚偽によつて覆い隠し守らないといけないほど弱くなっていた。言葉に伴つて攻撃も止められる。

その様子を見た俺は確信した、「こいつにはやつぱり無理だ。薄く笑いながら喋る俺ですら辛うじて聞き取れるほど小さな声で呟く。

「は、は……。見殺しに……、出来ない。お前は優しいから、無理だ……」「……そんな事！」「…………」「あるわ……、だつてな。お前、……別に俺を今ここで倒す必要は、ない。無視すりや……。いい話さ……、だが、お前は……こいつして俺、と戦つていいる……。」「…………」

俺の言いたい事が分かつたのか、明らかに不貞腐れたような顔をして眼を逸らした。

「……、別に、深い理由なんてありません」「嘘だな……。ここで俺、と戦う意味は……。俺に、魔気を諦めて、……欲しいから。……だ。心を折つて、……しまえば。後で魔気が、……いなくなつても。……傷は少なくて済む」「…………」

「優しいよ。……お前は、やっぱり勇魔……。だもんな。ほんとは……魔

「氣を、殺したくだつて…、ないはずだ」

核心を突いた一言に、勇気は顔をこれ以上にないくらいに弱弱しく、後少し押せば折れてしまいそうな表情をした後。

「私は…」

突然俯いて。
うつむく

「…助かる方法が、ないならどうすればいいんですか!!」

大粒の涙を零しながら、制服のスカートを思い切り両手で握つて叫んだ。

「…私は元の体で勇者の血を、魂を多く引き継いでしまった方だから、正義を全うするしか出来ないんですよ!! ゲームのように、優しさや愛に溢れている訳じゃない！ 私は頑固で正しいと思つた事を直進する事ぐらいしか出来なくて、… こんな時でも、私は魔気を殺す事ぐらいしか、出来なくてっ！！」

勇氣は泣きながら喚く様に叫び続ける。
わめく

そんなあいつの心の奥底に溜まっていた言葉を聞いた俺はかと/or>笑つていた。何故かつて？ まだ分裂して一週間程度しか経つていなが、勇氣は他人と深く関わろうとしなかつた。一定の距離を保ちつつ、一人で全てをこなそうと奮闘し、弱弱しい女の子の両肩で重く辛い荷物を抱え込んでいた。だから頼られて、素直に嬉しいと思えるんだよ。

例え勇者という主人公に位置づけられた奴だつて、コンプレックスはあるもんさ。

「ついでに。…家族思いで、優しくて、信じることを。…曲げず、自分が間違った。…時には、ちゃんと『さびたる奴』…だな」

「…っ！」

「勇気。…、助けられる。きっと。…助けられるわ。…だから諦めずに」

俺は真っ直ぐ勇気の元へ歩いていき、途中途中を曲がったり斜めに進んだりしながら辿り着く。そして手を差し伸べた。こいつを止められるのはここしかない。

「助けられる…、方法を探そう。俺も手伝つ…！」

勇気は差し伸べられた手を見るなり、あれだけ強く張りに張った虚栄の仮面が壊れるかのようにぼろぼろと涙を溢れ出させた。通つた所は線となり、宝石が散りばめられているかのように輝く。孤独に立ち上がっていた少女の表情は、今別の物へと変わりつつある。

「筋書き通りのように上手く行く訳がないじゃないですか…、子供だって魔王は倒されるべき存在だつて分かります…」

「都合悪く…、進む訳がない、と思うぞ。だが俺も魔氣を、助けたい、と思うから…。行きたいんだよ…」

すると、勇気は涙を流しながら俺を睨みつけ。

「…私の、負けです。真人」

硬い表情を解し苦々しく笑つて、俺の差し出した手を強く握り返してきました。そこに込められていたのは弱く薄い決意だったが、それでいい。

「よし、それな　」

全てが丸く收まり上手く行つたので、調子付いた俺は普段低い気分を無理に上げながら締めようとしたのだが。

「さゆう」

急に足の力が無くなり、視界がぐにやりと屈折した鏡に映つたかのように螺旋曲がったかと思えば、後ろ向きに倒れた。

「真人！？　あ、貴方自分の体の限界を考えていなかつたのですか！？」

そんな勇気の声が最後に遠のく意識の中聞こえた気がする。やはり俺は勇気のような主人公タイプの特別な人間ではなく、格好良く締める事も出来ない一般人だつた。

眼が覚めると最初に視界に入ったのは白い天井だった。という事は俺は保健室にいるのか。

「おー、新崎。気がついたかー」

能天気な親友の声が聞こえてきたので、首だけ動かし声の主を探してみる。

「よつ」

右手だけ軽々しく上げ、年中笑っているようにしか思えない笑顔をこちらに向けながら、氣丈はまたしても向かい側に座っている。

「また保健室送りか。ははは、無茶するよなー、お前も」

「少し揉めたからな」

「揉めた…か。魔氣に関して勇氣とどう? お前も大概凄い奴だよな、恐れ入るぜ。だつてそこまで呑くせる奴なんて、世界中探しても両手で数える程度だらうしな」

「……」

「…それと、あまり無茶しそぎるなよ。俺はこれでもお前の親友のつもりだから、無理だと思つたら頼れ」

「ああ、分かつてゐる」

苦々しく伏せた笑みで「そうか」と答える氣丈。昔からこいつは本人が拒否の意思を示せば深入りしないが、それでも心配するような奴だった。

「お前、これから『異界』に行く事になるんだる?」

「やうだが」

「すまん、俺達も付いて行きたいのは山々だけじゃ……、桜ちゃんは生徒会長だから無理だし俺は……」

「こやつていう時桜の傍を守れるのはお前だけだからな

「そじで再び「悪いな……」と申し訳なさそうな顔をして、次にもの寂しそうな表情をしたかと思つた。んだが……。

「とにかく話を魔王さんから聞いたんだが、お前ダサイ倒れ方したらしいな!」

いつものニヤけ顔と悪ノリを決めてきやがつた。おいおい、やつきの辛氣臭いあの空氣はどうしたんだ。おったくこいつは……。

「……」

「お、おーい。ガン無視されるとなんか俺寂しくて死んじゃうぞー? いや、すいません。マジで独り言喋つてるみたいで悲しくなつてくるから無視しないで下さい、お願ひします。ただ空氣を変えたかつたつていう出来心でやつてしまつただけです……」

「ん、何だ気丈。貴様も來ていたのか」

そんなんなんとも居心地の悪い空氣を破るかのように保健室に入ってきたのは、誰構わず貴様と呼び捨てるジャージ姿の酔っ払いだった。つまり師匠と俺が呼んでいる人なのだが。

「私と弟子とのイチャイチャする時間を邪魔しようって、いや、待てよ。貴様も混ざつてみるか?」

「いや、遠慮しておきますよ。これから用事があるので、貴方との

つきあいはまた今度でお願いします

ふざけていた態度を即座に改め、軽くひきしめ手を振りながら保健室を出て行つた。しかし珍しく女に目がないあいつが、一切の下ネタを言わず紳士風に保健室を出て行くとは…、どつかで頭でも打つたか？

「くくくくく、相変わらずのエロスだな。どうぞ紛れて下を書いてやがる」

「……、書いてたのか」

「高度なエロスだ。実は低レベルのエロスと見せかけておいて、さらりとこういう場面では決めてくる。するとどうだ、誰一人として真面目に話してると思つて気づかない。私の前では無駄だがな」

「気丈…」

努力の方向性が違つ。それは勉強だと上手い逃げ口だとか、…桜から逃げる時に使うものだと思つぞ。

「ところでだ、貴様の所に来たのは他でもない。貴様も『異界』に行くんだろう？」

「そうですが」

「なら出発祝いだ、受け取れ。それは秘宝中の秘宝の剣だから大切にしり」

師匠が手で掴みながら渡してきたのは、ごつい装飾が目立ちやけに黒光りする禍々しい剣だった。悪役とかが使う剣だろどうみてもそれ。

「その剣はなんと、魔力をいくら注いでも制限が無いと言われている

「…いや、さすがにそれは嘘だろ」

師匠の言つ『魔力を注ぐ』といつのは、いつこつた剣などを含む『道具』を自身の体の一部と仮定した上で、道具に自身の魔力を混ぜ込ませることだ。それにより道具を中継して『魔法』を放出したりする事が出来る。

こうやって道具を使って魔法を放出する必要があるのは、自身の魔法によつての自爆を防ぐからだ。どんなに凄い魔法としても突然空気中に現れる訳ではない、きちんと自分の体から発現し放出される。つまりは最も願う場所から近い場所こと大抵は肌から出てきてしまう。そうすると自滅をしてしまうので、道具を中継しての道具から魔法を放出する事が一般的となつてゐるらしい。

俺は再びやけに歪な形にも見える剣を見つめた。確かに只者じゃない感じはするが、注ぐ量に制限がないは嘘だろ。邪気が溢れて俺の知らない呪術が使える、なんかだと今すぐ信じられそうだが。

「嘘だ、制限は確かにある。けれど恐らく魔力を注げる量という面でそれ以上の一品は見たことが無い」

「…それなら試しにふらつく手前まで魔力を注いで、魔法を使ってみますよ」

俺は剣を持ち、自身の体の一部のように思い描きながら、その上で使う魔法を想像する。すると、剣から何かが体の方に流れてくる感触と共に力がみなぎつて来た。同時に、剣の持つ『許容量』の高さが理解出来る。確かにこれは師匠が推し進めするのも分かった。例えるなら、無駄にでか過ぎるデータ容量を持つパソコンみたいな感じか。

何で俺にはこんなハイスペックな物ばかり手に入るんかね、元が

ビリショウもないのにな。

ふん、どうだ。まいっただか？ と言いたげに鼻息を荒げ両腕を組みながら俺を見る師匠。嘘を棚に上げて威張るところではないと思うが…。

「まあせいぜいそれでも使って死なんよつにな。貴様にはいつまでも私の弟子で居て貰うつもりなのだから」「

あぐどい事を考へている邪悪な笑みを見せながら、氣丈と回じりに立ち上がり保健室を出て行つた師匠。

俺は師匠の姿が消えた扉を見つめる。あの人も何だかんだ言つて、俺の事を心配してくれてるな。と思つたのだが。

「ん？」

剣の鞘さやと刃の部分の隙間に、何かプラスチックの糸ひというか…。服を買った時に付いて来るネームのような物が挟まつており。書かれているのは。

『言い忘れていたが弟子。この剣に一回でも魔力を注いだら、他の『武器系の道具』には魔力を注げない呪いを剣に掛けられるから、氣きを付けておくよつ』
「……、誘導ゆうしゅうしてたよな」

俺は今この瞬間どこかで高笑いしているだらう師匠に、試し切りをしたくなつた。

とりあえず『異界』といふぐらいだから、念入りに準備する事は無駄ではないと思い、寮の自分の部屋で荷物をまとめていたのだが。

「つちも行かせてくれへん！？」

先程インター ホンを鳴らし部屋に入ってきた途上が、やや白さが入り淡くなつた空のよつた水色の髪を揺らしながら、幻聴かもしれない言葉を掛けてきた。

「…、途上。悪いが、『冗談なら他でやつてくれ』

「冗談なんてゆうてへん、うちも『異界』について行く『魔法も使えない…』のにか？」

「…、つん」

「まあ、魔法については向こうにあるらしい『魔石』を使えばすぐ使えるから良いとして…。本当に良いのか？」

「くじと頷く途上。その瞳には強い意志が見えるが、それはどこか確固とした、とこより逃げていよいよ思える。…何かしら、理由があるのか。

「もう一度聞くぞ、向こうでは下手をすれば死ぬかもしれない。俺

達はいざつて時お前を守れる保障なんてないんだぞ、本当にそれで
もいいのか？」

途上は俺の『死ぬ』という言葉に少しだけ怯えの色を見せたが、引
かずに再びこくりと頷いた。そこまでの事なら、追求はしないが…。

「よし、なら途上も一緒に行くか」

「え、ええの！？ そんなに簡単に決めて」

「簡単かどうかは俺の事じゃないから知らないな」

「……！ ありがとうな！」

途上が喜んだ声を出したかと思うと、俺の背中に思い切り両腕で抱
きついて来た。後ろからの突然の衝撃に、俺は思わず嬉しさよりも
「うっ」といつ呻き声が出てしまったのだが。

「真人、具合が良くなつたのなら支度をし　」

タイミング良く、俺が立つ直線状にある玄関から勇気が入つてきて
いた。

そして途上に抱き付かれている俺を見るなり、みるみるクズでも見
るような冷めた目つきをして。

「…やはり私一人で行つてきます」

ガシャアアアアアアアアン！ と外に出ながら乱暴に扉を閉めた。
なんというタイミングの悪さ。

「すまん、少し離してくれ」

「へ？ …あ、ごめん」

勇気の行動に呆気に取られていた途上から離れ、俺はすぐさま靴を履き玄関を出る。

「勇気ービーこつ。…つー?」

玄関を出るなり、俺は大きく襟首を掴まれ体ごと引っ張られた。きゅーぱたん。と少し擦れる音を出しながら俺の部屋の扉が閉まる。掴んでいる方向を見れば、玄関の扉を開けると丁度死角になる場所に隠れている勇気がいた。俺はてっきり怒つて遠くに行つたのか思つていたんだが。

「…どうこう事ですか、さつきの事」

「さつき?」

「先程ですよ、先程。貴方が途上さんと言つていた『なら途上も一緒に行くか』とは何ですか」

「そりや、そのまんまだろ?」

そこで勇気がはあー。と思い切り疲れたような溜息を吐き、頭を右手で抱えながら再び俺の顔を見る。

「私達が行く所が分かつていて言つてこるのはすよね?」

「ああ」

「…、大切な友達なのでしょう?」

「途上がどう思つているかは知らんが、俺は少なくともそう思つて

いる

「それなら、何故?」

「何故つて…」

「大切に思つてているのならいいで待たせようとは思わないのですか。大切だからこそ、待たせるべきなのではないのでしょうか?」

「……」

「私は、待たせておいた方がいいと思います。もしもの時を考えるのならば…」

「いや、連れて行く。あいつは自分の意思で行きたいと言つたんだ、それ以上必要な事はない」

「…知らないですよ」

「迷惑なら俺が謝る」

「迷惑ですよ、本当に。まつたく…、貴方はどうまで我慢なのですか」

「すまん」

勇気は「謝つて済むのなら警察はいらないですよ…」と言いながら俺の部屋の扉を開けて、中に入つていった。俺も続けて部屋へと入る。

「あ、… ゆ、勇気さん。」ヒカルは…

先に戻つてきた勇気を見るなり、硬直して上がつていてる声を出す途上。相変わらずの人見知りつぱりだな。

「貴方も付いて来るのですよね？」

質問してきた勇気に、緊張がピークにまで達したのか。途上はトマトのように顔を真つ赤にして。

「ひや、ひやい！」

一咄律の回りない声を上げる。おまけに眼まで高速に回転していた。そんな途上の様子を見た勇気は顔を少し顰めながら。

「…あの、私はそこまで怖いのですか？」

若干落ち込んでいる。しかし途上は恐いくそんない事はないので、弁護しようとするのだが。

「ひひひひえ、しょ、しょんな事...」

嘔みに嘔みまくる上に焦るばかりで、余計に事態が悪化していく。

「あのな、何のコントをやつてるんだ？」

「.....やはり私は」

「べべべべつに焦つてませんよー？」

膝を曲げながら床に人差し指でもじもじと何かを書き始めている勇気と、両腕を上げながら何を弁護しているのか分からぬ状態の途上。

「勇気、お前も地味に凹んでるんじゃない。途上、お前はとりあえず深呼吸でもして落ち着いてくれ」

俺は溜息を吐きながら先導する。やれやれ、ここからを見ていたら、この先の旅が前途多難になる予感しかしなかった。

俺と途上と勇氣はとりあえず解散し、日が昇っている内に最低限必要な荷物をまとめ、夜に『門』前で集合する事となつた。

けれど午前のうちからまとめ始めていた俺は、夕日が山に隠れるなんとも言い難い風味を感じながら、早すぎる時間から門の前で一人待つことになつてしまつた。

といつても本当に目の前などという馬鹿な話ではなく、近くにある休憩所にあるベンチで、ほのぼのと辺りの風景を見ながら待つているのだが。

「…それにしても、相変わらず大きすぎるだろ」

誰に話しかける訳でもなく俺は一人呟く。だいたい門の大きさは山一個分の大きさだ、ここから一番高い所まで見上げていると首を痛めそうになる。というかそんな具体的な比喩が出来るのも、門は扉があつたりする訳ではなく、ただ枠組みとして存在しており、すぐ後ろには山が聳えているからだ。そして門を正面から覗き込んで見ると、確実に山ではない「どこか」に繋がっている穴だけが見える。

この『門』は『異界』への唯一の通行手段であり、また魔王や勇者こと瀬名さんがこちらの世界にやって来たのもこれを使ってらしい。昔からあつた訳ではなく、また無かつた頃は日本を含めて魔法の存在は一切として知られておらず、勇者や魔王などは空想上の人物だった訳らしいのだが。こちらの世界でいう大きな出来事、丁度日本を含めたアメリカ、ヨーロッパ圏と、アジア諸島の世界規模の戦争。即ち『第三次世界大戦』が今か今かと火蓋を切ろうとしていた頃に、突如として日本の首都東京の過疎地帯に『門』が出現したらしい。しかし発見された当初はまやかしだ。などと言われて相手にされず、

そして日本政府としてもそれどころではなく、国外との戦争の体勢に明け暮れていたらしいが、門を経由してやってきた『魔王』と『勇者』の二人が一方的に交渉。そして誓約を強制的に結ばれ、ようやく『異界』の判明と『門』の存在を知る事となつたらしい。

まあ、そんな教師の話を思い出すほど、俺は暇だったのだが……。

「オウ、ナンデオマエガココニイルンダ！」

隣から日本語馴れしてないよう見せ掛けた言葉が聞こえた。しまつた、考えてなかつた。ここは『こいつ』の居場所というか拠点だつたな。

「……」

「ほーう、美少女がここにいるのに無視するとは貴様いい度胸、ダナ！ ははははっは！」

嫌々ながら隣を見てみると、どんと胸を張り女らしくない笑い方をする、迷彩服を着た兵隊姿の白銀の髪の少女がいた。というかもう一人ほどそんな変な笑い方をする人物を

俺はよく知つているが。

「新崎、入学式振りね、何曰ぶりだつて。忘れたからまあいいわ」「……一週間振りぐらいだろう。それ以外の日お前は『異界』攻めをしているからな、クルト」

そう、隣にいるのは魔法学校在住の『ラ・シーア・クルト』と呼ばれるロシア人であり、軍人らしい。こいつは魔法学校の魔法技術を目当てに入学ってきて、当日からここ の門を攻めた事によつて一躍有名人となつたので、同級生で知らない奴は居ない。本人は同じよ

うに軍人である父親から小隊を譲り受けており、その小隊を使って隠すことなく堂々とこの門から『異界』を毎日一回攻めている。しかし例外として他人に迷惑を掛ける事だけは絶対にしない。という妙なポリシーを持つ絶大に変わり者だ。

その妙なポリシーのお陰で、魔王から追放される事無く今こうして攻めて、特に追求されないというのもある。

実は他にも理由もあるのだが、それはどうせこの中に入つたら嫌といつほど分かるので忘れよう。

とりあえず氣は進まなかつたが、話しかけられたからには喋るか。

「今日の攻めは終わつたのか？」

「んー、終わつたよ。今日も完敗した」

「負けたのにやけに清清しいな」

「負けても楽しいからよ、それに今日で終わる訳じやない。明日また挑戦すればいい話。貴方だつてそうでしょ？」

「…そうだな、俺もどちらかといつとそういうタイプだな」

「昔つからそうよね、変わらない」

「ほつとけ」

クルトが「ハハハハハハハ！」と涙を出しながら逞たくましい笑い声を出した。そこまで笑うか。

暫く笑つていたこいつだったが、突然固まつたかと思うと笑い声を止め立ち上がる。クルトの視線の先を追つて行くと、黒人にサングラスを掛けた、いかにも臭のする人がクルトに向かつて手招きをしていた。

「ごめんな、隊員達が呼んでるわ」

クルトは、しーゅーあげいん。どう聞いても片言な英語を呟いて、隊員達のいる方向へと走つていった。

そんな後姿を見ながら俺は、また一人休憩所にて待つ。しかし、いつも昔から変わつてないな。

「彼女、変わつてないですね」

今度は透き通るような声が隣からしたので横を見てみる。そこにはベンチに座らず立つている勇気の姿があつた。灰色のリュックサックを背負つている以外に、対して何時もの姿と変わらない。

「隣、いいですか？」

俺が頷くと、ちょこんと少しだけ距離を置きながら、勇気はベンチへと座り、それから背負つているリュックを空いているスペースに置く。

「早いな」

「越した事はないと思ったので、それと用意するのは、着替えと食料だけだつたというのもあります」

勇気の話を聞いた俺は思わず噴出してしまつた。前半は想像出来た。しかし、そのまま後半部分まで想像してしまつたのが悪かつた。落ち着け、俺。

「……」

先程途上が俺に抱きついてきた時の様な、といつかそれ以上に冷めた目付きで勇気はこっちは睨みつけてくる。

「い、いや。すまん。俺も健全な男なんだ、許してくれ」
「酌量の余地なしです。弁解は一切認めません」

「あのなあ……」

「あ、待つてくれたんー。あー……」

俺が何やら拗ねたようにも見える勇気を宥めていると、途上の声が割り込む。その声は最初はどこか嬉々としていたのだが、最後一気にトーンが落ちた。勇気がいる事に気づいたからだろう。人見知りスイッチが入っている。

「…もしかして、待つていましたか？」

丁寧な言葉遣いで喋り、似非関西弁は失せて表情からも笑顔が消えていた。

「いえ、数分ほど前に来たばかりですから。気にする事はないです
よ」

「…はい」

途上の上がつているようにも見えた髪の毛はゆらゆらと風に揺れ、バッグを背負う肩も竦んでいるように見える。なんだかな、こいつも早く人見知りが無くなるといいんだが……。

「それでは予定より早いですが、『異界』に行くことにしましょう

か

「そうだな」

「はい」

全員分の声を確認した勇気は置いてあつたリュックを背負い、一度だけ後ろを振り向いた後に『門』の方へと歩き出す。一直線に道路

が門の入り口へと繋がり、その姿は門を潜るところよりは、トンネルの中へ入つていくような感じだ。

一步。また一步と歩き進めていく」と、暗くなる。しかし一定毎に黄色の蛍光灯ランプらしき物が両サイドで光つているので、真っ暗な場所は無かつた。そして途方もないようにも見える道路を歩く間の暇を潰す為、自然と途上を初めとした会話が始まつていった。

「「」の道路は資材や人を運搬する為にあるんですね」

「そうです。といつても、午前中だけで作業は強制的に中断されますが。よく大型トラックが通つたりするので、わざわざ「」んな午後にしたのですが…」

「因みに関係ない話をするが、「」んなに詳しいのもよく小さい頃こちら辺に来たからな」

「小さい頃ですか」

「ああ、よく氣の強い勇魔なんかが先陣切つていたが…」

「待つてください。それではまるで、私が男勝りしているみたいな言い方ではないですか…」

「……」

「何故黙るんですか！？」

「いや、別に。自覚が無いってのも大変だな。ただけで」

「…真人。貴方には後でキツく言つ必要がありますね」

「待て待て待て、魔気が言つと若干まだマシに聞こえるが、お前が言つとマジにしか聞こえん」

「本気です」

「すまん」

「…まつたく、貴方はどうしてこういう捻くれているんですか

勇気がそっぽを向き、溜息を尽きながら呟くと。途中から黙つていた途上が何やら右手で口元を抑えている。

「…ふ、く。く…、くく…」

顔を本人に気づかれない程度に見てみれば分かつた。どうやら笑うのを堪えているらしい。…こいつもこいつで、楽しそうだな。そんな他愛の無い話や魔法の話などをして、十数分ほど経ち始めた頃。風景が大きく変わり始めた。平坦だった壁はどこか洞穴でも入ったかのようにでこぼこと変形し、道路は凹凸や砂利の溢れる地面へと切り替わっている。

「…真人」

切羽詰まつたというか、緊張感のある顔付きで俺を見る勇気。分かつてる、そろそろ『あの人』だろう?

狭かつた蒲鉾かまぼこのような形をした場所は、大きくドーム状に広がった。中央を二つに線引きするかのように巨大な鉄格子が存在しており、まるで俺達のいる世界と、魔法が当たり前の世界との分かれ目のようにも思える。

「いらっしゃい」

そして、『あの人』の妖艶な声が響いた。

「久しぶりねえ、新崎君と…、えーっと、誰？」

鉄格子の上に乗っていた『あの人』がぺたん。と奇妙な音を立てながら地面へと降りた。

「うーん、片方は勇魔ちゃんの面影はあるけど…、もう一人は誰かしら…。まあいいわ、新崎君に『直接聞く』方が早そうね」

「真人…！」

「……う、おおおおおおおおお…？」

「に、新崎さん…！？」

『あの人』がそう呟いた直後、視点が目まぐるしく変わり、吐き気さえ覚えた。勇氣の声と途上の声が途中聞こえた気がしたが、正直それどころではなくなっている。

「抵抗するわね、でも私の淫術にかかるば誰一人として最後まで抵抗できないわ」

竜巻のように荒れ吹き込む感覚の中、『あの人』の声だけがはっきりと聞こえた。いや、これは聞こえてるんじゃない。もう既に刻み込まれてる…。

「ほーらほー。よし、完了」

完了。という言葉が聞こえると同時に、つい数秒まで感じていた気持ち悪さは抜け、気だるさだけが残った。俺はその場で膝を折りな

がら両手を地面につけ、滝のよつよつ吹き出る汗と共に息を荒げる。

「だ、大丈夫ですか…っ！」

淑やかに駆け寄り、俺の背中を摩^する途上。大丈夫かと聞かれれば大丈夫じゃないんだが…、それよりも気になるのは『あの人』だ。

「貴方は、相変わらず何をやつてるんですか！　お祖母さん！！」

勇気の批判する声、そして叫ばれたお祖母さんという発言。そう、俺の目の前で立つこの人は…、朝倉勇魔の祖母にして、魔王淳の母でもある『魔王クラ』だ。姿は魔氣をそのまま更に大人にさせたような感じで、…色々と成長した姿といつていいだろう。違うといえば着ている服が学校の制服ではなく、未だ見慣れない独特の服を着ている事ぐらいだろうか。

そしてクラさんは特別な魔法を使う事が出来る。本人は『淫術』と呼んでいるのだが、これが半端ではないほど厄介なのだ。まず、相手の五感を支配した後に、本体である体を無くし弱っている精神ごと乗っ取る事によって操作を行うという、この人の性格をそのまま現したような力を持つているのだ。クルトとその小隊が返り討ちに会うのも分かる。

「だつて、新崎君面白いんだもーん。これくらい良いじゃない、勇気ちゃん」

俺の記憶から全てを読み取った上で、大人の体で子供のようにはしゃぐクラさん。対して勇気は憤りを隠せない表情で噛み付く。

「だとしても…！」

「はいはい、分かった分かった。で、貴方達は『異界』に行きたいんでしよう？」

「…ですから、ここを通して欲しいんです」

脳味噌に直接電気棒でも突っ込まれたかのような違和感を頭に感じつつ、俺は言葉を紡ぐ。実際にそんな体験してはいないし、したくないが。

「んふふー、その考え方素敵よお。背筋がぞくぞくしてくるわ」

本当に背筋をぶるぶるっと震わせながら頬を桜色に上氣させ、恍惚の表情をするクラさん。…姿形が似ているから、まるで魔気がやっているみたいで少し目付け所に困る。

「相変わらずの変態つぶりですね…」

「そうねえ、魔王の中では一番の変わり者つて言われてるもの。ありがとう、つてそんな話じやないわ。貴方達『異界』に行くんでしょ？」

「淳さんからは承諾を頂いてます…がっ！？」

「あの子はどうでもいいのよ。今ここを通すも通さないも私が決める事なんだから…ね？」

俺が喋っている間瞬きをした直後に目の前にいたはずのクラさんが消え、後ろから眩暈のするような強烈な匂いと感触を感じた。今の数秒にも満たない時間で後ろに移動したのかこの人は！？

「逞しいわねえ、男の人の背中つて」

その上で両腕を首に絡ませ、クラさんは耳元で囁いてくる。俺は咄嗟に振り放そうとしたが、体が思つたように動かないどころか、逆

に痺れるような感情が湧き出でた。

「ま、た… 淫術を…」

「貴方達は魔法と勘違いしてるみたいだけど、まあいいわ。これもどひせ向こうに行つたら嫌でも分かるもの。それよりも、今…」「はああああああ…！」

俺が拘束されていると、勇気が持つていて鞄をクラさんに向けて大きく振り回す。「あら危なこ」とにせにやしながら雲のよつこやらりと避けた。

「嫌ねえ、ちよつとした冗談じゃない。すぐちよつかい出すと怒るんだから」

「はあ、はああつ。… それより、早くここを通してくれませんか。

貴方に関わっている一分一秒が惜しいです」

「もう。少しごらじずっと作業ばかりしている女性に娯楽ぐらいあつたつていいじゃない」

「貴方の娯楽に関わっていると口クな目に会わないからですよ…」

何か苦い物をかみ締めているかのような表情をする勇気。実は俺には心当たりがある。あれは途上に説明した俺達がここいらを探検していた頃、何度かクラさんと遊んだことがあるのだ。ただ遊びといつても子供がやるような遊びではなく、危険が伴う遊びばかりだった。しかも巧みに淫術によつて『また来たくなる』心理にしていたらしく、俺達は疑問も持たずここに來ていたのだ。

「あれもちょっとした娯楽だつたわよ。別に貴方達の持つてた願望を軽く弄つただけだから、無理して来るようにしてた訳じゃないのにねえ」

俺の心を淫術で読み取ったのか、こちらにウイーンクをしながら笑みを見せるクラさん。その度に勇気が鬼のような形相をするのは気のせいだらうか。

「もう我慢なりません、実力行使でここを突破するまでです！――！」

どうやら氣のせいじゃなかつたらしく、完璧にぶち切れた勇気が鞘に収めていた刀を取り出し、クラさんに突撃して行った。

「この程度で我慢できないなんて、まだまだお子様ね。いいわ。私が女の手解きを見せてあげる」

クラさんは両手の平をバツ！と開いたかと思うと、突撃してくる勇気に丸腰で。

「大好き、勇気ちゃん！！」

思い切り腰元から抱きしめた。

「は、はうー？」

抱きつかれた本人である勇気は、呆気に取られたような声を出しかと思つと。

「あ。あ…あー」

そのまま先程のクラさんのように頬を桜色に染め上げ、カクン。と瞳を閉じながら人形の糸が切れたようにクラさんの肩に凭れ掛かった。

「勇気！？」

「勇気さん！？」

「大丈夫。興奮してたから、眠らせただけよ」

俺と途上が急いで駆け寄つてみると確かに、すー。すー。と一定のリズムを取つた呼吸をしながら眠つている。

「！」を通りたいのなら好きにするといいわ。最初からそんな事興味なかつたもの

にやり。と悪戯っぽい笑みを見せながら「！」を見るクラさん。本当に遊びでやつてたのか…。

「新崎君、女の子なんだから大事にしてね」

クラさんが抱いていた勇気を解放して、「！」に渡してくる。俺は両腕を使っても勇気を持てる気がしなかつたので、途上に手伝つて貰いながら背負つた。う、お…意外と。

「魔力分けて上げるから、魔法でも使って頑張つて。重いなんて絶対思っちゃ駄目よ」

「あ、…ありがとうございます」

クラさんに突然手を掴まれたかと思つと、そこから温かみのある力が伝わつてくるのが分かつた。

「どうして急に協力的になつたんですか？」

「うふふふ。私みたいな年寄りになつてくると、こう若い子を見てると弄りたくなるのよねえ。特にこういうムキになつてくる子、孫

なのに可愛いつたらもうー「

ふにふにー。と言しながら勇氣の頬っぺたを人差し指でつつくクラさん。その表情はどこか微笑んでおり、嬉しそうだ。隣でその様子を見ていた途上が、何故か自分の頬っぺたを突いていた。

「鉄格子は上げておいたから、今からでも通れるわ。でももう少し
だけ私と遊んでもいいのよ？」

「遠慮しておきます」

「つれないわねえ」

クラさんはうふふと笑った後、今度はひよいつ。とまるで重力を感
じさせないようなジャンプをして、いつの間にか天井近くまで釣り
あがつっていた鉄格子に腰掛ける。ん？ 待てよ。その位置的に。

「…、新崎。あかんからな」

俺の考えていた事を逸早く読み取ったのか、横から関西弁で呟く途
上。なんのことだかな、俺は分からんぞ。

「んふふふー。いいのよ、男の子なんだから、見たかつたら見ち
やつても」

丁度鉄格子の下を潜り抜ける時、確信犯の嬉しそうな声が聞こえた。
しかし俺は構わず歩き続ける。もしこういう時気丈がいたりしたら、
人目関係なく「ま、マジですか！？ お願いします！」と土下座
しても見せて貰おうとするんだろうな。

そして歩き続けドーム状の出口に差し掛かった頃。

「通してくれて、ありがとうございます」

クラさんその後姿に向かって、俺は勇氣を背負いながら静かに一礼をした。すると、クラさんは後ろ向きに手を振ってくれる。

「…行こか」

立ち止まっていた俺に対して、途上が声を掛けってきたので、再び前を向き歩き出した。

…きっと、寂しかったのは本当なんだろうな。

歩きに歩き続け、やがてはクラさんの姿が見えなくなりながら、俺はそんな事を密かに思つ。

「あの人、あそこですかと仕事をし続けるん…？」

ふとこの道程に入つてからずっと黙つていた途上が、一いちらを見ながら話しかけて来た。覗き込んでくる瞳はただひたすらに水色だったが、どこか深い青色が混ざつてこるみつに見える。

「そうだな、毎日だ」

「…毎日」

少しだけ俯きながら「毎日」という単語を復唱するかのように呟いて、すぐに黙る途上。…どうしたんだ？

「ん、んんーー！」

俺が途上を気にすると同時に、背後から背筋を伸ばすような声が上

がつた。

「んー…？」

そして今度は寝惚けているんだろうな。と思ひ可憐うしい声。

「ままままま、真人！？ 貴方私に何をツ！？ といつか何故私は真人に担がれているのですか！？」

次に上がったのは状況が理解出来、慌てふためく完全に眼が覚めた勇気の声だった。

「落ち着け。お前はクラさんに眠らされてたんだよ」

若干動転している勇氣に言い聞かせると、途端に地味に痛かつた蹴りが止む。お前は馬か…。

「すいません…、なんとなく分かりましたから、とりあえず降ろしてくれませんか？」

「大丈夫なのか？」

「ええ」

俺が腰を下ろすと、一気に背中にかかっていた重さが消え、身が軽くなつた。すると、降りた勇気が今にも消え入りそうな声で呟く。

「…私、重くなかったですか？」

「全然」

「そ、そつですか…」

俺の回答のどこに安心する要素が合つたのかは分からぬが、勇氣

はほつとしたように安堵の息を洩らした。確かにクラさんと言つた通りだつたが…、分からん。

「男の人である新崎さんには分からない事なんです…」

途上の言葉に、やけに納得しているような様子で勇気が領いていた。お前ら仲良いな。

俺達は止めていた歩みを動かし、最初に比べると大分凹凸が激しくなり暗くなつた道を進む。そしてその合間に勇氣に事情を説明した。

「あの人は…、まったく
「悪気が合つてやつてる訳じゃないと思つんだがな…」
「いえ、例え優しいだらうとしても、絶対悪気はあります。確信で
きます」
「そこまでか…」

ま、かくこう俺もあの人人の弁護をする気はないが。

「それは置いておいて、これからどうしましようか
「考えてなかつたのか？」
「一応は考へてゐるには考へていますが、あくまで大体なので
「そうか、ならその時に決めればいいんじやないか？」
「…私も賛成です」
「そうですね。その時に決めましょうか

勇氣達と話をしていると、徐々に通路といふか道の果てが見えてくるのが分かつた。そしてそこから見える世界がまだ見ぬ『異界』かと思つと、いい年こいて楽しみになつて来る。

「行きましょウ」

勇気の言葉を筆頭に、俺達は一つひとつ田舎すのだった。

- Episode・9 「異界観光ツアー」 - (前書き)

短いです。

「もうそろそろですね」

勇気の声と共に、俺達は再確認する。俺達は既に『異界』に入りつつあるという事と、そして目先とまではいかないが、夕暮れの時の赤みが掛かったオレンジ色の光が少しずつ差し込んでおり、今はまだ四角の枠組みとして存在している場所に辿り着いた時が『異界』に入った事になるのだろうと。

「出発したのは夕方より少し前ですから、歩いている間に夕方になつたのでしょうか？」

「大分歩いたしな、さすがに疲れて来る」

愚痴を言いつつ歩を進めると、更に入り込んでくる光に赤みが増していき、俺達は四角の枠組みにも見えた出口へと辿り着いた。そして、そこから見えた世界は。

まず隣にいた途上は一瞬息を呑み、そして咳く。

「…凄い」

いや、確かに俺も思った。といふか、これは「凄い」の言葉以外にどう表現すればいいんだ？

どうやら平均的な地形よりも微弱に高い場所らしいここから見えた世界は、全ての自然が巨大だった。まず草原と呼ばれるような広々とした場所は果てが見えず、その中でぽつりと、たった一軒ではなし何十にも立てられた農村がいくつもある。夕日はそのまた向こう

に聳える何十もの連なる山によつて今までに覆い隠されようとして、山の中には頂上から赤い物を吹き上げている物すらあつた。そしてそういうた山と共にするように、もはや苦笑いしか出ないほどの樹海が広がっている。赤と青色の混じる空は、既に都会で見るよりもたくさん星が見え、といろどりに雲が細く縦に伸びていた。

初めてアフリカの大地を見る人はこんな気分なのかと分かつたような気がする。

「これは、予想以上に……」

あまりの巨大さと初めて見る『異界』に圧倒され、言葉を途切れさせる勇氣。余裕が出来たので隣を見てみると、眼を大きく見開いていた。

「凄いわよねえ」

ん？ なんかつい数十分ほど前に聞いた事のあるよつな、雰囲気をぶち壊しにする人の声が後ろの方から聞こえた気がする。

俺は恐る恐る後ろを振り返りつつ見上げると、確かにそこにはさつき別れたはずの、魔王クラさんが出口のばつた所に右手で頬杖を付きながら腰を据えていた。

「んふふー」というか私達にとってはこっちが当たり前なんだけどねえ。向こうの世界も向こうの世界なりに素敵だけど

「……」

「……」

「あれ、クラさん？」

「あらあらあ、途上さん以外は全然反応してくれないのね。冷たあ

い…

魔氣と瓜一いつの体をしながら、見慣れない服装でくすくすと笑うクラさん。もへ、この人ならなんでもありじやないかとすら思えて来るな。

「…で、何の御用でしょつか？」

やけに丁寧な言葉で、尋ねる勇氣。表立つた態度では出でないものの、殺意といつか負の感情が渦巻いているのが見える。

「んふふふ、別に貴方達に用が合ひてここに来たんじゃないわ。ただそろそろ来るかなあって」

「来る？」

「あ、来たわね」

とうあえずクラさんが何を言いたいのか分からなかつたので、俺はクラさんの視線の先を見てみた。…？ 風景に変化はない。

「いや、待て…！？」

よくよく見てみると、俺が眼を凝らしてやつと確認できる程度なのだが、豆粒ほどの何かが徐々に大きくなつていいのだ。そして、時間が経つ毎に豆粒ほどだった姿は形を取つていき、次第に輪郭を現す。

「凄いわねえ、相変わらずその眼。普通の人ならまだ見えないはずよ。気づけた御褒美にキスしてあげたいくらいだわ」

「…遠慮しておきます」

刺すような二つの視線が俺に向けられている気がするが、きっと気がのせいに決まっている。

俺は逃げるようになり、もとい逸れていた意識を再び戻し前方へと集中させた。

輪郭を示していた何かは更に明確な姿を現していき、俺は思わず声に出してしまう。

「なんだありや」

最初俺は何かドラゴンか何かががやつてくるのだろうかと、数少ない知識。といつてもアニメや漫画だけどな…。そこから引き出して想像した。が、飛んできたのは想像に反したといつよりも、ありえない光景が眼に入ってきたのだ。

少女が、空を走っている。

比喩や例えなんかではない、本当に少女が空中で走っている。まるで少女は水溜りを避けるかのように片足ずつ大きく間隔をあけ、空を踏みしめながらこちらに向かつて来ていた。といつか空中で人が浮いてるってかなり怖いな、幽霊みたいで。

「あ、あれ…」
「……何ですか、あれ」

よつやく視認出来るよになつたのか、気づいた一人が呆気に取られたような声を出す。というかあれが何なのか逆に俺が聞きたい。

空中を走る少女は一定のリズムを取りながら足踏みしている。その上で両腕を左右に広げ、まるで綱渡りをしているかのようにしているが、バランスでも取っているのか？

「こひつしゃーい」

クラさんが空中を今正に走って来ている人物に向かつて手を振る。すると、少女は溜息を尽きながら俺達が立っている地面へと降り立つた。それに合わせて着地した場所から軽いそよ風のような物が、波をうづかのよひに吹ぐ。

服装はクラさんと同様に見た事が無い。防寒着に似ているがそれをスマートにしたような感じで、濃い緑色に染められた中に白色のボタンが際立つている。軍帽のように硬そうなイメージのする同じく緑色の帽子からは三つ編みを覗かせており、髪はまるでたわわに実った稻のような小麦色をしていた。背丈は俺達とそう差はなく、眠たいのか半分まで瞼を降ろし、捉え方によつては寝起きのよつとも見える。

「ねよすでいなやじといひびんめたま

そして、眠たそうな少女は俺達には理解出来ない何かの言葉を喋つた。

「は？」
「へ？」
「え？」
「およとこのてつあがどごみのた。ふふふふん」

俺達は理解不能の言葉に再び呆気に取られた声を洩らしたが、ただ一人クラさんは理解出来たらしく、眠たそうな少女と同様に意味不明の言葉を喋る。日本語のようにも聞こえる気がするが、イントネーションというか発音が近い物に俺が勝手に解釈しているだけなの

か？

ぽかん。としていると、俺達の様子を見たそいつは、やれやれという表情をしながら一息尽いて喋った。

「しかも、この人達向こうの人は達じやないですか。魔法でわざわざ声を調整するのも大変なんですよ」

今度は日本語？ といふか、さつきまで全然違う言葉を使ってたが、日本語話せたのか。

「違うわよん、魔法を使って言語調整をしたのよ。新崎君たちの世界で言うなら世界共通語の英語にしたような物かしらあ

「地味に例え悪い…」

「新崎、まともに相手をしていたらキリがないです」

「…某コンニャクみたいやな」

つまり、じつちの世界の言葉を喋っていたけれど。俺達に分かるよう魔力を使って日本語に聞こえるようにしたって事か？

「で、私に何の用ですか。わざわざ呼び出したりして、まだ配達全部終わってないんですよ？」

「この子達の案内人をやつてくれないかしら。まだじつちに来たばかりで道に迷うと思うのよ」

「嫌です、何で私がそんな面倒な事をしないといけないんですか。第一知らない人ですよ」

少女は明らかに嫌悪感を見せながら、落ちついた瞳を更に細める。まあ、そうだよな。見知りの人ならともかく、初対面の何も知らない奴と一緒にいろと言わされてやる訳がない。そう思つたんだが。

「そこ」にいる新崎君なら、貴方の『アレ』も叶えられると思つたが
なあ

クラさんが二口一口しながら謎めいた発言をすると、ぴくりと少女の眉が微かに動く。

「…、彼がですか」

先程まで興味のなさそうだった瞳が、色を纏まどい俺に向けられた。クラさんは何を言つたんだ？

「因みに隣にいるのは私の孫よん」

「貴方の孫をお供にする程ですか…。いいですよ、興味が沸きました」

「んふ。結構結構」

何やら勝手に交渉が始まつては終わつたらしく、俺達は事情を飲み込めないままだった。それを余所に、少女がこちらへと歩いきたかと思つと。

「初めてですね。たつた今先代魔王クラ様に貴方達の案内役を頼まれた、アナザー・パトリックです。パトリと呼んでください構いません」

手を差し出して、自己紹介してくれた。若干上から目線なのは置いておくべきだらうな。

「新崎真人だ。よろしく」

握手を終えると、続いてパトリは勇氣へ手を差し出す。

「朝倉勇氣です。望んではいませんが、お祖母さんの孫に当たっています」「

続いて、途上の元へと。

「あ、……と、途上藍です」

一通りそれぞの挨拶が終わると、さつそくパトリが呼びかけるように喋った。

「とりあえず夜になるまでに、近くの村に行きませんか。この遺跡付近は魔物は出ませんけど、泊まる所が合つた方がいいんじゃないですか？」

パトリに『遺跡』と呼ばれて俺は初めて気づく、確かに辺りを見渡してみれば、ピラミッドまでとはいかないが、インカ帝国辺りにも出てきそうな煉瓦で作られた建物だった。というかこの辺りでもしも寝るつていつたら野宿つて事だよな……。俺は平気だが、女子達はそういうかないだろう。

途上のほうを見てみると、少しだけ顔を青ざめてしまっている。野宿をしている想像でもしてしまったのだろうかと踏んだんだが、違った。

「『魔物』って何なん…？」

お、珍しく途上が関西弁を人前で喋った。じゃなくてだ、俺もそれは気になるな。学校の授業では魔物なんて言葉を一切聞いた事も無

いし、習つた事も無いぞ。

「すいませんが、夜になるまで結構余裕がないので。話は歩きながらしませんか？」

さすがに途上も野宿は嫌だつたらしく、それ以上は喋らず無言で領く。それにしても、途上も段々人前でも上がらなくなってきたな。

「では、付いて来て下さい」

眠たそうに稻のよつな三つ編みを揺らすパトリ先導して先へと進み、俺達は続いていくよじこじて門もとい遺跡を後にした。

遺跡を抜けるとすぐに森へと入った。そこは先程までの明るさは嘘かのように暗く深く広い。地面は一切として平坦な場所は無く、常に凸凹しており門を通る時の道よりも酷い。普段というか出来れば入りたくない場所を歩きつつ、辺りが静かになつた状態で勇気が呴いた。

「それで、魔物とは何なのでしょうか？」

「…簡単に言うと、魔力を過剰に取りすぎた動物達の成れの果てですよ。動物達といつても私達も入りますがね」

自虐気味に笑うパトリに、勇氣は顔を深く顰めながら。

「魔力の過剰摂取？ 許容値以上に魔力が溜まる事はないはずですが」

「溜まりますよ、許容値が魔力以下だつたり、外からの魔力供給によって越える事が稀にあるんです。外からの魔力供給で例えるなら、私達が普段食べている食べ物つていうのも必ず魔力が含まれているんです。特に土地が豊かな場所であればあるほど魔力は集うから、てことは豊かな土地で出来た食べ物なんかを食べると、自身の中で生産される魔力の量に追加され、許容値以上の魔力を得てしまうんですよ。えーっと一気に説明しましたが、ここまで分かりましたか？」

前半まではなんとか理解できた、後半からはもはや何を言つているのか分からん。それが表情に出ていたのか、俺の顔を見た勇気が溜息を尽き説明する。

「…つまり、許容値のグラスは満杯まで魔力の水は溜まりますが、ご飯という外から継ぎ足される魔力の水によつて溢れてしまうという事です。分かりますか？」

「ああ、そういう事か。分かった、説明すまんな」

勇氣は本当に分かつたのですか？ と疑り深い顔をしたもの、追及はしなかつた。代わりに再びパトリに質問をする。

「だとしたら、毎日食事をしている私達はもう既に『魔物』になつてゐるのではないですか？」

「いい質問ですね、結論から言つと魔物にはなりません。何故なら魔力が満杯まで溜まる事は殆ど無く、また多少は増えても魔物にはならないからです」

「なら……」

「魔物になるのは、異常な自然による環境下にいる動物達ですよ」「異常な自然環境下?」

「そうです。この森の比ではないですよ、もつともつと巨大かつ広範囲にも及ぶ大規模の森はこの世界にはたくさんあります。森だけではないんですけど……まあそれは置いておいて。そこから齋されたたくさん魔力が詰った食料を食べることによつて、魔物はどんどん生み出されていきます。ですから魔物は消えません」

「……あ、あのつ」

今まで無言だつた途上が、若干遠慮がちに話に割り込みつつ混ざつた。

「どうしたんですか?」

「魔物の姿つて……」

「それですか。魔物は大抵が動物だつた頃の原型を留めてない上に、異常に進化したというか」

「それって……あれみたいなの?」

途上がやや斜め前方を指差す。俺達はつられて先を追いかけながら木々を眼で追つて行くと、……なんか、ぎらぎらと赤い瞳でこちらを品定めするように眺め、下品に舌なめずりしている狼みたいのがいる。しかも一匹だけではなく、ここから見えるだけで十匹ほどいた。

「わあ、一匹見たら數十匹いると思えといふ^う謔^{いた}い文句のある『ヴァルフ』じゃないですか。運がいいですね」

パトリが嬉々とした表情で言つてゐるが、言葉には感情が込められておらず、もしも込めるなら皮肉だらうか。

「どうみても、肉食だよな…」

俺達を見て舌なめずりるのはよほどの変態か肉食動物さんぐらいだろう。前者なら俺は例え一人になつても戦い続ける。

「私一人なら、空中に逃げてなんのことはないんですけどね…。はあ。貴方達は何の魔法が得意ですか？」

「俺は特に」

「私はある程度なら」

「…使えないです」

「ちょっと待つて下さい。……、勇気さん以外壊滅ですか！？ 仮にでもあの人の知り合いなんですよね！？」

「期待している所悪いが、クラさんが異常なだけだ。俺達は至つて普通を教授してる」

「いやいやいや、普通でもこっちの世界では最低限様々な魔法を使えないといけないんですよ！？ ちょっと何を悠長に言つているんですか！？」

「ははは」

「開き直る所ではないですよ！？」

もはや最初に感じた冷めた雰囲気を一変させ激しくツッコミをし始めたパトリに、今度は勇気が冷めた口調で呟く。

「…貴方達が漫才をやつてゐる内に、ヴァルフに囲まれていますが」「あ」

辺りを見渡してみれば、息を荒げながら今か今かと襲いかかりたそ
うにしている狼の群れが、円を描くように少し先で囮んでいる。遠
くだからよくは見えなかつたが、狼というよりは犬の体に兎の頭部
を取つてつけたような灰色の毛並みを持つ不気味な魔物だつた。中
央に添えられた二つの赤色の眼をぎょろぎょろつと動かし、剥きだ
しにされた口からはそこだけ狼っぽい鋭利な歯がたくさん並んでい
る。

「逃げるという選択肢はなくなりました。新崎、パトリさん。途上さんを内側で守りつつ戦いましょう！」

ちやき。という金属の鳴る音と共に、勇気は腰元にある剣を取り出し前で構える。仕方が無い、こうなつた以上は俺も戦うしかないか。俺も邪魔臭いなと思つていた禍々しい剣を腰元から取り出す。思つた以上に重い。

「来ます！！」

勇気の掛け声と共に。

狼もどき共が飛び掛ってきた。

「うつ！ は、速い！？」

予想外の速さだったのか、勇気は噛み付かれそうになつた。しかし、そこはさすがの勇氣で、咄嗟に体を捻りつつ口から体ごと真っ二つにして返り討ちにする。

「魔法で筋力を強化しているんですよ、ソニツラは……ソニコラでは恐らく一番速いと思います！！」

勇気の質問に、この魔物達の事を詳しく知っているパトリが胸元から小型のナイフを一本取り出し投げる。すると見事に飛びついて来たヴァルフー匹の眉間にヒットさせた。リアルでナイフを投げる奴なんて初めて見たぞ。

「ひ、ひうー？ あかん、あかん！」

途上はといふと、恐怖が臨界点まで達したのか人前であるにも関わらず関西弁を洩らしながら、真ん中で膝を折り頭を抱えている。

「そうだな」

そんな勇気達の様子を見ながら、俺は敵に襲われつつも平然と返り討ちにしていた。

何故なら俺の『眼』はありとあらゆる物が『全て遅く見える』という才能を持つており、それによつて敵の攻撃が全て遅く見えるからだ。これは一見すると凄く思えるが、元々の俺のスペックが平均より少し上なだけなので、パワーや魔法や頭脳やその他もろもろなんて物に特化していると絶対に太刀打ちが出来ない。代わりにこういう『スピード』だけに特化している奴なら俺でも太刀打ち出来るけどな。

よつて俺は今現在結構他を見れるくらいには余裕を持っていた。といつても慢心出来る程でもないんだよな。

「ガアツ！！」

魔物が飛び込んでくるのが見える。そして、俺はこの直後に動かなければならぬ。いくら眼はよくても、俺自身の反応も当然この魔物以下に遅い訳なので、すぐさまアクションを起こさなければ身体が間に合わないという、まさに宝の持ち腐れ状態なのだ。

俺は軽く魔法によつて筋力を申し訳程度に強化させ、切れ味のよい不気味な剣で斜めに斬る。それを見て隙ありとでも思ったのか。もう一匹ヴァルクが噛み付いてこようとしたので、下あごに膝蹴りをくれてやる。

「ぎゅあああうんんううう！」

どんな鳴き声だそれは…。とりあえず怯んでいる所に剣を垂直に突き刺す。一瞬だけ物凄く暴れたが暫くすると大人しくなった。

「はあああああああッ！」

すぐ近くでは勇気が足元に俺の倍以上の骸を横たわらせ、今尚襲い掛かってくる数体のヴァルクと戦つている。しかし最初の頃のような危なつかしい戦いではなく、きちんと敵の行動を見切つた上で避けては斬つていた。足りなかつたのは実戦だけで、こういった死を伴う経験を味わうことによつて才能が開花したんだろうな。

「随分…、余裕ですねっ！…」

皮肉氣味に俺に話しかけてくるパトリ。その合間にもナイフを投げては眉間へ完璧に当てる。接近してくるヴァルクには投げるナイフを手に携え、確実に脳天へと突き刺していた。

「眼のお陰で敵が遅く見えるからな」

「違います、よつと…！ そうではなく、私は今まで何人も初々し

い冒険家達を見てきましたがあつ……初めての反応りじく、ないですねえ！！

「…とりあえず戦いながら話すのやめたがりだ。女の子なにこの喋り方はどうかと思うわ」

「ふふふ、いいですよ。戦うのを止めましょう、終わらせましょう。貴方は私に見合つ存在だと分かったのですから……」

話を聞けよ。と呴こうとすれば、突然パトリが空高く垂直に飛んだかと思うと、飛んだ地点を中心に半端ではない突風が吹き荒れた。当然距離関係なく俺や勇気や途上の身動きは遮られ、あれだけ機敏に動いていた大量の敵達も身を固めた。

「『風でも味わえええええええええええええ』…………」

遙か遠くから声が聞こえると同時に、未だ風に自由を奪っていた狼達の姿が、空気を切り裂く轟音と共に急に立つた土煙によつて消える。な、何が起こった？

「ふう」

まるで一仕事したかのよう……、とこつか実際したのであらうパートリが一息を尽きつつ空から降りてきた。

「では、とりあえず急いでるんで行きましょつか」

「お、おう」

「ええ……」

「う、うん」

一体何が今起こったのか理解出来ないまま、言われるがままに受け答えしてしまつ。

「村はもうすぐセレーンなので、質問があつたら宿でお願いします」

またしても黙たそつに顔を降ろしつつあるパートの一人によつて、俺達は呆けた状態を直すこともなく、聞くことも出来ないまま再び歩き始めたのだった。

- Episode ·10 「第一プラン・村巡り -

やたらと長く思えた森を抜けた先には大きな家から小さな家まで様々な建物がぽつりぽつりと建つてあり、俺達はとりあえずそこを田指すようにして田んぼ道を歩き始める。

田という漢字そのものが良くな分かる四角形に区切られた田んぼには、絶対触ると冷たいであろう水が張られており、瑞々しい若芽が植えられていた。

「稻か」

「そうですね。ここいらへんの地域は季節によつて温かさが劇的に変わりますから、いついた季節に合わせられる食べ物が一般なんですよ」

「…という事は、地域によつては砂漠のような場所もあるのですか？」

「…というよりも『精靈』達が住む四大地域が異常なだけなんですけどね」

「…すいません質問していいですか」

「どうぞ」

「…精靈って何ですか？」

「あー、そうですか。知らないですよね。えっと端的に答えると『精靈』っていうのは先程言った巨大すぎる自然から生まれた存在ですよ。木や森や水なんか全てが魔力を所持しているのは知っていますよね？」

「まあな」

「その自然なんかは一応許容値は存在しているんですけど、魔力を体内で作つてはある程度溜まると空氣中に発散してしまうんです。ですからただ一般的な武器なんかは魔力を注ぐ事は不可能なんです

が…、それはおいておいて。その後魔力はどうなると思います？

「空氣中に溜まるのでは？」

「合つているといえれば合っています、ですが少し違います。あまりにも濃密すぎると、とある存在へと変化するんですよ」

「それが『精靈』か」

「当たりです。ですから精靈達が存在する地域は、何かしらの異常自然環境下なんです。勇気さんが言つたように砂漠化していたり、極寒だつたりと」

「…ついでに魔物もそこから製造されると」

「鋭いですねー」

俺の言葉に何故か自虐的な笑みを洩らすパトリ。待て待て何か地雷でも踏んだのか？

「あ、ぱとりーおねーちゃんだー！」

「パトリーじゃねーか！」

高い声が響いたかと思うと、前から小さな子供が一人走つてくる。子供達の服は民族衣装みたいな物で、まるでモンゴル辺りで見かける厚着のようにも見えるが、暑くないのか。

「パトリって言つていますよね、私。パトリーではないと。しかも貴方達は年上を呼び捨てにしないで下さい」

「だつてさー、そっちの方がいいやすいんだよー」

「ねー」

子供相手に真面目に答えるパトリに対し、片方の男の子はにひひと健康的な白い歯を大っぴらに出しながら笑い、もう片方の女の子は男の子に同調するように小さな笑みを見せる。

「…………あんたたち仕事を放り投げてどこいつてんの！」

「おかーさんた！」

「逃げやべー！」

卷之三

突如として子供達よりも後ろから届いた声に、子供達は急いでパトリの元を離れどこか遠くへと駆け出した。子供はいつでもどこでもあんなもんかね…。

よかな女性。瀬名さんの着ている割烹着を着れば、定食屋の人と言
われてもあまり違和感がないかもしね。そしてその女性はこち
らに気づいた直後。

「あら？ パトリじゃないか久しぶりだねえ！」

パトリに近づいて行きハグをした。やれやけのパトリは若干暑苦しそうといつが苦しそうな顔をして「わべおおおおお……」とぐぐもった声を出していく。

「は、な、し、て、」

「あ、ごめんごめん。私つたら思いつき抱きついちゃってねえ」「はあっ、はあああっ…はあっ。わ、悪気のない殺意ほど恐ろしい物はないんですよ！？」

「まあまあ、今度家で奢らせてあげるからそんなに怒らない怒らない。それはさておいて後ろの人達はどうなただい？ 同業の方じやないみたいだけど」

「この人達はクラ様に頼まれたんですよ、案内をしろだとか……案内……てことはこの人達は向こうの人達かい。へえー、へえ、へえ。確かにこっちじや見ない身なりをしてるわねえ」

じろじろと俺達の服装を見て感嘆の声を洩らす女性。見られるつて
いつのも慣れたもんじゃないが、俺以上に途上みちじょうが顔を逸らしながら
真っ赤に熟れさせている。そこまで人の目に晒される事に慣れてい
ないのか。

「そういうえばパトリ、今日は泊まりにくるんでしょう？ それなら
さつきのお詫びと旅の祝杯として宿屋代ぐらいは安くつけておこう
かしら」

「宿屋代？」

俺が口を挟むと、パトリは何故か一瞬だけ心底驚いたような顔をして、すぐさま元の眠そうな表情に戻し答えた。

「この人は宿屋を営んでいるんですよ

「宿屋つていつも大きくないわよー。しかも大きさのわりには手
間暇かかるし、手入れもしつかりしないといけないしで大変なのよ
ねえ」

はあ。と愚痴り気味に溜息を尽く女性。なんというか表向きにはファンタジーに思えたが、蓋を開けてみればリアル事情が出てきた。
…ファンタジー。

「さてと、私も宿屋の仕事があるし、旦那に話をつけとかないと
けないから戻るわ」

そう言い手を振りながら俺達から女性は走りながら去つていった。
後姿を見ながらパトリが呟く。

「まあいいです。それよりも早く宿屋で一息尽きましょう。私昨日
から寝ないでずっと配達やつてたんで、休みたくて仕方が無いんで

すよ

パトリは「付いて来てください」とだけ言つてすたすたと歩き始めた。昨日の夜から寝ないで魔法を使つて走つていたのか…、凄い集中力だな。

魔法というのは全部まとめて『持続的』に行われる物だ、なので魔法を使つている途中で『想像』が切れたり魔力の供給が絶たれたりすると、その瞬間に効果や存在は消える。

つまりパトリがさらつと言つた事がどう凄いのかというと、飛びなら走つている間は魔力を供給しつつ、一度たりとも想像を欠かす事無かつたという事だ。それはトラックを運転しながら、運転以外の事、つまりはゴルフをまるで今自分がしているかのように考え続けるという事になる。俺だったら絶対にずっと想像し続けるなんていふ事は無理だし、魔力も絶対に持たん。

「…それにしても、本当にここらへんはのどかですね。割りと肥えた土地なんですけど、魔物が少ないなんて珍しい」

パトリが言葉に哀愁を漂わせ、感慨深そうに呟く。

辺りには夕日を反射する水が張られた田園があり、遠くの方では麦藁帽らしき物を被つた軽装の男性が、同じような田園に入つておりしている。俺達の歩く田んぼ道は舗装なんものは当然されておらず、砂利や雑草が混じつっていた。少し道から外れて見ればすぐに森への直行コースへと入るほど、村の管理は徹底していない。つまりの所、全てが田舎臭い。ただそれ以上に都会の汚れきった空気とは、真反対のようにこちらは澄んでいて、物事全てに手間暇が掛かるけれど、逆にそれはそれで味があるかのように、田舎なりの良さを感じた。

まるでここは全ての世界から隔離されており、揉め事や争い事がない平和な場所。そうすら思わせられる。

「子供の頃を思い出しますね……新崎」

「……」

懐かしい……か。

俺は幼稚園に入る頃に勇魔と共に魔法学校では幼等部へ入学していた。当時の小さな頃の俺にはダンジョンにも思えた、広大な魔法学校領地。毎日のように辺りを駆け回り、たくさん遊びに遊びつくした。その頃は俺と勇魔と桜しか入学生はおらず、今では親友の気丈を含めた同級生達とも、初等部からである。まあ、そんなヤンチャな記憶しかないんだが……。

「さついえば新崎君。さつきの人は何を言っていたの？」

途上に話し掛けられ俺の意識は戻る。いかんいかん、つい余計な事を思い出しそうになつた。

「……ん？ 待て途上。今何て質問をした？」

「いや、さつきの人は何を言っていたの？」つて

「……は？」いや、普通に日本語喋つてたろ

「ううん、訳の分からぬ言葉しか喋つてないよ

「ああ、それについてですか」

何故か隣を歩いていた途上と俺の間にまるで裂くかのように入り込むパトリ。そして下から俺の顔を覗きこみ見つめながら答える。対して弾かれたようにも見える途上は、少しばかり驚いたような表情をしていた。

「新崎さんって魔法のセンスがあるのかもしませんね」

「どういうことだ？」

「実は私はこの村に来てから、魔法を使って翻訳なんかしてませんよ」

「は？」

「まあ無意識の中に翻訳が出来るよつこつてこいつ、訓練の一つをやつてたつもりだつたんですかど…」

「すまん、具体的に分かりやすく三行以内にまとめてくれ」

「つまりところですよ、私が最初に翻訳魔法を使う事によって、『魔法を使って翻訳している』と先入観を抱かせ、知らない言葉があれば無意識の中に魔法を使い、翻訳出来るよつこにさせらるつもりだつたんですね」

「えーっと…、良く分からん」

「ようするに本人達に勝手に勘違いさせて、無意識に魔法を使わせるつて事です」

「お、おう」

「貴方達は見た所、魔法を使う上でどうしても『意識』しないと出来ないんですよね？」

「ああ」

「それだと私達が喋る度に意識したり、他の事に集中できなかつたりと大変なんですよ」

「だから、じつは無意識の中に出来るような特訓をしたつて事が？」

「そうですね。もし魔法が使えないで翻訳出来なかつたら、誤魔化せばいい話ですし」

「…」

待てよ、そうすると途上はここに来てから一切として何を喋つてゐるのか分からなかつたのか。あの腫れ上げたように真つ赤にした顔は、

単に人に慣れていないだけじゃなくて、途上からすれば突然知らない人に舐め回すように見られたのか…。それは確かに顔を赤くする。

「悪かつた途上…」

「脈絡も無く謝つてきた…？ うちなんもしてへんよね！？」

真面目に凹みながら謝ると、突然のシリアスに耐え切れなかつたのが途上の精神が言葉として公に吐き出された。

「え？」

「へ？」

「……あ」

思わず洩れたであろう勇氣とパトリの声。そしてその意味と自身の行為に気づいたであろう途上は、かあああッ。と傍目から見ていても分かるぐりいに、ふるふると震わせながら顔を赤くする。

「…」

「…」

「…」

魔法学校からの知り合いである勇氣は眼を大きく見開きながら途上を見つめ、先程知り合つたばかりのパトリですら口を開いたまま止まっていた。どっちも恐らく印象が崩れたからだろうな。

そんな空気に耐え切れなかつたのか、途上が突如として瞳に炎を宿し空氣を破るかのように叫ぶ。

「うがーっ！ なんやねん。うちがエセ関西弁喋つて悪いんか！？ 確かに関西弁じやないよ！ それどころか原型すら留めてないよ

！」

「逆ギレか…、しかも別にお前のヒセ関西弁について驚いてる訳じやないと思うわ」

「ほつといでーな！ どうせうちなんて引き籠もりで陰氣で関西弁っぽい上に、喋ってる事なんて殆どその場のノリやもん！」

「その場のノリなのか」

「…あの」

「なんやねん…」

がるるるるる。ヒ今にも噉み付きそうな、女子の仕草としては少し心配になる勢いで睨みつける途上に、少し萎縮しながら勇気がわきやかに述べる。

「…逆ギレの意味が違うと思いますが」

それに対しても、今の今まで固まっていたパトリが慣れた感じでツッコミを入れた。

「まさかのそこに反応するんですか！？」

「ええ、言葉の綾は誰かが正さないといけないと思ひますので」

「いや話の主題は別にあると思ひますよ！？」

「正すべきです」

「話を聞いていない！？」

「無駄だパトリ。」こいつは間違った事に対して絶対に正しい事をする奴だ」

「その方向も随分間違つてますよね…」

「そういう奴だからな」

「……あれ、なんかうちこつの間にか放置プレイされてへん！？」

カオスという表現が似合つであろう状況。慣れない土地に知り合つたばかりの案内人という、縮こまるであらうコンボなのに俺達は宿

屋まで楽しく会話を続けたのだった。

1

辿り着いた宿屋は女性が言っていた通り、豪華な物ではなく質素な物だった。けれど宿屋という名に恥じぬくらいには大きい。といふかこいつ村でそんな物があつたら逆に凄いけどな。茶色の木造建築である宿屋は同じように丁寧に彫られた木彫りのドアが正面にあり、上にはガラス張りの窓がいくつか。それと屋根は三角形に煙突と、どこか童話辺りにでも出てきそうな至って普通の煙突が存在していた。板だけに。

「…なんですか、寒い」

もはや隠すことなく関西弁っぽく喋る途上。魔法を使えないはずなんだが、何故か気温は比較的温かいのに寒いと言つている。お前はどういう能力者だよ。

「わざと、わざと私が一番乗りで入つていきますよ。休みたいんで

やたら爺臭く喋り、ドアを開け宿屋に入つて行つたパトリ。初めて喋つた頃から思つていたがあいは若い割には達観しているみたいな喋り方をするな。

「私達も入りましょうか」

勇気の言葉を筆頭に勇氣。途上。最後に俺。と宿屋へ入つて行つた。

「いらっしゃい」

入つてすぐに渋い声と共に視界に入つて来たのは、真っ直ぐ先に俺達と同じような設置されたカウンターに居座る男性だつた。しかし先に入つていたでろうパトリと話をし始め、直ぐにこちらから意識を逸らした。想像していた物より中は広く、玄関は外と同じように地面のまで、隣には靴を入れる下駄箱らしき棚が設置されており、地面から一段上がつて木造の床となつてゐる。しかし大人数というよりは十人程度の人が固まれば狭く感じるだろう。天井にはランプらしきものが取り付けられているが、今現在点けられてないつて事は夜になつたら点けるんだろうな。

「わあ……！」

同じく中に入つていた途上が嬉々とした声を上げたかと思うと、足早に靴を脱いで下駄箱に入れて激しく水色の髪を揺らしながらカウンターとは別の所へ向かつ。その先には奇妙な猫が一匹。猫っぽい体つきに黄色と茶色の毛並みに可愛らしく伸びた尻尾。ここまで一緒なのだが……、尻尾が、尻尾が一本ある。狐かお前は。

「ふしやああああ

猫っぽいそいつは全身の毛を逆立たせ、お尻を上げて頭部を下げているという威嚇のポーズを途上に取つてゐる。

「ふにゃあああ可愛いいいいいい

対して途上は何故か目を輝かせながら、猫らしきものを前かがみで眺めて悶え苦しんでいた。…と、途上？ キヤラが崩壊してゐぞ。

「新崎。宿屋の御主人が呼んでますよ」

「あ、ああ。すまん」

思わず途上の方に意識が行つていいたせいで、玄関で立つたまま硬直してゐるという謎の構図が出来てしまつた。いかんいかん。

俺は靴を下駄箱に入れると、途上以外が立つカウンターへと向かう。そこには最初に声だけを掛けてきた男性がこちらを見据えながら座つていた。服装は相変わらず温かいのに厚着で、男性の目付きは柔らかく、物腰や雰囲気から優しい人なのだろうという印象を受ける。

「初めてまして、家内から話は聞いているよ

「初めてまして、新崎です」

手を差し出してきたのでこちらも差し出し握る。握った手は温かく、それでいて力こそないものの一種の逞しさを感じた。

しかし一旦手を離すと優しそうな雰囲気は雰囲気なのだが、業務用の笑顔へと切り替わる。

「お部屋はすぐ左の扉の先にある階段を昇り、一階のすぐ右側二つの部屋と左側の二つ部屋の計四つですね」

男性は部屋の右側を手のひらで示したのでつられて見てみると、右

側の壁に扉が設置されていた。この先に階段があるのだろう。

「いらっしゃがその四つの部屋に対応したそれぞれの鍵です」

ちやり。とこちらから見ると死角に当たるカウンターの内部から男性は鍵を取り出し、俺の前に差し出してくれる。銀色で微弱だがそれぞれの先端の形が違う。

「食事に関しては夜と朝のコースで、右の扉の先にある食事処で準備させて貰います」

左を同じように指示したので、またその方向を見てみれば扉が一つ存在している。少し左側には楽しそうに、抱えた荷物に乗つかつているウーハーブのかかった髪を揺らす少女の後姿が見えた。

「以上で説明を終えさせて頂きます」

「いえ、ありがとうございます。助かりました」

ペコリとお辞儀をする男性の真摯な態度に、俺は若干負い目を感じられずにはいられない。たかが一般人が宿に泊まるだけで、そこまでして貰う必要もない気がするぞ…。

俺は借りた鍵をまずパトリと勇気に渡し、次に夢中になつて周りが見えていない途上に鍵を渡す。

「わーてさて。私はわざと部屋でぼつこり爆睡させて頂きますか」

パトリが擬音語としてどうかと思つ詠葉を喋り、颯爽と扉を開けて奥へと消えていった。

「荷物を部屋に置いてきます。お先に」

「おひ」

勇気も続けて部屋へと向かつ。

「…次は途上か」

といつても途上は未だよく続くと思う威嚇をしている猫を眺めては嬉しそうに騒いでいる。どうにも話しがけ辛いが、ここで一人にして置いて行くにも気が引けた。…といつより置いていつたら「あ、あれ！？」みんなどこいつたん！？」と後々気づき、カウンターの男性に聞いても言葉は分からず、往生して最終的には再度聞くといつ悪循環になるのが目に見えているしな。

「『猫又』ってこうんです」

二コ二コと柔和な笑みを浮かべて、カウンターに頬杖をつきながら俺に話しかけてくる男性。仕事が終わって暇になつたのか？

「猫の名前ですか、それとも種族名ですか？」

「もちろん種族名ですよ」

「…名前の方は？」

「ミントです、可愛らしい猫又でしちゃう。」

「可愛らしい猫又といわれましても、猫又自体初めて見ましたが」

まあ、猫として考えたら普通に愛くるしいのだひつ。尻尾は一つあるけどな。

「…猫又っていうんですか」

こいつの間にか話に混じっていた途上が、先程までのハイテンション

とは打つて変わって、人前の時の正に猫被った状態となつてゐる。といつても男性の言葉は分からぬんだうが。

「ミントってこうりしげ、その猫又

「ミント…」

「まあその話はいいんだ。途上も早く自分の部屋に行つて荷物を置いて來い」

「…え？」

やつぱり話を聞いてなかつたか…。俺は溜息を尽きつゝ途上に説明をすると、途上はこくりと頷いて部屋の方へと向かつた。その背中はやけに物静かだつたが、少し遊べないといつ事が分かつてテンションが下がつているのかもしれない。

「では、俺も荷物を置きに行つてきます」

男性に軽く礼をしつつ、俺も部屋へと向かう事にした。

- Episode:10 「第一プラン・村巡り」 - (後書き)

次の投稿は再来週です。来週は実家に帰る予定が入っています。

荷物を置き終えた後は今後の日程を決める為に俺の部屋に全員集まつていた。部屋は木目の人った板が何十にも床や天井に張られ、部屋の隅に木のベッドに羽毛らしき毛布があり、他にはでかい時計と荷物でも置くであろう小さな机が壁にそつて置かれている。

パトリはベッドの端で腰を据えながら座り、途上は木の四脚イスを背もたれ部分を反対にしながら持たれるように座り、勇気は全快にさせた窓辺近くで腕を組みながら壁に腰掛けていた。俺はと、背もたれの無い丸い椅子に座りながら話していたのだが、途中でふと思い出したのでパトリに聞いてみた。

「そういえば、森で使つたあの魔法ってなんだ？」

「魔法ですよ」

「風？」

「風。」といつ單語に俺は少し過剰に反応する。「属性があるんですよ」とかいう話になつたら、俺は確實についていけないからな。

「一応は属性の一種なんですが……、正直に言つと大して属性って意味がないんですね。攻撃魔法以外に使い道のない専門用語になりますし」

「そ、そうか。それは良かった」

「何か不都合な事もあるんですか？」

「いや、じつちの話だ。続けてくれ」

妙に焦る俺に違和感を感じたのか顔を少しだけ顰めるパトリ、しかし聞いていても仕方が無いと判断したのか直ぐに解す。助かった。

「魔法にも難易度がある事は知っていますか？」

「魔法に掛けられた難易度…。以前師匠が途上に対して少しだけ授業で説明していたな。

「大規模な魔法や想像の難しい魔法なんかになると、魔力を大量に消費する上に想像を維持し続けないといけないって奴か。言葉だけなら知ってるぞ」

「それです。といつても前者である魔力を大量に消費するという奴は知識を深める事によつて魔力消費を抑える事が出来ますよ」「どういうことだ？」

「例えばですね、貴方が怪我をした人に対して治癒魔法をしようとします。怪我がどのような物かが分からないので『怪我が治るビジョン』っていうのを想像して魔法を使いますよね」

「そうだな」

「しかし、ここでもし医療に関しての知識があつたとします。すると怪我がどの程度なのかどの症状なのが分かるので、『症状に合わせての治療ビジョン』を想像出来ます。それによつて必要最低限の魔法を使用するだけになるんですよ。つまりところ、余計な魔法を使用する事がないから結果として魔力の消費を抑える事になるんです」

「…つまり怪我全体を治さず、根本の問題となつている所だけを治すつて事か？」

「はい。無駄な所ごと治す必要はないですからね」

無駄な所を省いてその分工ネルギーを浮かす。それは勉強にも似ている部分があるな、あれも全体をするのも確かにいいが、わざわざ習っていない所や範囲外の所までする必要はない、返つてしまえば疲れてしまうだけだ。

「応用すれば色々な魔法に使えますね」

「もしかして、空を飛んだ事と関係あるん？」

これまで俺とパトリだけだつた話に、勇気が想像を巡らす言葉を咳き、途上が目を輝かせながらパトリに質問して来た。

「ええ。あれもわざわざ空を飛んでこるのはなくて、周りの風を使って歩いているだけですよ」

「あの森での攻撃も！？」

「え、ええ。強風で身動きを封じつつ空高くまでジャンプした上で、敵だけを風で叩き潰しました」

子供のように無垢な瞳をパトリに向けつつ詰めよる途上。若干パトリは実つた稻みみたいな三つ編みを揺らしつつ、詰め寄られる」ところろへ下がつていて。…ある意味面白い絵面だな。

「さ、さてとそろそろ夕飯の時間でしょうかから下へ降りましょうか。といつか私が先に食事処に行つてますー！」

耐え切れなくなつたパトリが逃げるようにして途上を避け部屋のドアを開けて出て行つた。もしかしてあいつは押されるのに弱いタイプなのか？

「むー」

頬を膨らませながら冷めた目付きで逃げた方向を見つめる途上。まあ俺もあんな風に詰め寄られたら逃げなくなる、本気で。

そんな途上に勇気はクスリ。と珍しく笑い、黄色く束ねられたボーテを上下に揺らしながら途上へと声を掛ける。

「私達も食事処へ行きましょうか」

「せやな」

「なら俺も付いていくとするか」

出て行こうとする途上と勇氣に続いて俺も部屋から出て行き、木で作られたドアノブの差込口に鍵を差し込み半回転ほどわせて鍵を掛けた。

「わあ……！」

二階の廊下を照らすオレンジ色の炎。それは天井にカンテラのような物が吊るされており、中にある蠅燭の先端である今尚解け続いている場所から出ていた。何というか異界の文化は和風なのか洋風なのか分かりづらい。強いて言うなら和洋風に独特のセンスを付け加えたような感じがするのは俺だけじゃないはずだ。

その独特な雰囲気に感化されたのか感動を受けたのか知らないが、途上が鼻歌を歌いながら廊下を小走りで駆けていく。勇氣は子供の様子を温かく見守る母親のように、特に何も途上に言わず、ただただ見つめながら微笑んでいた。いや、走ってるんだから注意しろよ。

「あ

勇氣と言われて思い出した。

「どうしました？」

「いや、勇氣が腰掛けてた近くの窓を閉め忘れていた。俺は一旦部屋に戻るから先に行ってくれ」

「了解しました」

「すまん」

俺は急いで自分の部屋に戻る。一度来た所を一度も通るなんて面倒な事は出来るだけやりたくないが、窓を閉めないのもさすがにな。鍵を回して入つてみると廊下とは違う形状のカンテラのような奴に火がいつの間にか付いており、部屋全体が明るく照らされている。

「ん？」

窓を閉めようと手を掛けた所で、外で歩くパトリの後姿が見えた。
「あいつ食事処に行くとか言つてたが、どこに行くつもりだ？」

何となく興味を持った俺は窓を閉め、戸締りをして後を追うことにしてみた。もちろん勇気には宿屋を出る途中で出かける事を伝えてるので特に心配はない、あいつらも勝手に飯を食つてるだろ？

農村の夜道は暗く、周りで林が揺らいではざあつ、ざあ。と葉が互いに擦れ合う音がして、人の怨念が籠つた声に聞こえなくもない。パトリが歩いていた方向に向かつてただただ走つて追いかけてるんだが追いつくんどうか、いつの間にか森に入つて一人遭難するとかいつたら洒落にならないな。

数分すると、俺の懸念だつたらしくパトリの後姿が見えてきた。

「パトリ」

「えひうー？」

びぐう！　と猫の毛が逆立つように身体を大きく震わすパトリ、

お前は途上か。

ロボットのようごときちなく身体を硬くさせ、後ろから聞こえた声

の人物を確認する為に振り向いていたが、俺だと分かつた途端に安堵の息を洩らす。

「あ、ああ。なんだ新崎さんでしたか、驚かさないで下さりよ
「別に驚かすつもりは…、うん。なかつたぞ」

「確信犯じやないですか…！」

「まあ、そんな話をしに来たんじゃない。パトリ、お前はどうに行
くつもりなんだ？」

ただでさえ眠たそうにも見える細い綺麗な琥珀色の眼を、更に細めるパトリ。もはや眠たそう依然に意識が朦朧としてる一歩手前にしか見えないぞ。

「ギルドですよ

「ギルド？」

またややこじこじの専門用語が、俺の頭でどこまで覚えられるもんかね。

「依頼専門商業です、簡単に言えば何でも屋みたいな物ですよ。そこに休暇届けを出しにこいつもつてました」

そういうやさつきまでパトリは途上に迫られて対応に困ってたな、食事をしながら捕まつたらたまつたもんじやないからこいつして用事を立てている訳か。

よし帰るか。そう思つて俺は来た道を戻りつとしたが、パトリに右腕を掴まれた。

「一度いい機会ですから、こいつで職に就けさせてあげますよ」

は？

唚然とする俺の腕を引っ張りながら、再び立ち止まっていた足を動かし歩くパトリ。ついでに俺もそれに合わせて歩かないとつまづいてこけるので、半ば強制的な形で歩かされる。

「ちょ、ちょっと待て。職に就くってどうこう」とだ

「そのまんまで

「待て待て待て、ちゃんととした回答になつてない、なつてないぞ」「うるさいですね、男ならぐだぐだ言つてないでキッパリスッキリさせましょ」

「おいおい……」

そういうじでいる内に俺はパトリに引っ張られて道を進んでいく。そんなこいつに俺は溜息を尽きながら、諦め気味に反抗していた力を弱めたのだった。

たのに対して、こちらは完全な洋風のと出入り口らしき扉の上に可愛らしく木製の看板が付いている事ぐらいだ。そこには読めない文字で何か書かれている、何だあの文字…。

「おじやましますよー」

パトリを先頭に可愛らしげ看板が上にある扉を開け中に入ると同時に、カラソロロン。と鈴のような軽い音が辺りに響く。

「あ、いらっしゃいませ」

それに伴つて高く明るい声が響くと同時に箒を持って掃いでいる女性が視界に入った。服はパトリと酷似しているが腰の所に皮ベルトを巻いており、全体的に茶色で着色してある。更に帽子は被っていないので長くすらりとした黒色の髪がベルトの所まで伸びていた。パトリが静かで可愛らしい少女ならば、落ち着きと美麗を兼ね備えたのがこの女性と言う所だろうか。

俺達が入った部屋はまず家は木造、こいらへんは先程まで居た宿屋となんら変わらない。出入り口である扉の前にはマットレスが敷かれており、綺麗な薔薇の模様が描かれている。部屋の中央にはこちらとの接触を区切るかのように大きな柵のような仕切りがあり、奥の方では大量に積まれた書類や何かを入れているらしい巾着が見える。部屋の真ん中で堂々と仕切りがあるその風景はまるで古い映画なんかに出てくる銀行なんかを連想させられるな、といつても女性は仕切りより一いちばん側で掃除をしているんだが。

「お久しぶりねパトリちゃん、用件は何かしら?」

「休暇届けの手紙を預けたいんで」

知り合いらしいがパトリは特に表情を変化させる事なく、服の内側に手を突っ込んだかと思えば封筒を取り出してきた。それを見た女性は軽く眼を見開いて驚嘆の声を出す。

「え、休むつもりなの？」

「はい」

「そう……、珍しいわね。仕事熱心の貴方が……」

「いえ、先代魔王様のご意向ですよ」

すると今まで曇った表情を浮かべていた女性は、一転して晴れ晴れとさせた。どうやら女性の中で何か合点がいったらしい。

「あー分かりました、そういう事ね。手紙はちゃんと配達人に頼んでおきます」

「頼みます、それとも一つお願いがあるんですけどいいですか？」

「？」

「隣で棒立ちしてるこの人をギルドに入れてやつてくれませんか」「は？」

もちろん疑問の声を出したのは俺だ。

「待つてくれ、俺がいつ

「ギルドだか何だか分からない物に入るって言つた……。でしょ？？」

「分かつてゐるなら

「あのですね、世の中を甘く見すぎです

ピシリ。と今まで俺の周りにあつた生暖かい空気が一瞬で変貌して、肌寒さを感じる冷ややかな物となる。

「貴方達の目的は、精霊の元に行つて勇者様の剣を手に入れる事でしょう？ それまでの生活費交通費諸々なんかはどうするんですか？」

「そりや…」

仕事をしなきゃならない。と言い掛けで言葉の意図に気づいた。

「こつちで生活の礎を築くつていうのなら分かります。でも貴方達はあくまで”それ”を取りに来ただけですよね、まあ下手すれば一年以上かかるかもしだせんが、それでもこちらにいるのは数年程度でしょう？ 居住地を転々とする冒険でも構わなく、それでいて金が出るなんて美味しい仕事はギルドに入る以外に私は知らないですよ」

パトリが薦める以上は、”ギルド”と呼ばれる組織か企業かは安全かつ保証は出来るのだろう。しかし…。

「…それはそうだが」

いまいち実感として沸かない、学生で仕事に就けなんていわれて冬。中卒の奴で即就職している奴とかの話も聞いた事はあるが、やはりまだ仕事に就く自分の姿となると現実味に欠ける。

「あ、もしかしてギルドの仕組みや制度を説明してないから不安なんですか？」

「いや違う、単純に仕事をする年齢かといわれれば微妙だな。と思つてだな」

「何を言つているんですか、これくらいの背の子供だって働けるご時勢ですよ？」

そう言いながらパトリは自分の腰元に合わせるかのよつて、右手の平を地面から水平に置く。

「ちょっと待て、まだその背丈つて6歳ぐらいだろ」「そうですよ、この国では6歳を迎えたたら立派な大人として扱われますから、このくらいから仕事に就きます」

「学校はないのか？」

「魔法学校と仕事は両立出来ますよ、これくらい常識じやないですか…。って貴方は向こうの出身でしたね」

ところが、この事はパトリやこの女性や宿屋の人達も、パトリの言うようにかなり小さな頃から働いているのか。うーむ、異文化って面倒だ。

「魔法学校は大方予想が着くとしてギルドの説明をしてくれ、何も言われないで勝手に決められると宗教勧誘みたいで恐ろしいからな」

すると、今まで従順だったといつか素直だったパトリが一瞬だけ膨れつ面をして、また直ぐにもとの表情へと戻しつつ説明してくれた。

「…ギルドは依頼制の組織です、単純に言えば何でも屋みたいな物ですよ」

「何でも屋か…」

しかしそれつき聞いた時も思つたが、面倒事を嫌うタイプの俺とは合わなさそうだ。若干落ちし始めている俺に、いつのまにか話から抜けていた女性が紅茶の入ったカップを「どうぞ」と言いながら渡してくれる。そういうえば話の途中からいなくなつていたな。

女性はパトリにも渡すと、部屋中央を仕切る物の上に置いてあつた紅茶の入つたカップを手にし、壁に寄り添うようにあつたソファら

しき物に腰掛けながら呟いた。

「メインは魔物狩りだからそろ露骨につまらそうな顔をしなくていいわ。といつても最初の内はパトリちゃんが言っていた通り何でも屋みたいなものだけね」

俺とパトリも続いて、空いた場所を詰めるように座る。

「依頼制というと具体的にどういった物なんでしょうか？」

「んーっとね、あそこ見てくれると分かると思うけど、掲示板」

左手で紅茶を飲みつつ、空いた右手で反対側の壁を指し示す女性。そこには焦げ茶色で長方形の物が掛けられており、枠外に出ない程度に大量の紙が貼り付けられていた。

「ギルドのシステムとしては、まず何かに困った人がギルドに依頼する、次にその依頼を承ったギルドがギルドメンバーに提示する、それがあの紙なのだけれど。もし今貴方が入った場合はあの中でも最低ランクの依頼しか受けさせられない、まだ経験も信頼も得てないのが大きいわね」

「金額とかはもしかして依頼内容によって変動するんですか？」

「ええ、ランクが低いほど簡単で安全だけど安くなる。そこらへんは自分達でよく考えて答えを出してね、…といつてもさつきも言った通り最低ランクしか受けさせられないから、最初の内は割り切つて欲しいけどね」

小さく置かれた長方形の座高が低いテーブルにカップを置き、女性は柔軟な笑みで答える。そんな女性の説明を聞きながら俺は思った。

なんというか、ありがちな設定だ。この手のシステムは俺でも知つ

てこるくらいにゲームや映画などによく出でてくる。

「ギルドに入ると確かに束縛はないけれど、代わりに実力が物を言う組織だから楽なんて思ってはいけないわ。今日はとりあえず一旦帰つて、それでも入りたいっていうならこういったギルド専属の建物に来なさい。私を含めてギルドは誰隔てなく受け入れるから、入るのに苦労はしないはず」

そう言つて女性はカップを持ちながら立ち上がり、「紅茶が飲み終わるまで居ていいからね」と囁いて柵の端にあつた扉から部屋の奥へと消えた。

残されたのは、パトリと俺の二人だけ。

「ん？」

そこで感じたのは、右腕が重いという言つてゐる俺すらも意味不明な謎の違和感。正体を探るべく横を見てみると。

「……」

スゥー、スゥー。と小さな寝息を立てながら眠たそうだつた瞼を完全に下ろし、右腕に身体を凭れさせていたパトリがいた。

「そういえば眠たいとか言つてたな、…ああ、あの人があざけ声だつたのもこれか

ふと思い出しつつ謎を解いた俺は、再びパトリを見る。

帽子を深く被り大人びた冷めた口調を喋つていた少女は、打つて変わつて子供のように可愛らしく熟睡していた。さすがに、起こす気

も失せる。

「な、お言葉に甘えて、起きるまでこの紅茶でも飲んでるか」

俺は隣で寝ている奴に衝撃を『えないよ』とゆっくりと動き、カップを掘みながら湯気の立つそれを飲んだ。

「…………？」

紅茶をたかがお茶の派生だと思っていた俺の常識を覆すほど、美味かつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6903x/>

幼馴染みは勇者と魔王の娘。

2012年1月8日19時54分発行